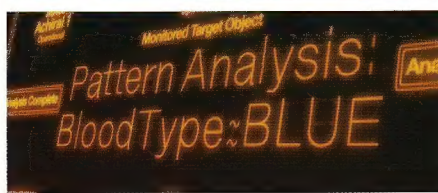
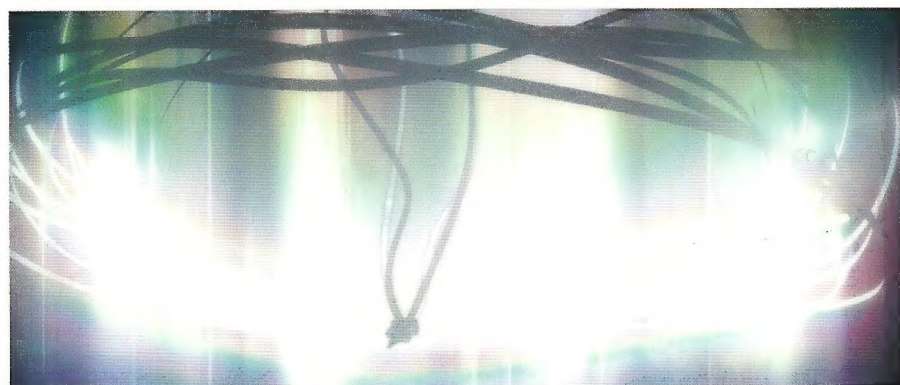
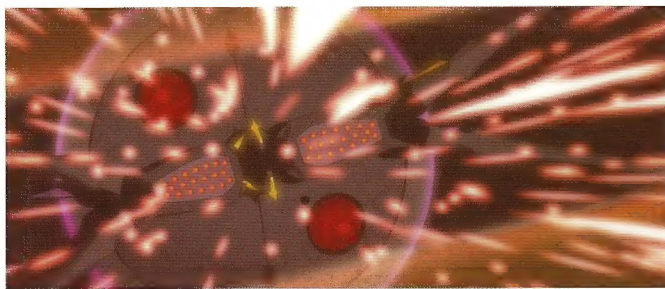


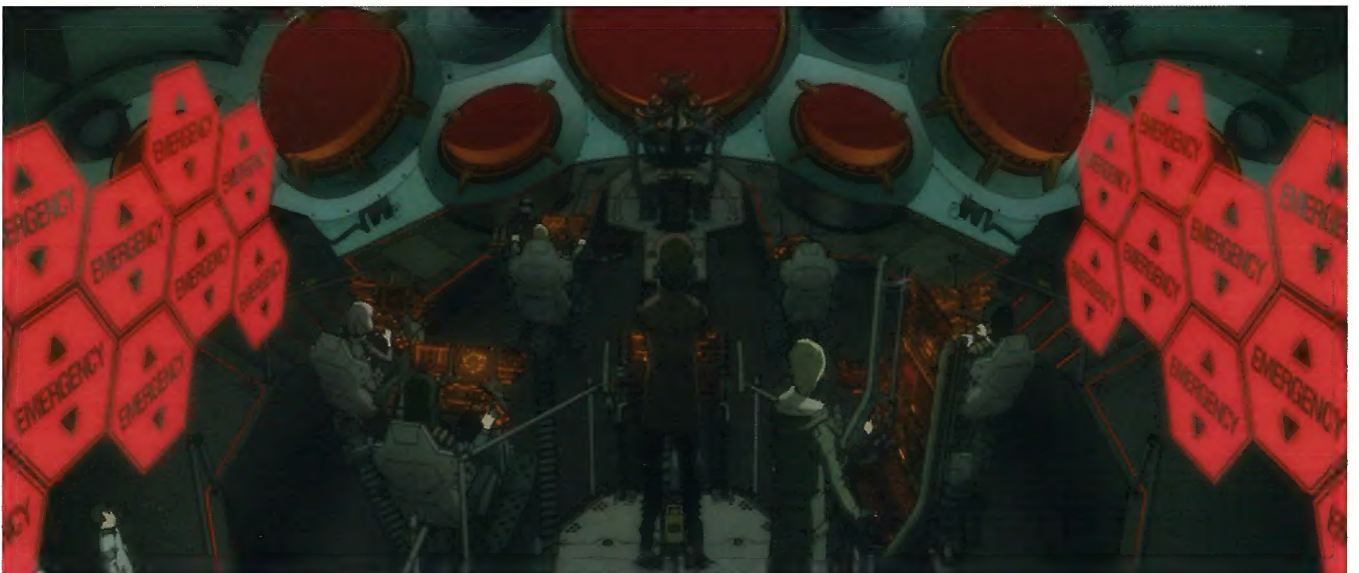
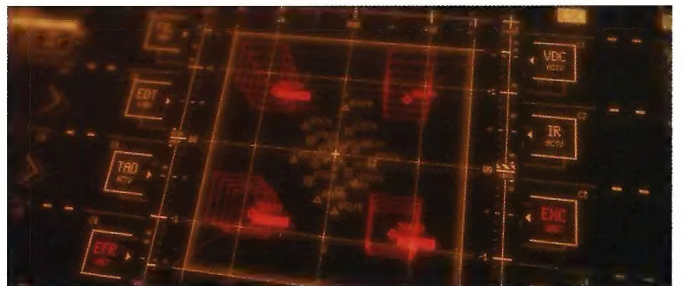
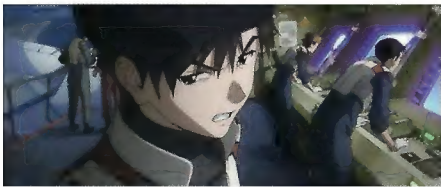
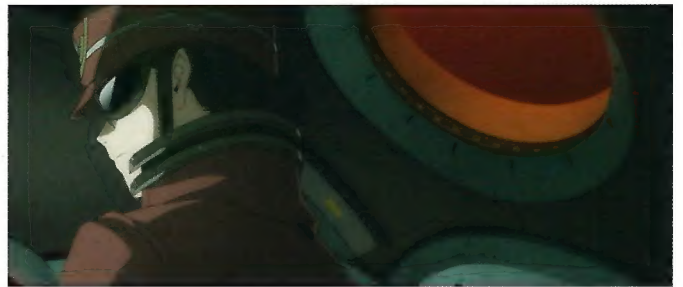


EVANGELION 3.0
YOU CAN (NOT) REDO.

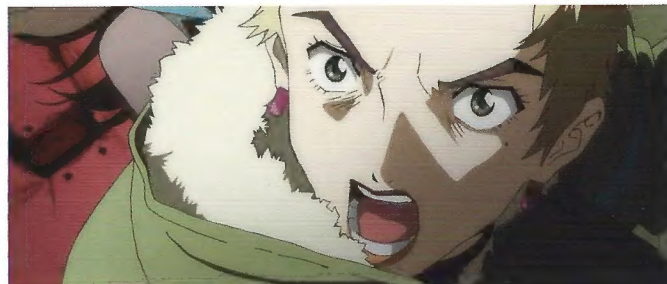
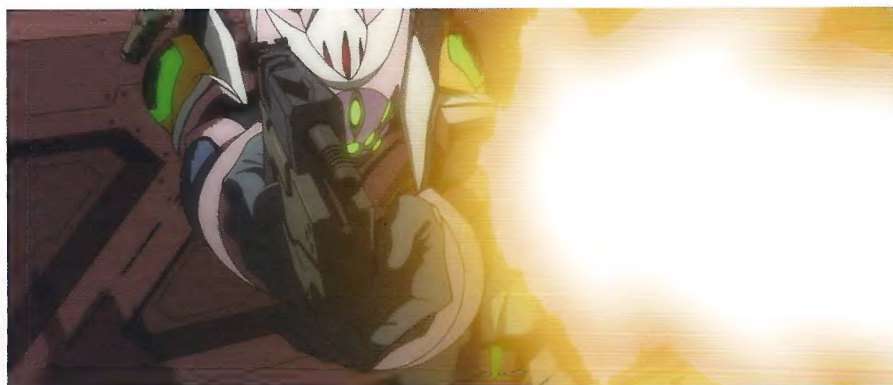
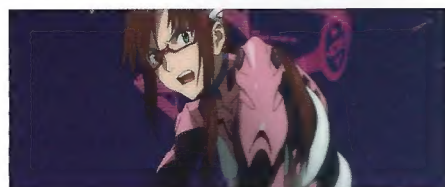
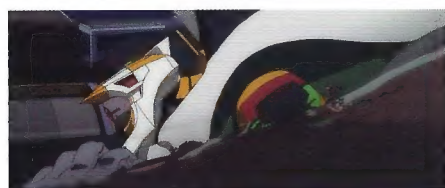
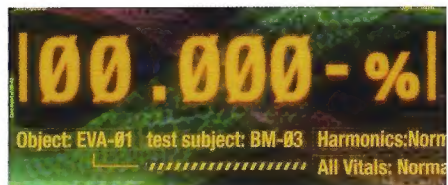
エヴァンゲリオン 新劇場版 .. Q

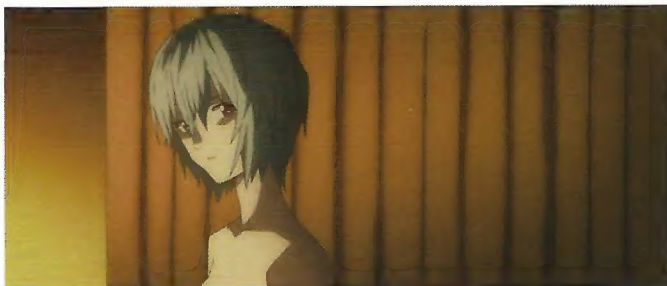
記録集

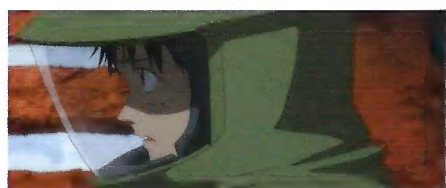
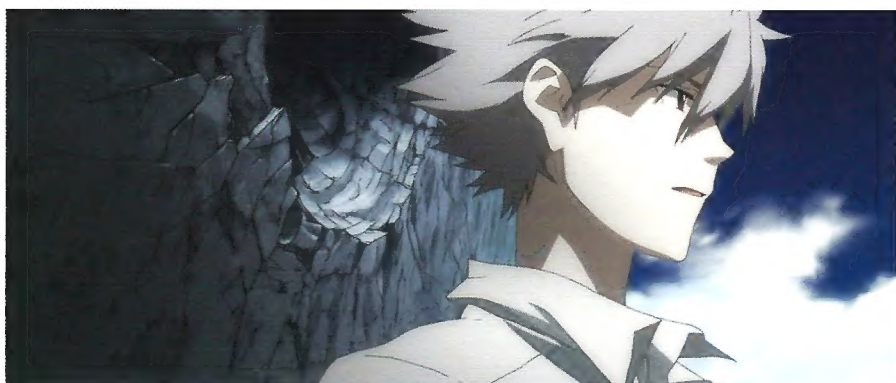




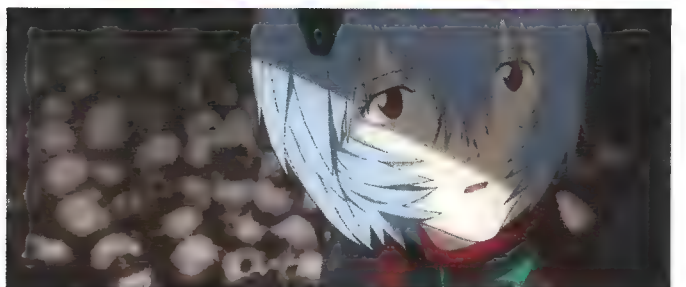
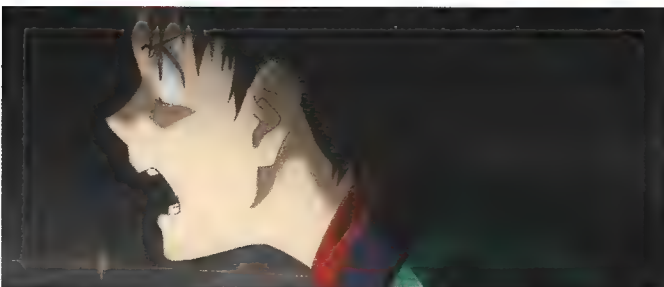
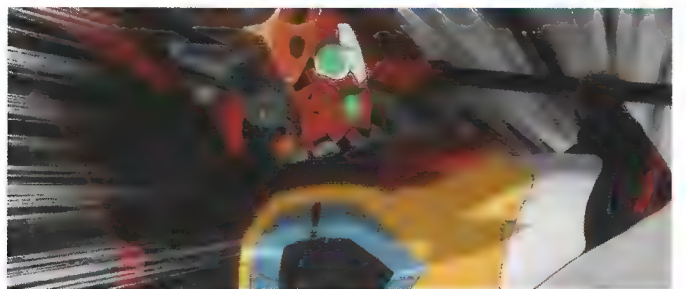
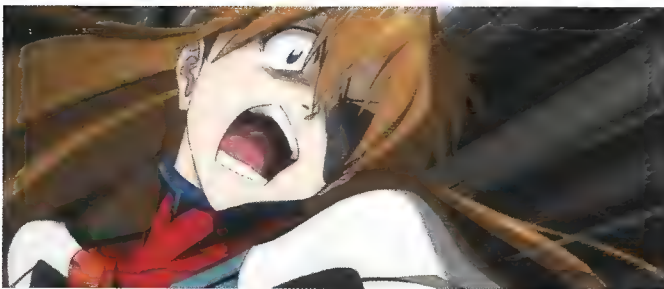
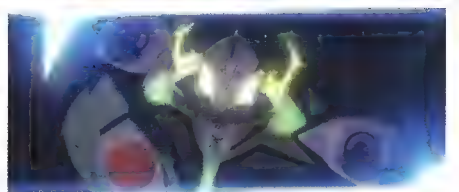


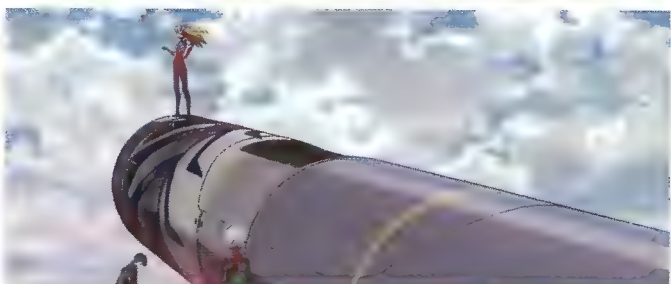
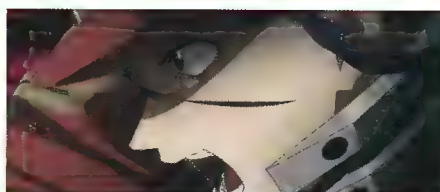














桜流し

開いたばかりの花が散るのを
「今年も早いね」と
残念そうに見ていたあなたは
とてもきれいだった

もし今の私を見れたなら
どう思うでしょう
あなた無しで生きてる私を

Everybody finds love
In the end

あなたが守った街のどこかで今日も響く
健やかな産声を聞いたなら
きっと喜ぶでしょう
私たちの続きの足音

Everybody finds love
In the end

もう二度と会えないなんて信じられない
まだ何も伝えてない
まだ何も伝えてない

開いたばかりの花が散るのを
見ていた木立の遣る瀬無きかな

どんなに怖くたって目を逸らさないよ
全ての終わりに愛があるなら

Produced by Utada Hikaru

Music by Utada Hikaru and Paul Carter

Words by Utada Hikaru

Arranged by Utada Hikaru and Paul Carter

Strings Arrangement: Utada Hikaru, Paul Carter and Kawano Kei

予告

生きる気力を失ったまま放浪を続ける碓シンジ。

たどり着いた場所が彼に希望を教える。

ついに発動する補完計画。

ファイナルインパクト阻止のため、最後の決戦を挑むヴァレ。

空を裂くヴァンダー！ 赤い大地を疾走する、エヴァ8+2号機！

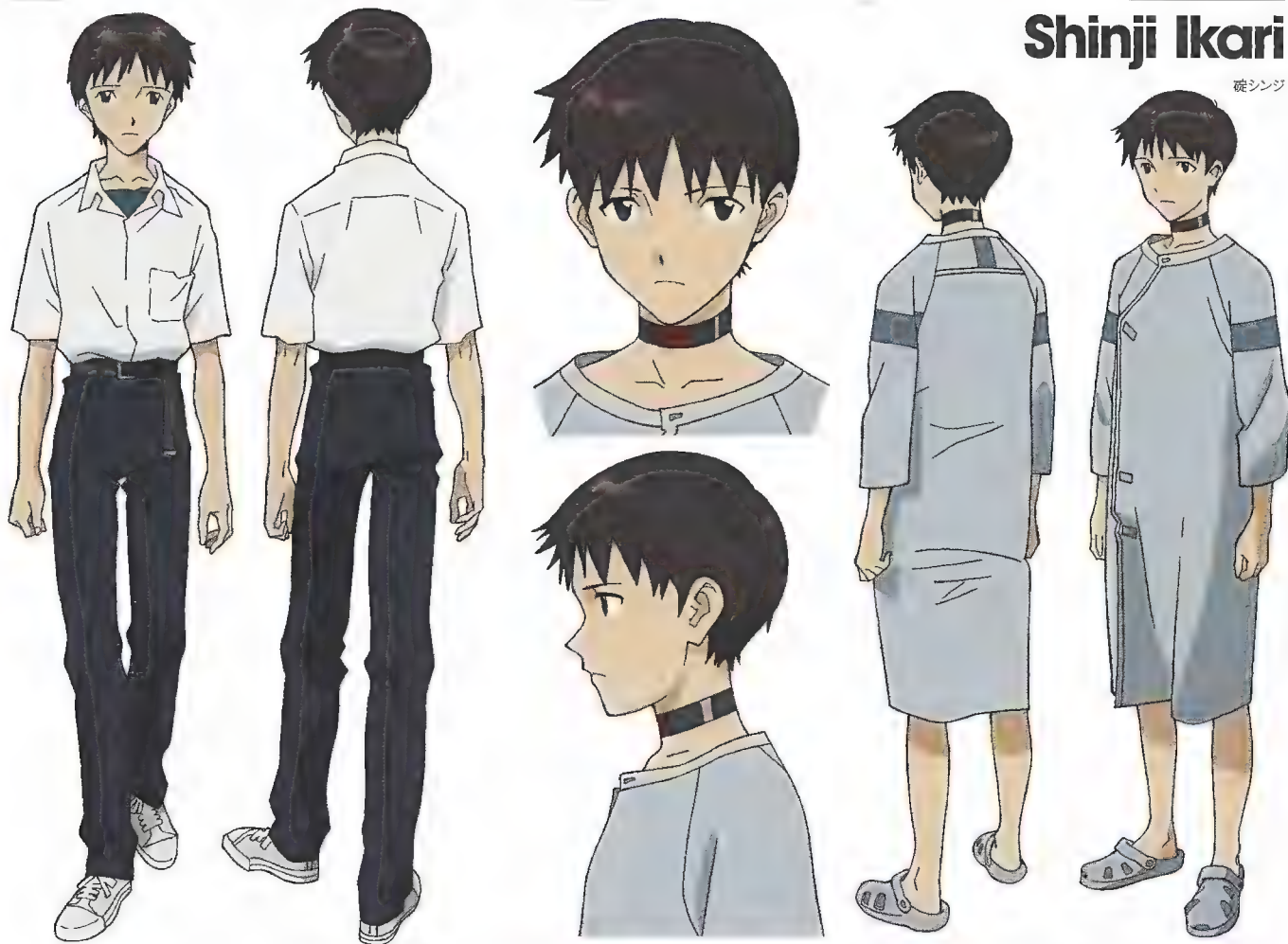
次回

シン・エヴァンゲリオン劇場版:||

さあ〜て最後まで、サービス、サービス♪!

Shinji Ikari

碇シンジ



Kaworu Nagisa

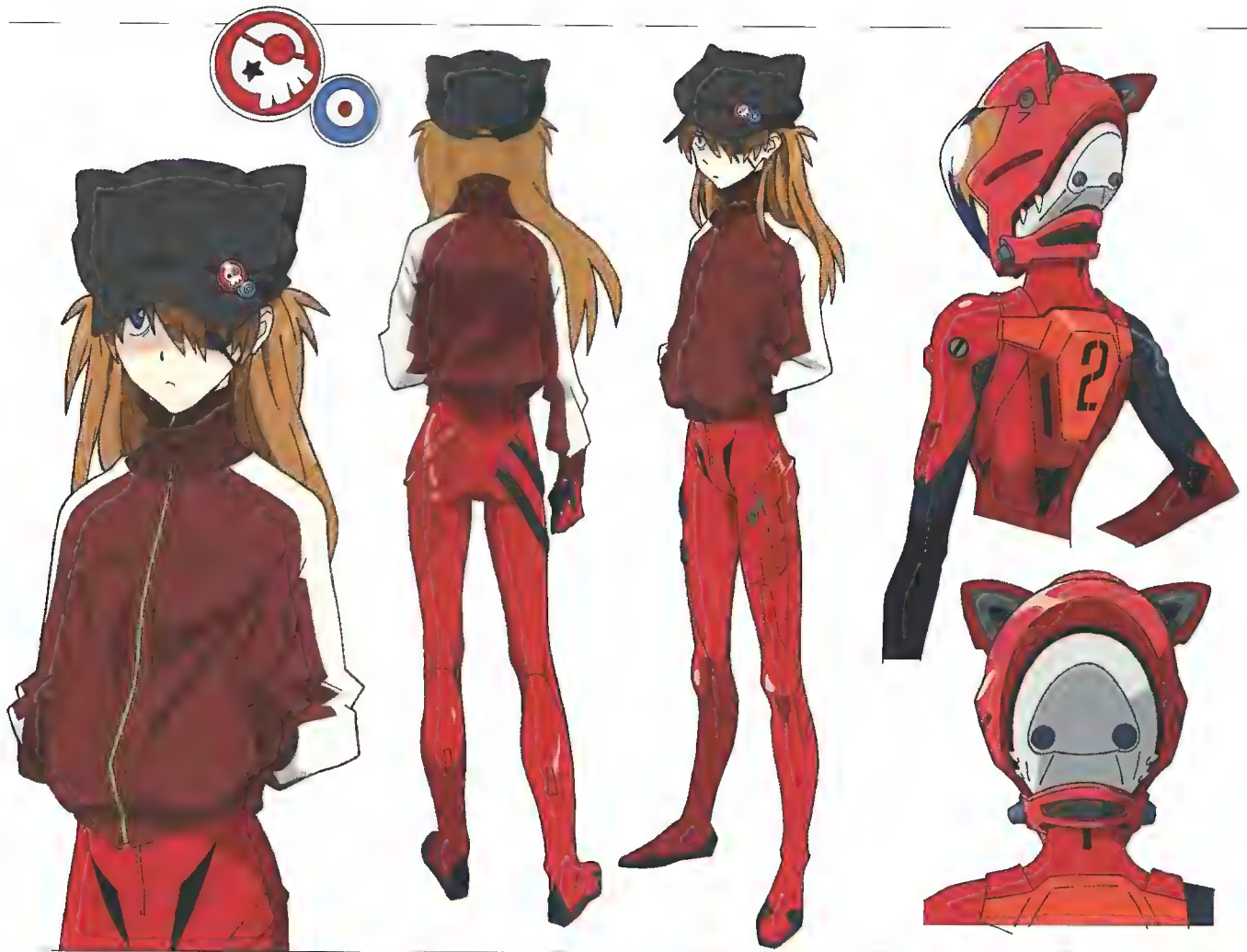
渚カヲル



Asuka Shikinami Langley

式波・アスカ・ラングレー





Mari Makinami Illustrious

真希波・マリ・イラストリアス（上段・一番右のみ「破」設定）



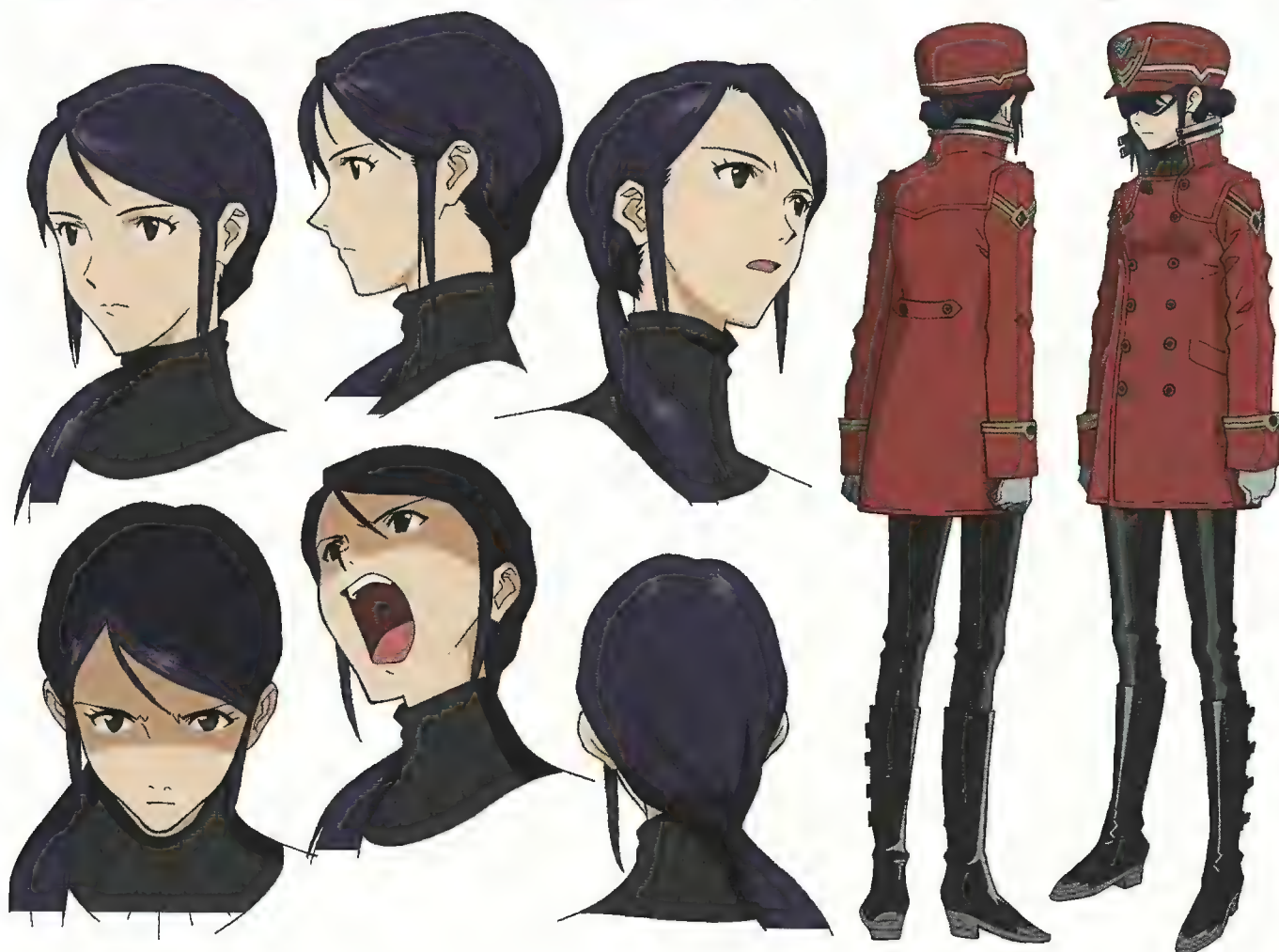
tentative name : Rei Ayanami

アヤナミレイ (仮称)



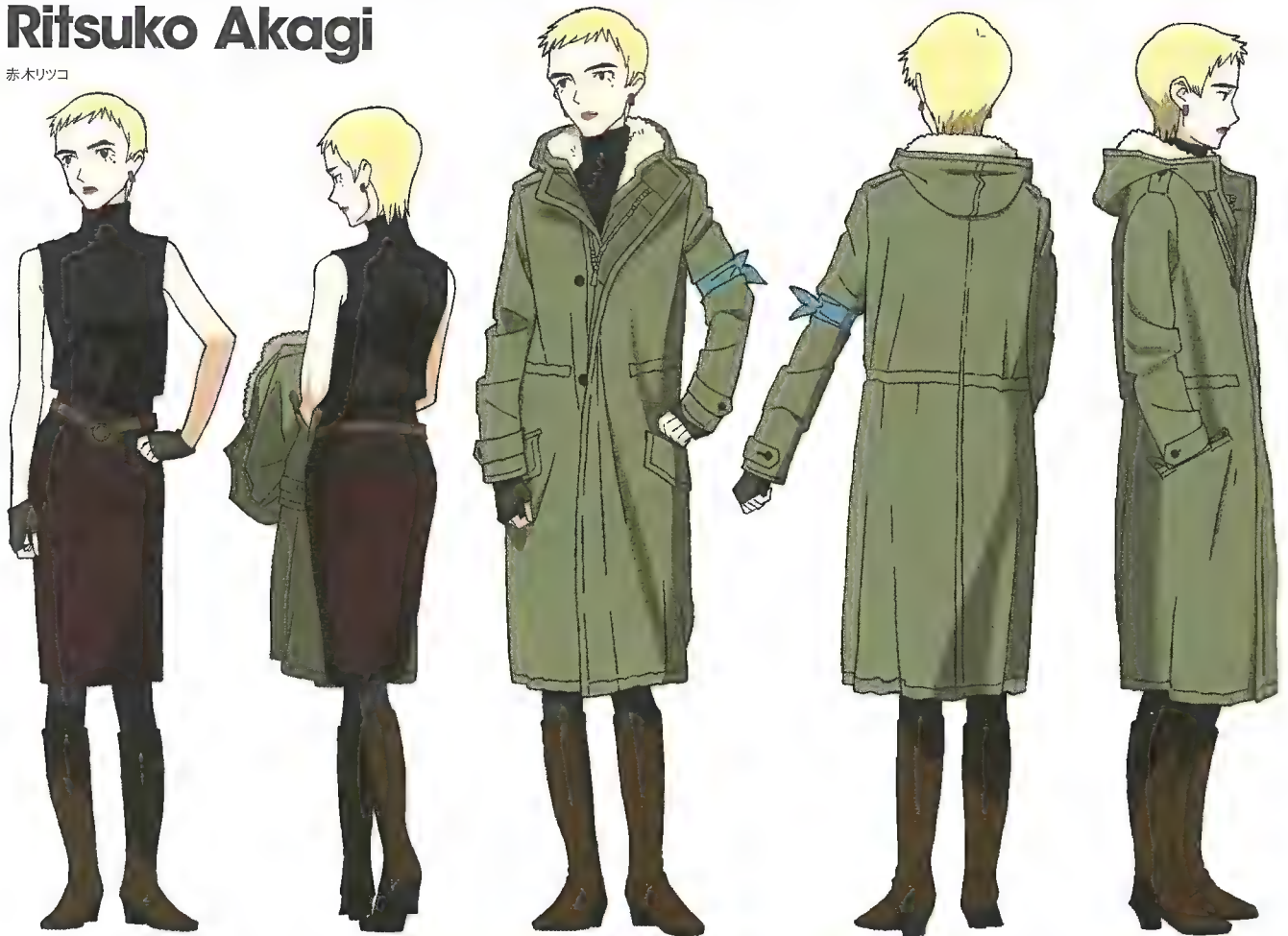
Misato Katsuragi

葛城ミサト



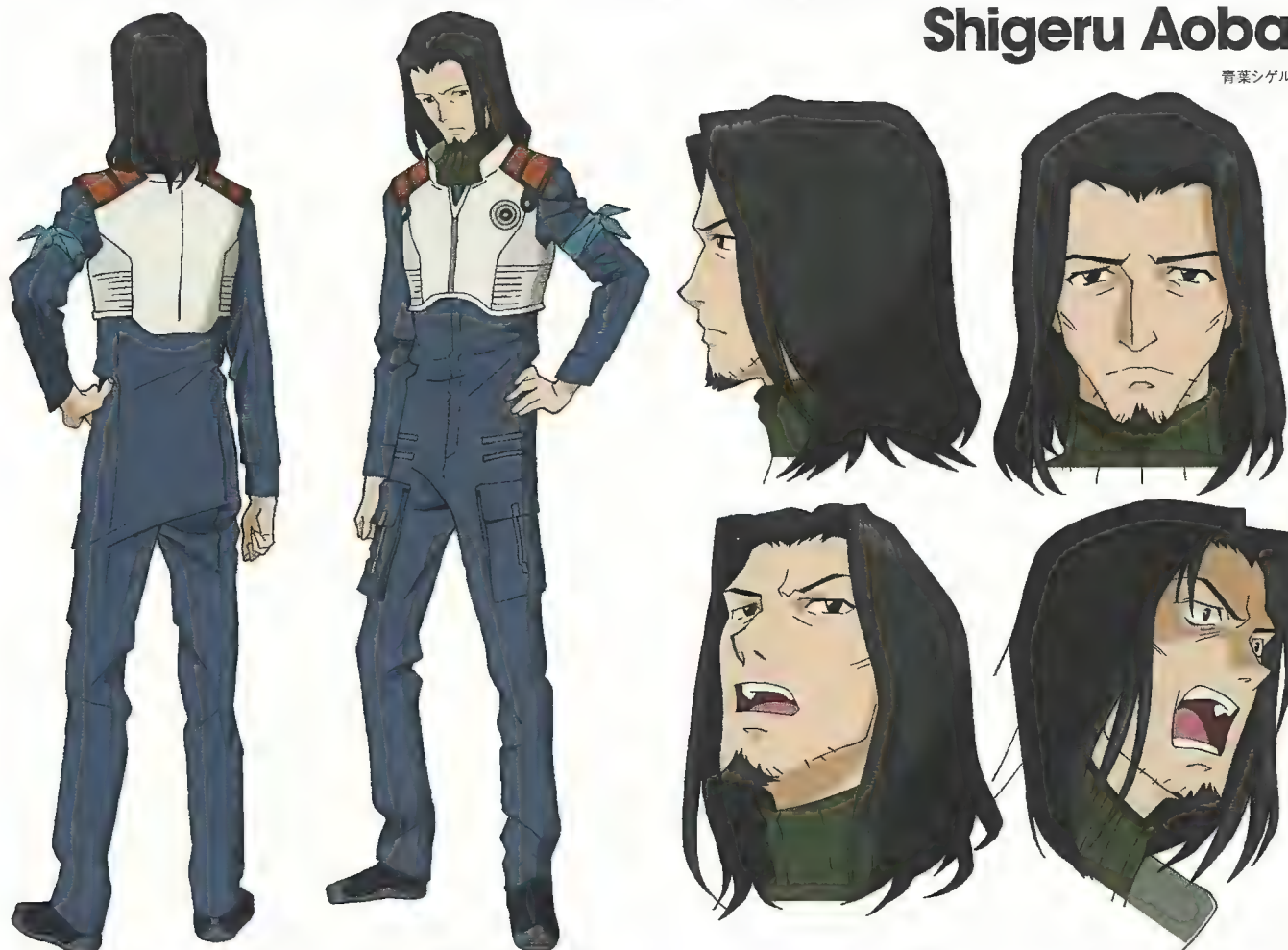
Ritsuko Akagi

赤木リツコ



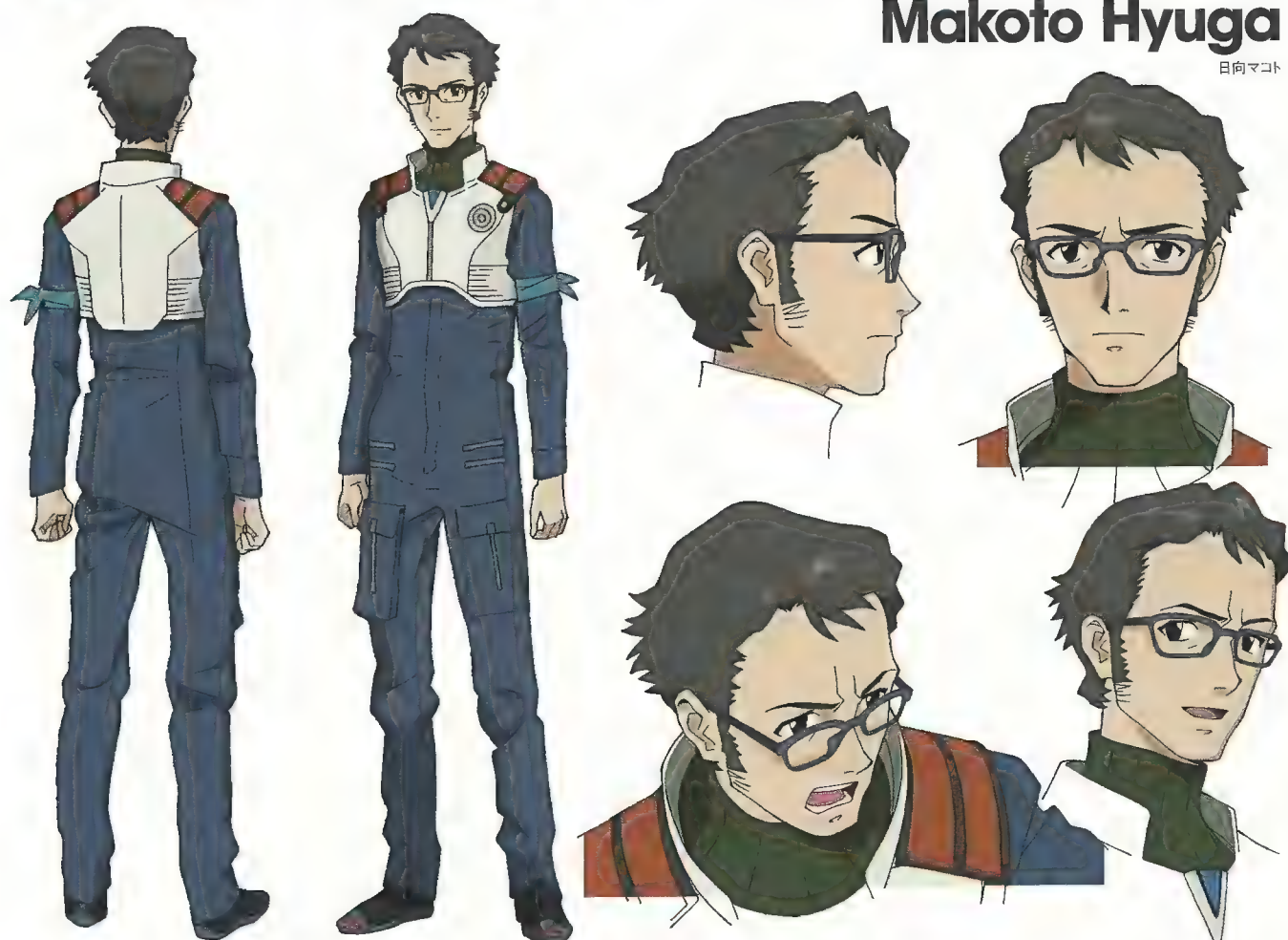
Shigeru Aoba

青葉シゲル



Makoto Hyuga

日向マコト



Maya Ibuki

伊吹マヤ



Kohji Takao

高雄コウジ



Sumire Nagara

長良スミレ



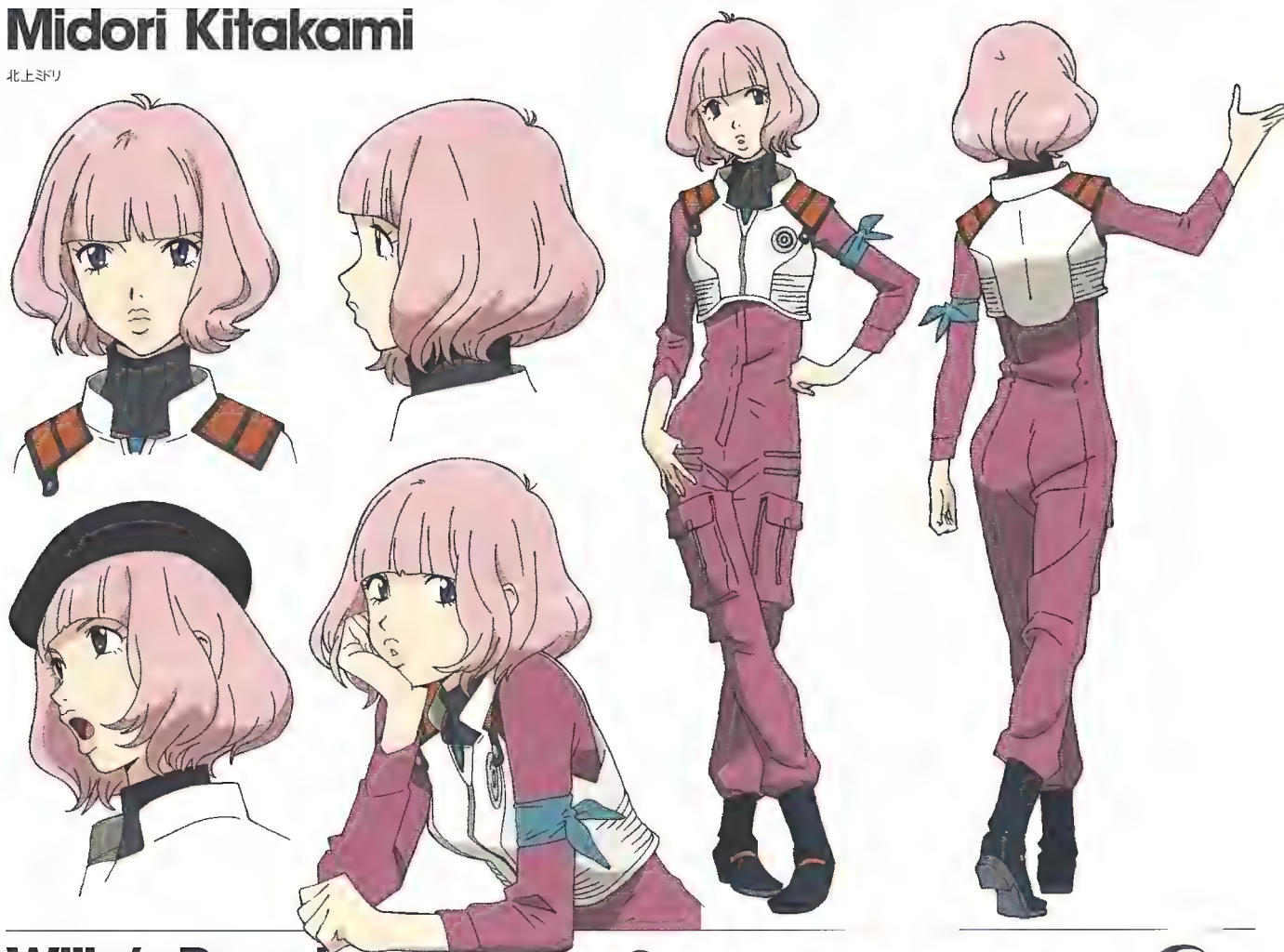
Hideki Tama

多摩ヒデキ



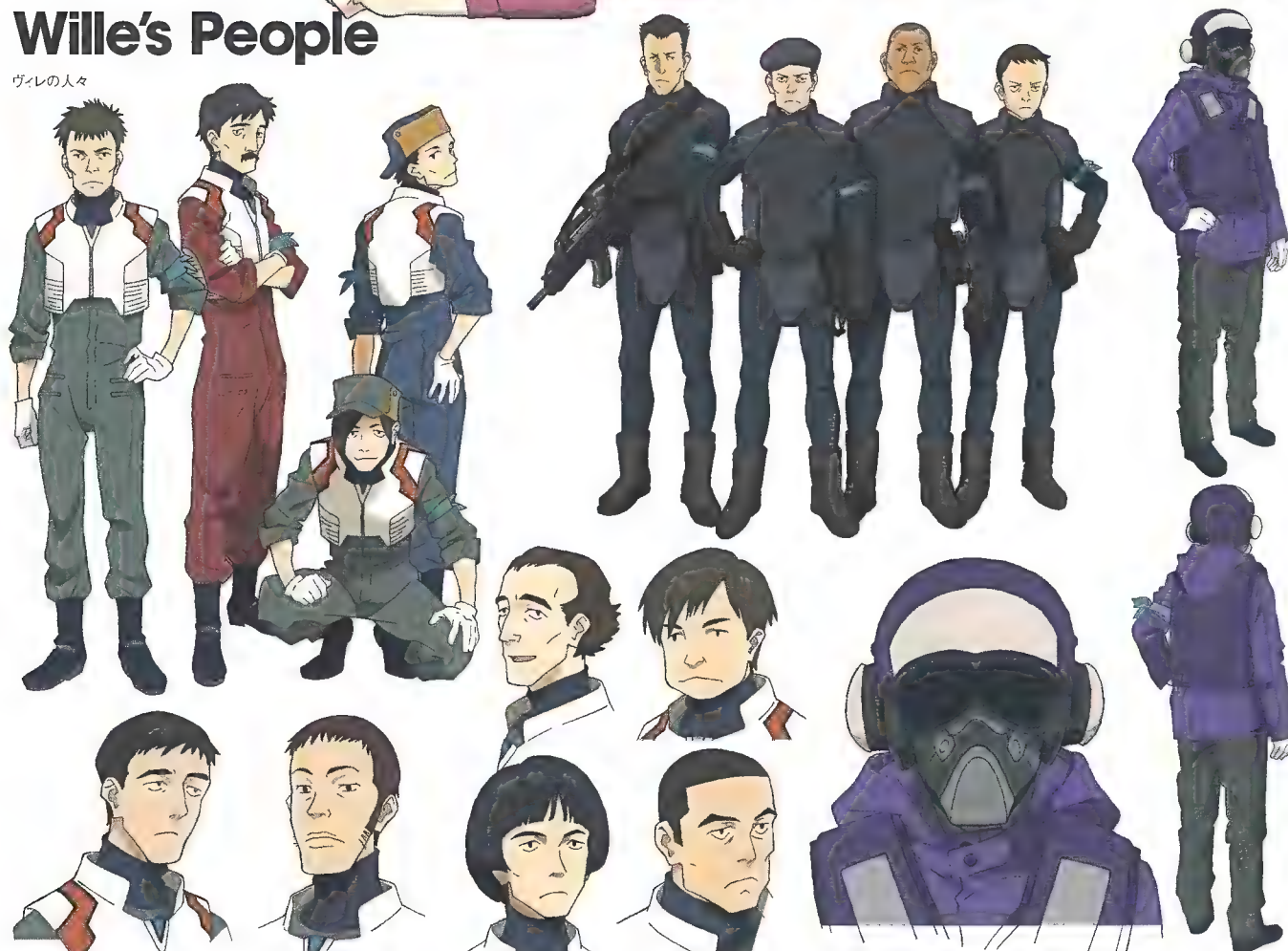
Midori Kitakami

北上ミドリ



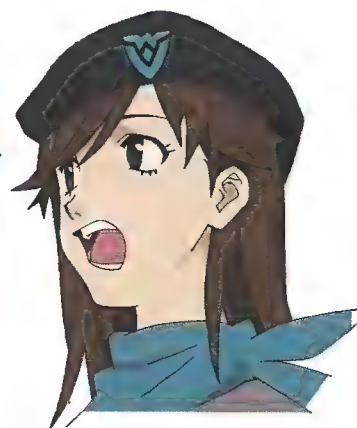
Wille's People

ヴィレの人々



Sakura Suzuhara

鈴原サクラ



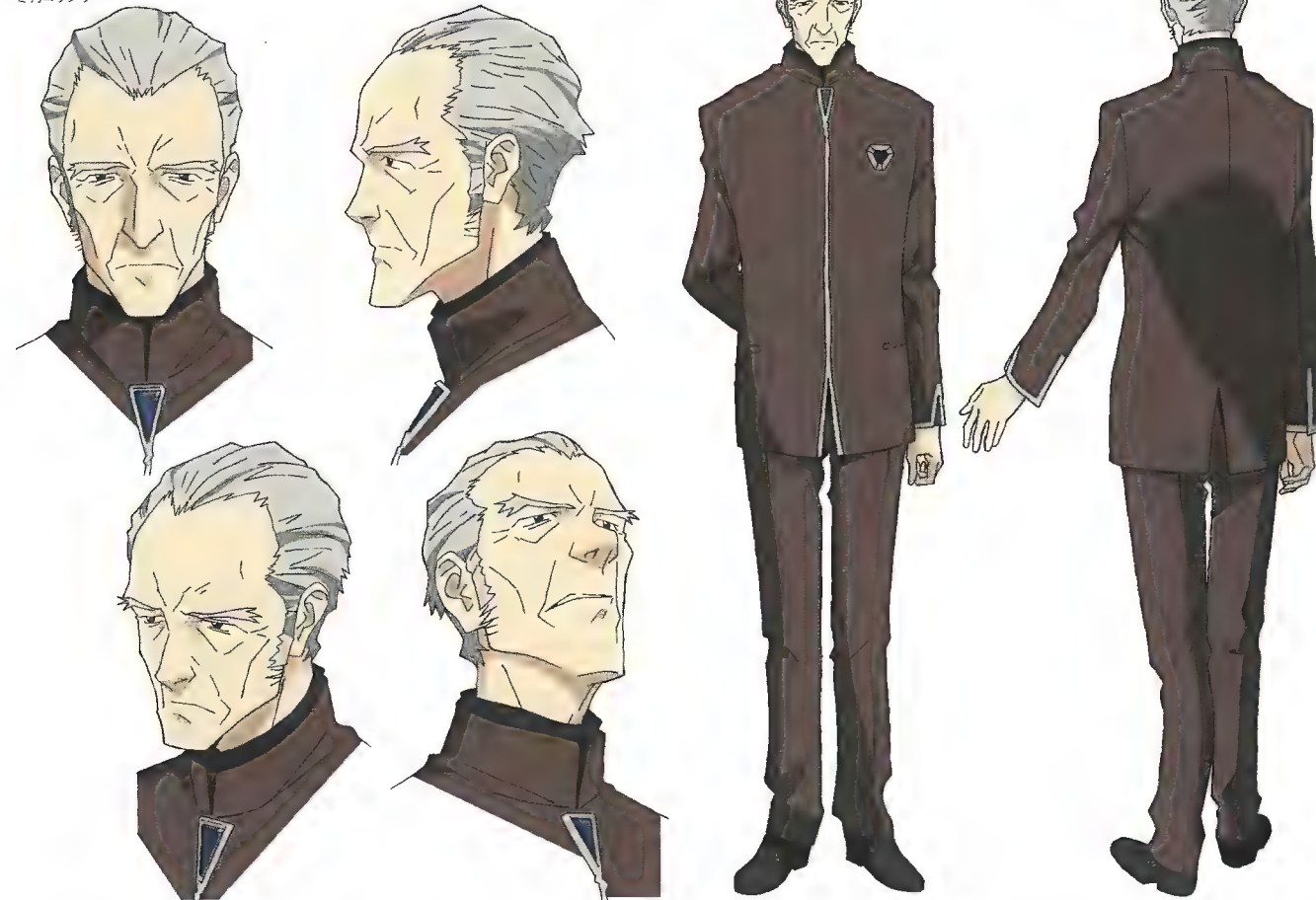
Gendoh Ikari

碓ゲンドウ



Kohzo Fuyutsuki

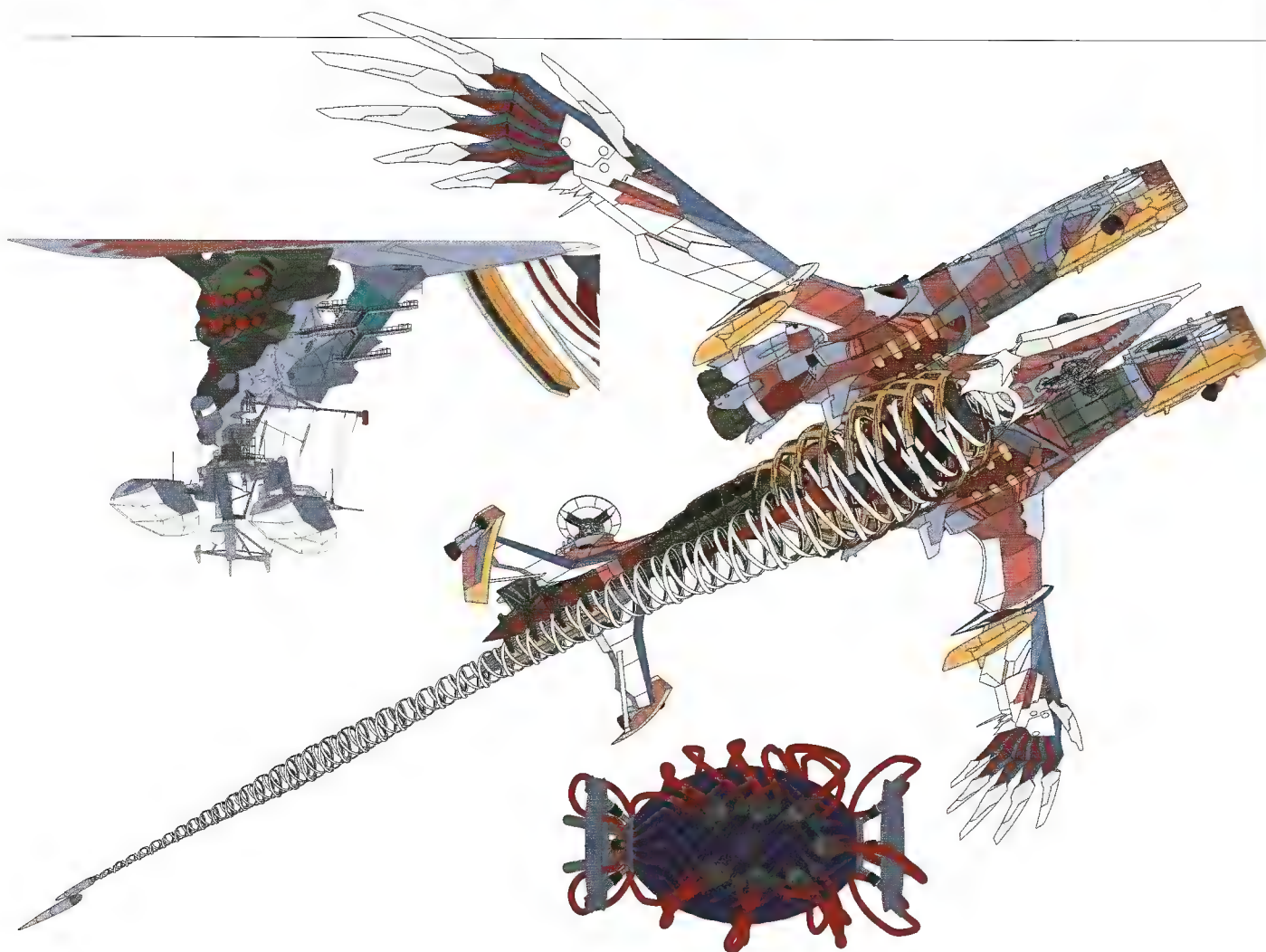
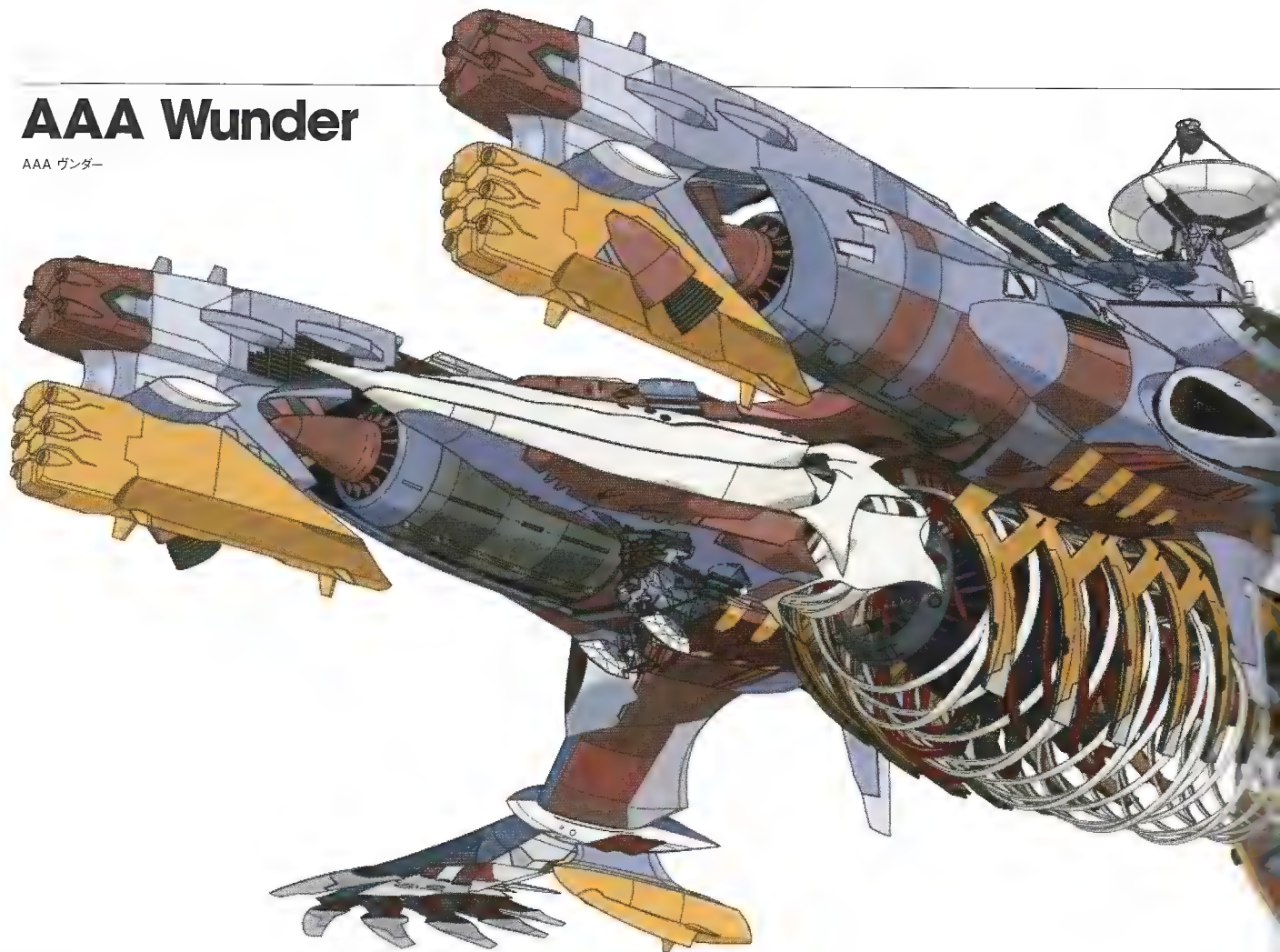
冬月コウゾウ

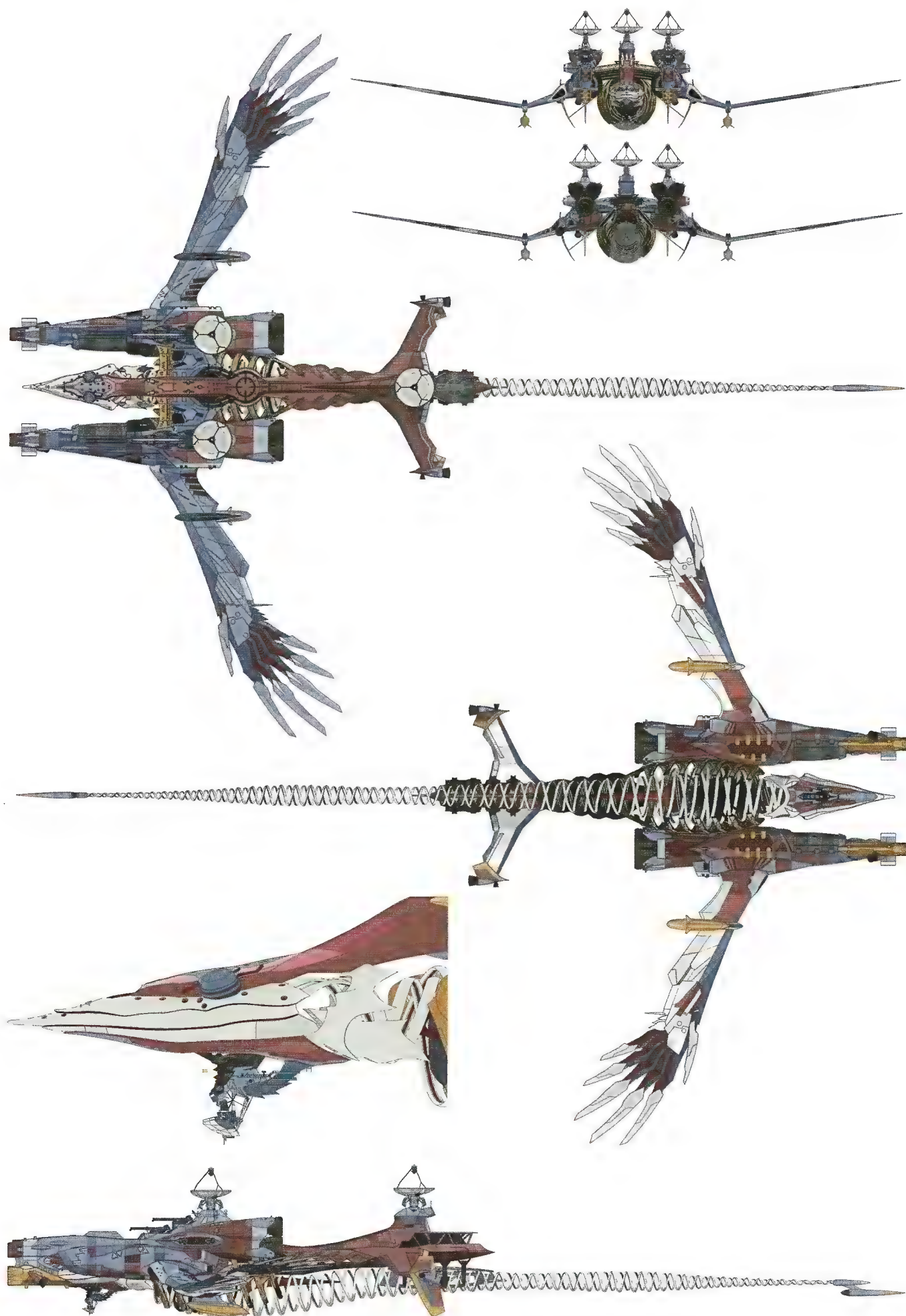


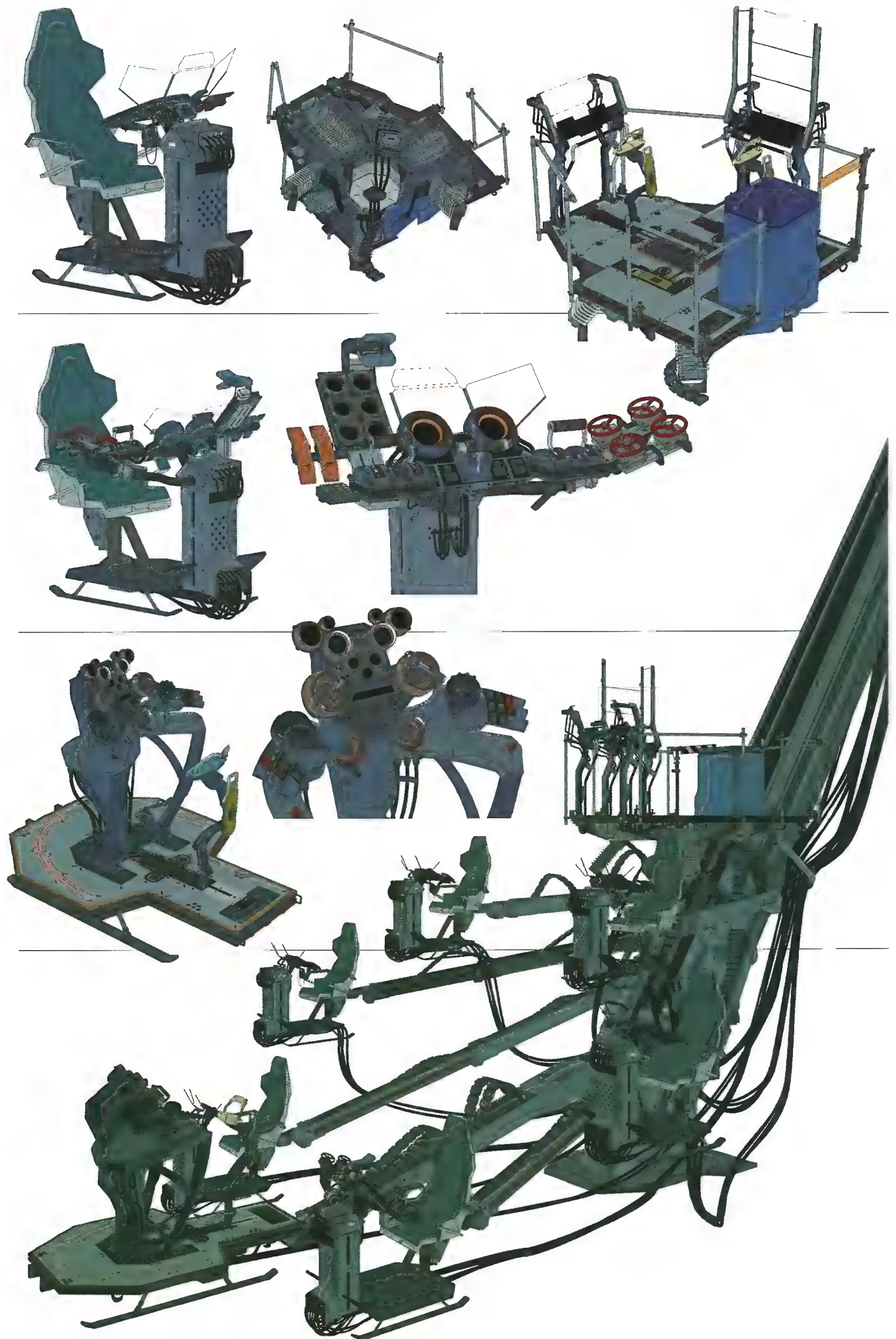


AAA Wunder

AAA ウンダー







Evangelion Production Model-02'β

汎用レト型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン 正規実用型 改2号機β



Evangelion Production Model-02'y

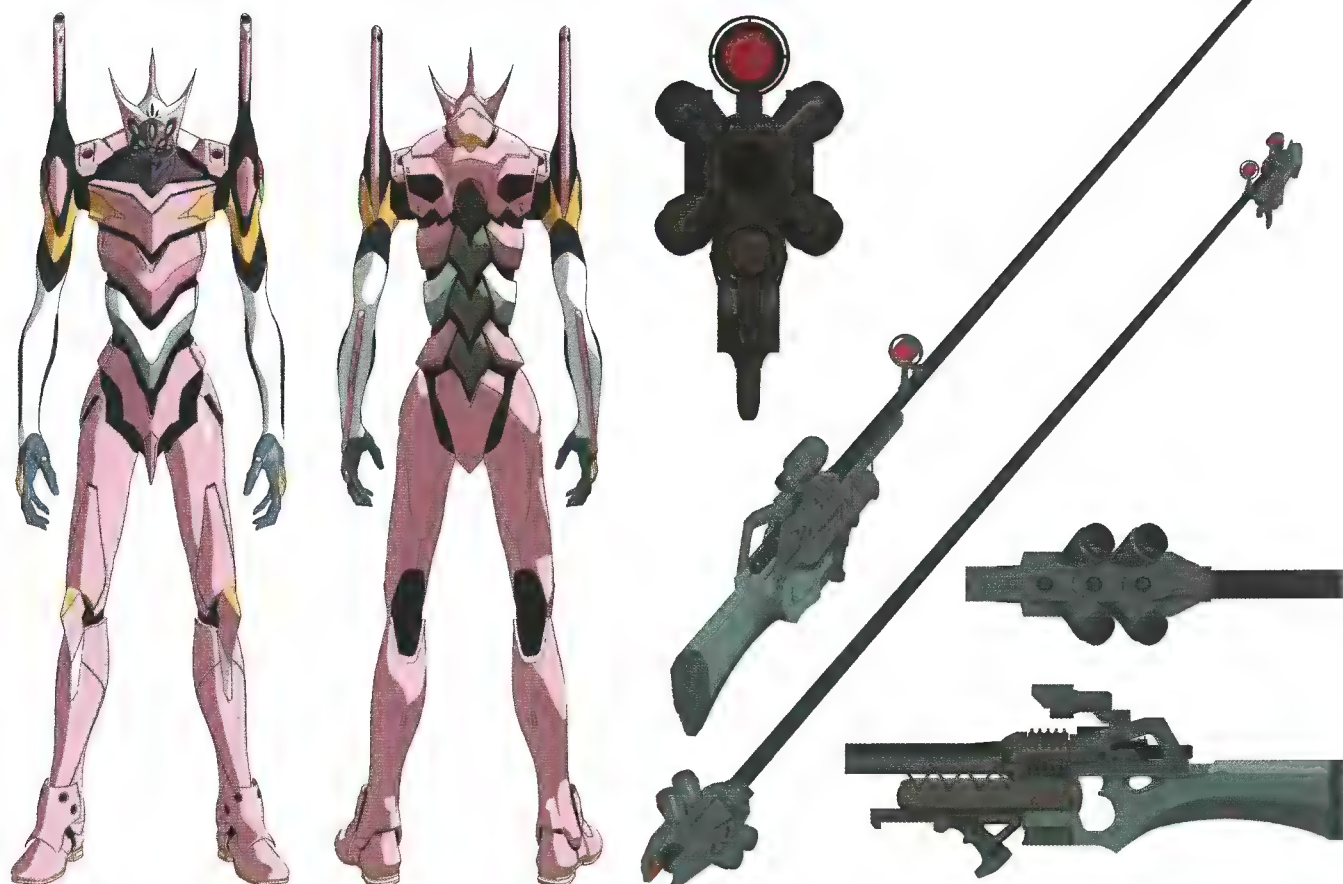
汎用ヒト型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン 正規実用型 改2号機'y





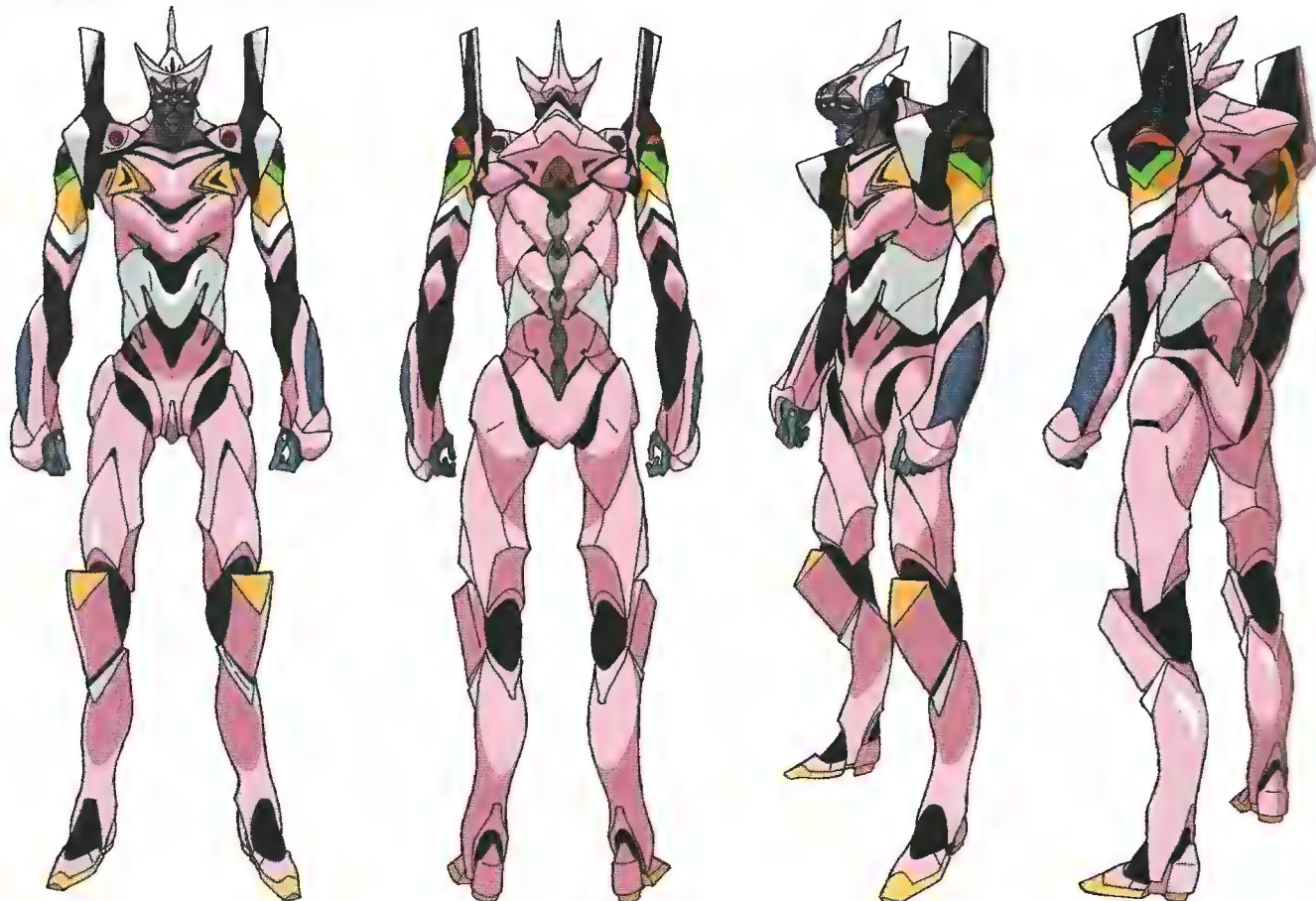
Evangelion Production Model Custom Type-08α

汎用ヒト型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン 正規実用型(ヴァルカスタム) 8号機α



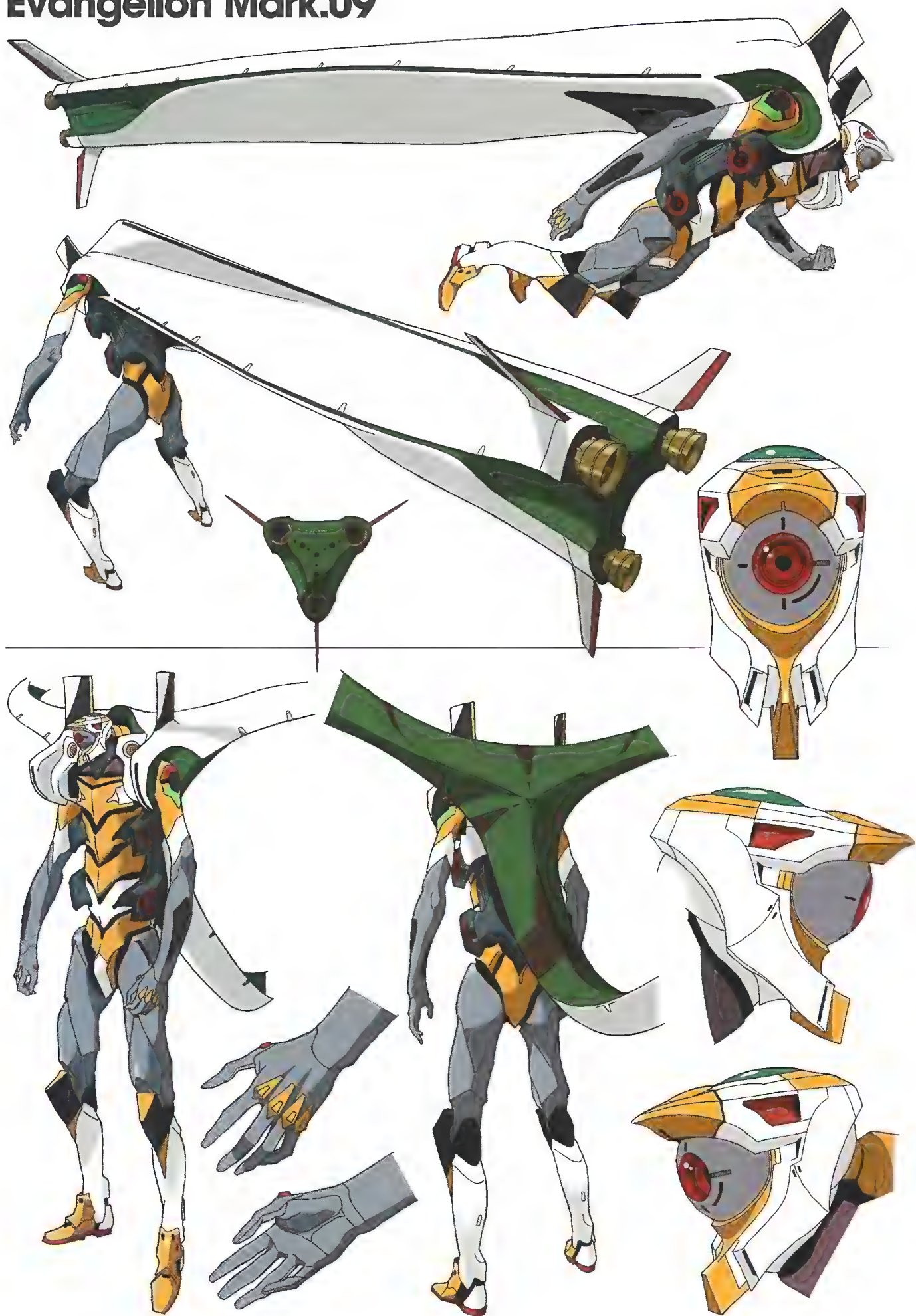
Evangelion Production Model Custom Type-08β

汎用ヒト型決戦兵器 人造人間エヴァンゲリオン 正規実用型(ヴァルカスタム) 8号機β





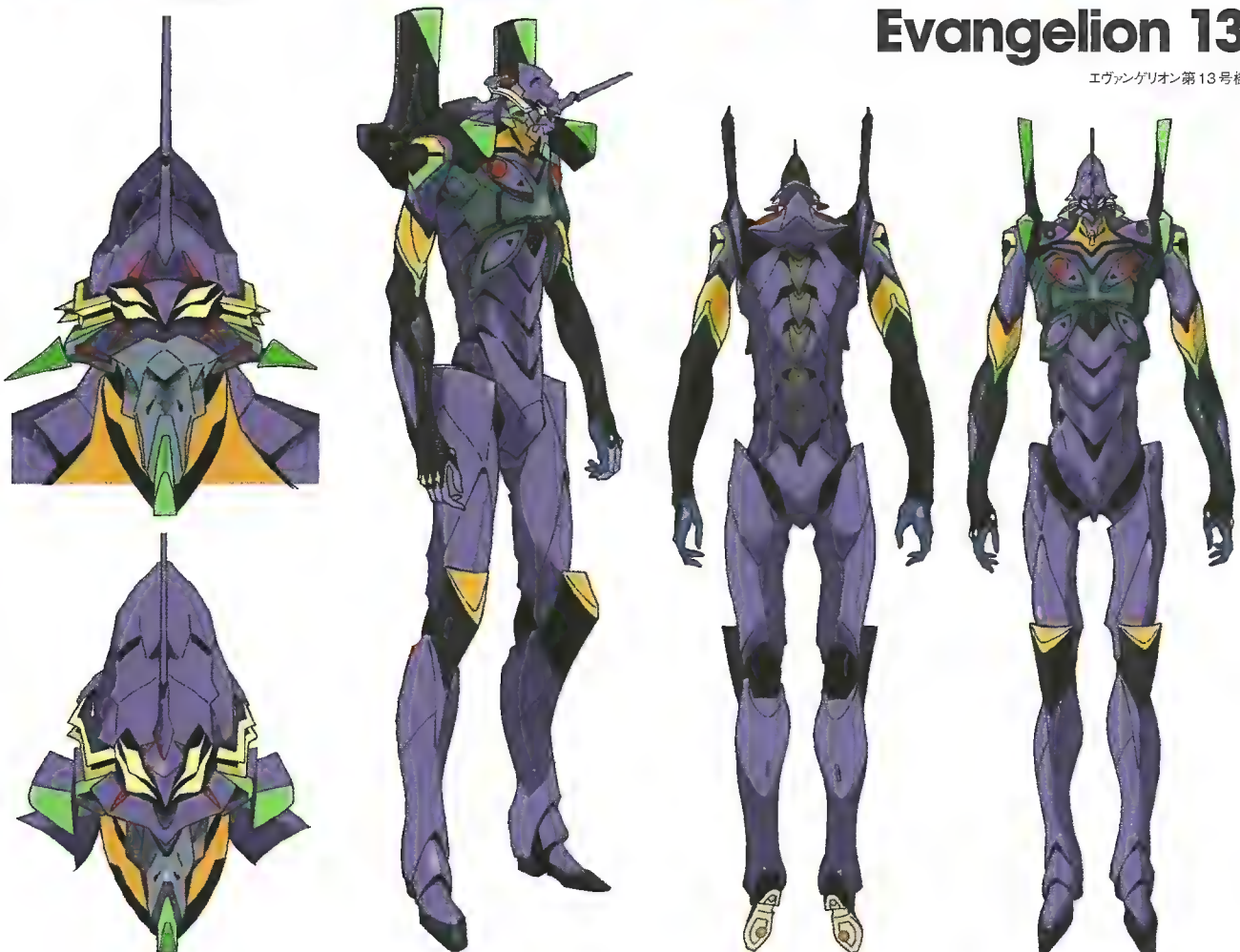
Evangelion Mark.09





Evangelion 13

エヴァンゲリオン第13号機





緒方恵美 (碇シンジ役)

「そうか、あれを……あれを自分がやったんだ」と14歳で思ったら、どうだろうって……。

——まず、今回の『Q』に対する率直な印象からお願いします。

緒方 きっとお客さんは「これは何？」って浦島太郎みたいな状態ですよ。実はわれわれも同じ立場なんです(笑)。

——台本を読まれてビックリという感じでしょうか。

緒方 年明けに林原(めぐみ)さんから久しぶりに電話があつて、吉祥寺で濃厚な飲み会に呼ばれて事前に説明を受けたんです。だいたい遅れて行ったら庵野さんの他に一部の役者がいて、そこで庵野さんが(三石)琴乃さんに「今回のミサトはこういう設定になったから」みたいなお話を、ちょうどされ始めていたところ。緒方(シンジ)だけは心も身体も中学生のままで、他のキャラは全部時間が経つて。そしてもう少し若めの新キャラが入るので、20代〜30代の役者が新たに参加することになると。

——それで実際に眠りからさめたシンジを収録されたときは、いかがでしたか。

緒方 声録りの時点で、Aパート(シンジが目覚めてからヴンダーを去るまで)

は割と画が入っていたんです。なので、シンジに向ける他のキャラクターの目線まで、はつきりわかるようになっていた。まずその表情の怖さにビックリしました。台本上も「冷たく」とは書いてあるんですが、シンジの目線で見上げたカットがあったりすると、いろんな人が見下ろしている構図になるわけで……。

特に新キャラの人たちは今までの流れを知らないし、シンジとの直接の関係性もないわけですから、「許せない」と思われるのも当然。だからその分、冷たさがダイレクトに伝わってくるし、中の人(役者陣)もそういう芝居をストレートにぶつけてくる。だからずっと、その怖さに怯えながらも、不安と疑問いっぱい気持ちでAパートを録ってました。

——実際のシンジそのままですね。

緒方 そうですね。でも、きっとお客さんも同じ思いをいだかれましたよね? 「なんでこんなになっちゃったんだ?」って。ミサトさんはサングラスでカゲになつて表情が分かりづらくて怖いし、リツコさんは短髪になつて、けっこう……あの、女子はどうしてもそういうところ見ちゃうんですけど、加齢しちゃってるのまでわかる感じだし……。そんな「いつもなみんな」や「ハジメマシテな方々」がみんな冷たい上に、(庵野さん流の録音なので)ものすごくたくさんティクを重ねられるわけです。

……そう! お客さんと私が違うのは、あの怖い演技を、何度も何度も聞かされ

たつてことでした! 「ああ……本当」に自分は、なんか、ひとりぼっち……」みたいな気分になつて(笑)。かなりの疎外感でしたよ(笑)。

——物語の主人公なのに疎外感があるのは、どういうお気持ちでしたか。

緒方 シンジが疎外されること自体は、前からよくあることでしたが(笑)。……でも、明らかに前とは違う。あんなに誰一人として近い距離の人がいない、みんなが敵意むき出しにするって感じはなかったはずで、疎外感の前作以上です。しかも『新劇場版』ではTVシリーズと違って、『序』の終わりの方からシンジ的には別の進化を始めていて……特に『破』では、精神的にもう一段上のところに到達していたから……。

——使徒から綾波レイを助けようとするクライマックスですね。

緒方 ええ。子どもっぽい感じではありましたが、子どもっぽいなりに彼の中にはある種の達成感があつて、そのまま眠っていたはずだと思っんです。その達成感からの突き落とされ方がハンパない。「なんでー?」みたいな(笑)。

——一度アガつただけに、落差は大きいですね(笑)。

緒方 しかも、さらにカヲルくんの件で突き落とされるわけです(笑)。かなりヒドイです。『破』のときも、悲鳴を上げたり咆哮したり、私自身が物理的に身体を痛めつけながら演つた部分は、やはり甲斐はありましたがキツかったです。



今回は、肉体的にはそうでもないのに、精神的にはもう……いまだかつてないくらいに突き落とされちゃった感じでして、かなり辛かったですね。

カヲルとの収録で 見た光景の衝撃

——中盤以後は、カヲルとのシーンが中心ですね。

緒方 ええ。前半はまだ良かったんですよ。「なんでなんだろう？」とまだ探ってる部分もあったし、シンジはシンジなりに強くなってきたから、分からないなりに「そんな風に言われるいわれはないんじゃないの？」って部分もチラリと見えるし。綾波が迎えに来た時ヴンダーを出て一緒に行くことを選んだのも彼の意志だし……。

でもいちばんキツかったのは、カヲルくんに連れられて「君の知りたい真実だ」って見せられた光景です。外の高い階段みたいなところを踏みはずしそうになりながら行って、雲がぎれると景色が見えて、サードインパクトの結果が……。しかも「すべてのきつかけは、君なんだよ」なんて言われて……。

収録用にいただいた映像を自宅で見るときには何にも描かれてなかったのに、具体的な光景は、現場で庵野さんに聞いたんです。それで説明を受けたんですが……。収録時期がちょうど3月中旬で、TVで多く流れていた1年前の災害の映

像の、とある街の光景と重なり、「あれが自分の（シンジの）せいだとしたら」と想像した瞬間に、もう……。『うわーっ』ってなっちゃって……。

——それはかなり厳しいですね。

緒方 ショックを受けている私をみて、いつもマイペースな石田彰くんが、急に立ち上がって、「オ、オガちゃん、僕、コーヒー淹れてこようか？ 砂糖とかミルクとか、いる？」とか、「肩を揉もうか？ 今日は何でもしてあげるよ！」とか急に言い出して（笑）。長年お仕事一緒にさせてもらっていますが、普段絶対そういう感じのことを言う人じゃないんですよ彼は！ いやそういうマイペースなところが大好きなんですけれども（笑）。

「い、いや……。大丈夫、ありがとう」って返したんですけど、相当ヤバく見えたんでしょうね。「き、君がやったんじゃない、君じゃないよ。シンジだよ」って（笑）。「同じことだよ……」「う、うん……」て、2人でうつむいて終わったんですけど（笑）。優しいんです彼は。とにかく「あれを自分がやったんだ」と14歳で思ったら、どうだろうって……。そう思ったときに感じたまま、もう芝居じゃなくて、言われたときのショックのまま演りました。

罪悪感はもちろん湧くけれど、だからこそそういうとき、人っていうのはどこかに救いを……。特に子どもだったら求めてしまふんじゃないかって。「だって仕方なかったじゃないか、そんな風になる

とは思わなかったんだ」それでも一人だけは助けたから、良かったじゃないか」って思っ、心を保とうとしていた。でもそのたった一人だと思っていた人も、実は違う人だった。

助けてなかったんだ……って。

いま、話していてもしんどいんですけど。大人の自分でも耐えきれないと思うくらいだから、もし自分が14歳のときにそういう風に言われたら、どうしたらいいんだって思っ、そこから先はずっとしんどかったです。

そして結局は……。その道案内してくれた人でさえ、死んじゃうわけじゃないですか。また例のごとく。

——カヲルの最期は、今回ひとつのクライマックスですね。

緒方 最初のプレスコときはコンテ撮（画コンテを撮影した仮映像）だったので画がはつきりしてなかったんですけど、こないだ録り直しをしたときには原撮（原画による仮映像）の画があっ、完成フィルムに入る撮影処理がなかったんですよ。それでよけいに「ムリだ！」って思っちゃって、かなりしんどい感じでした。こっからどうやって立ち直るのか、今はぜんぜん見えません。すいません……。

——いえいえ。シンジとしての心情がよく伝わってきました。

緒方 個人的にはだいぶヤラれたままで出た芝居ですから、完成絵と合わせてみ



たら、もしかしたらトゥーマッチに聞こえてしまうかも、とも思うのですが、OKが出た芝居ではあるわけなので、ディレクター判断を信じようと。お客さんに何か感じてもらえるものがあればいいなと思います。

対等に出逢ったカヲル 唯一の希望も絶望に

——もう少し収録の様子についてうかがいたいのですが、カヲルちゃんと絡んでのお芝居は久しぶりですね。

緒方 そうですね。今回は「落ち込んでるシンジに何か話しかけてくれる人」ってところから始まる関係性。TVシリーズのときって感覚・感情の記憶しかないんですが、昔とは少し違いましたね。前は最初から彼にすがりたくなるような感覚だったんです。周りに誰も頼る人がいなくなっちゃって、そこにカヲルくんが現れるので、「ああ、君が仲良くしてくれるんだね、助かった、救われた」って、そんな感じでした。

でも今回は「破」を超えてるシンジなので、目線的には割と対等っていうか……「何だか分からないけど、好意を持ってくれているらしいってことだけは伝わってくる」みたいな。やはり、だいぶ違うなって思いますね。カヲルくんに引張ってもらうとか教えてもらっているよりは、対等の友だちに徐々になっていく行程が描かれている感じがする。

ガーンと落ち込んでた時に不思議な少年と出会って、いっしょにピアノを弾いて、少しずつ距離が縮まってく。そんな中で「あれが君のやったことだよ」みたいに言われて、すごくショックを受けるんだけど、その後もまだカヲルくんと話してうちに、「13号機にいっしょに乗って槍を引っこ抜けば、元に戻るんだ」と言われて、「じゃあ行こう！」と能動的にアクションを起こそうとする。

たとえ落ち込んでても、ただ落ち込みっぱなしになるんじゃないって、人と関わる中で希望を見いだそうとするようになる。そんな『新劇場版』ならではの強くなったシンジだから、カヲルくんとも少し違う関係になっていったんだと思います。

——ピアノをいっしょに弾いて、EVAをタンデムで操縦するとか。新しい要素も入ってますね。

緒方 そうですね、連弾が対等の象徴みたいな……。

——カヲルの方も、急に弱気になるのは新しかったですね。

緒方 そう、そうでした。「初めての想定外」みたいなことを庵野さんが言われてました。カヲルってどんなときでも……最新期の時でさえ達観した人だったのに（笑）。今回は今までも増して、役者側も庵野さんも、少しずつ考えて繰り返し試しながら、録っていたように思います。

女性がたくましく 感じられる『Q』

——客観的にはなりつらいと思いますが、『エヴァ』と長い付き合いをされてきた立場から、『Q』の物語への感想も聞かせていただけますか。

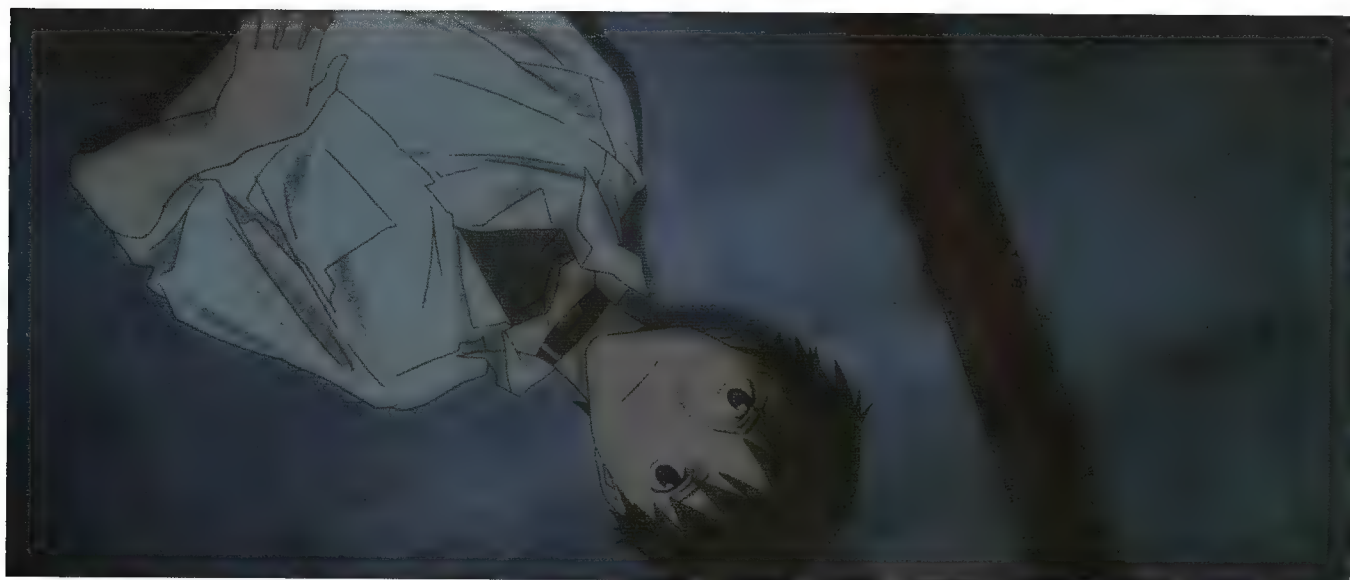
緒方 シンジが本当にシンディなあとという感想は、きつとお客目線に自分になっても変わらないと思うのですが（笑）、個人的には……それぞれのキャラクターみんなが、アスカもミサトさんもカヲルくんも、あれからもう一段ステージが上がったところでの、「さらなる試練」を受けていて、大変だなあと感じます。

だからってどうか……。救いのような感じということでは、前の劇場版の最後みたいな終わり方に近いものではあるんですが、あくまでも「近い」に過ぎない。前のときより、ものすごく希望が感じられる。それが具体的に何かは、今は分からないですけどね。

だって、今回、女子がみんなたくましいじゃないですか。男はみんなダメだけだね（笑）。

——そうですね。みなさん毅然と目的をもって行動されてますね。

緒方 うんうん。アスカがまずたくましいし、レイちゃんも分からないなりに何かを感じようとしている気配があるし。マリはもちろん強いし、ミサトさんもそうだし。なので、女の人に引張ってもらおうかと！（笑）。女性陣が「希望」で



す。シンジ自身はダメですからね、現段階では(笑)。……え？ 私？ 私は生物学上は女ですが、ここでは男性脳なので。わたくし(シンジ)のハートは、まったくの絶望です。(ゼーレ風に) 絶望O.M.(笑)。

——そこで映画が終わってしまうのも、衝撃でした。

緒方 今回の収録は、庵野さんから「君の思ったように演ってよ」と言われる場面が多かったのですが、やはり「破」でステージが上がっているということでお願ひしていくつかセリフのニュアンスを変えてもらったりしていました。ですがカヲルくんが逝っちゃうところを録らせていただいた時点で、「どうしよう、この後のセリフ、どう言えがいいのかわからない……」と困ってしまったんですね。そうしたら庵野さんの方から「うん、この後は緒方、しゃべりたくないでしょ」って。「はい！」「じゃ、ここから先のシンジはセリフ全部カットで」「ありがとうございます！」って(笑)。庵野さんとシンク口率400%になった瞬間です！(笑)

——すごい。まさにシンク口ですね。

緒方 台本には「何をやってもダメなんだ」とか、そんな感じのセリフがいくつもあったんですが、本当に「ありがとうございます！」って感じでした。

劇中の14年間と 新たな試練を乗りこえて

——初期のシンジって「EVAに乗れ！」って言われて「乗りたくない」って言い続けてた印象がありますよね。でも、『破』を経た『Q』では「僕をEVAに乗せてください」ってシンジが言ってるのに「乗るな！」って言われる。折り合いのつかない人生だなと。

緒方 ホントそうですね！ まったく何なんですかね(笑)。でも、仕方ないです……。14年も経ってるって、あのときは知らなかったわけですし。私だけはずっと「破」の続きでしたが、他のキャストのみなさんも、だいぶ戸惑わってたようでした。

——描かれてない14年間を想像されなければいけないですからね。

緒方 とあるシーンのセリフが落ちてこなくて、その理由と改善策を庵野さんに相談しに行こうとしたら、宮村も「私もいっしょに聞いていいですか？」って。「腑に落ちてない部分があるんで、いっしょに聞いて今のアスカのヒントを拾います」って言うてきて……「一緒に解決し、一緒に笑顔になりました(笑)。やはり14年間のギャップをどう埋めるか、みなさんそれぞれ苦労されたんじゃないでしょうか。

——14年分、成長したレギュラー陣はどう思われましたか。

緒方 ミサトさんもリツコさんも、今っ

ぽくて格好よくなりましたよね。90年代的な感じが消えて、ちよつと垢抜けて、女性としてすてきな感じに……今、現実世界にいてもおかしくない感じになりました。そうそう、伊吹マヤちゃんはずいぶんしつかりした感じになって、一番変わったかもしれないね。「これだから若い男は」みたいなことまで言っちゃうくらいに。赤木先輩にあこがれてたのね。これからは、マヤに惚れる女性が出てくるかも！ そうやってみんな大人になっていくのに、シンジは……(笑)。

——そんな録音現場の雰囲気は、どのように感じられましたか？

緒方 私は最初、新メンバーと一緒に録っていました。(大塚)明夫さんと(大原)さやかは別でしたが、他の3人(伊瀬)茉莉也ちゃんと沢城(みゆき)と勝杏里と、ミサトさん、リツコさんも一緒に。庵野さんが新メンバーに「EVAの現場は特殊なんで、なんか分からないことがあったら、ベテランの緒方さんに聞いてください」とかおっしゃったおかげで、やや大変な思いはしましたが……。案の定、休憩時間に沢城嬢の質問攻めに！(笑)

EVAの……特に「新劇場版」になってからの現場は、より庵野さんカラーが強くなり、普通の音響現場より要求が細かく、ターゲットポイントがとても狭い。通常の現場ならOKが出る所を、その何倍も何十倍もかけて、役者さんの芸歴の長短問わず、徹底的に追求をかけた拘りのセリフを録りぬこうとされるので、初



めての役者さんだと相当戸惑われるだろうなと思います。

——中盤以後の雰囲気はどうですか？

緒方 ほぼカヲルさんと二人だったので、お互いに気遣いあい、励ましあっていた(笑)。二人で目配せをしたり、片方が落ち込んでるときは、さっき言ったように石田くんがコーヒーいれてくれたり、私が「エヴァのウエハース、意外とおいしいよ」なんて言い出したり。かなり長い時間、二人きりで……最後のまるまる1日は、冬月との会話が一瞬あるくらいで、ほぼ石田くんと二人きりでがんばって乗りきりました。

——冬月との会話も珍しいですね。

緒方 はい。ただ、そのときのシンジはショックを受けた直後でぼーっとしてる状態だったんで、私としては能動的に清川さんと絡ませていただきたかったんですが、残念でした。

——今回、シンジはピアノを弾くシーンもありました。

緒方 私もピアノを弾くので、あれだけすぐに弾けるようになるなんてムリだろ！ と突っ込んでました(笑)。ピアノは難しいですから。きちんと鍛錬を長年積まないとならない。以前から「チェロうますぎ」って思ってたんですが……音楽的な才能のある少年なんですかね。私もチェロは1年くらい触ったことがありますけど、ベースよりも弦が太くてものすごく指が疲れるし……もしかすると、エヴァパイロットである事実が、起

因しているのかもしれませんが。

——最後の締めくくりの言葉をいただきたいですが、先ほどの「女性がたくましい」というのは、今回の「Q」で非常に重要な指摘だと思いました。

緒方 私が言うのも何ですが、だいたい世の中って女子の方がたくましくできていないじゃないですか(笑)。で、男はリードしているように見えて、女子に転がされているという(笑)。これもまた、庵野さんのライブ感？ なのかわかりませんが。ここまで世界がムチャクチャになっちゃってしまってるのに、こんなに女性が元気で、「行くわよ！」って男が引きずられていって、そこから何か復活してくるかも……っていうラストの感じ。生命力を感じます。

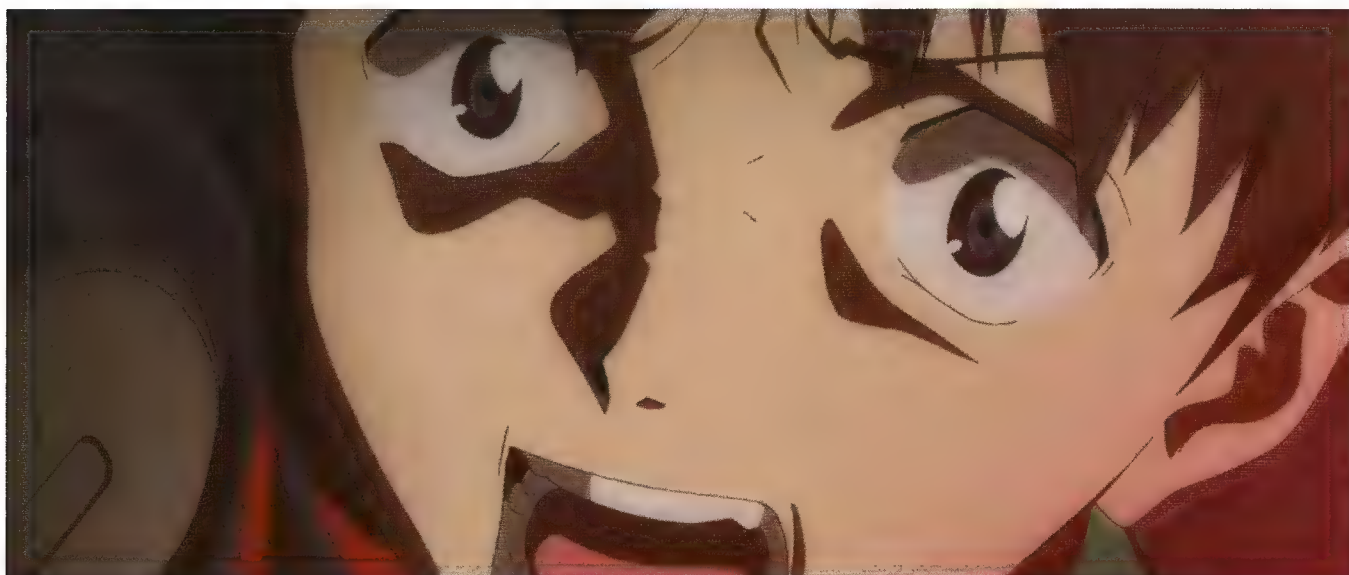
今回、本当に女性陣、格好いい。だいたい周りのキャストを見ていても、まず林原さんと琴乃さんがたくましいし、宮村も沢城もたくましい。尊敬します。

——特に今回の宮村さん、ずっと怒ってずっと戦っていたのが印象的でした。

緒方 あれはすごかったですね。第一、宮村自身、たくましくオーストラリアで子ども育ててますから。「子ども育てるためなら、がんばりますよ！」って。お母さんになった女子は特に強いんです。あ、お母さんでなくても、沢城は強いかな……やつぱり男性脳な私だけがヘボいだけでした……(笑)。

——いえいえ、まだ次がありますので。どうも、お疲れさまでした。

おがた・めぐみ 東京都出身。フリー。代表作は『美少女戦士セーラームーン』『天王はるか役』、『幽☆遊☆白書』(蔵馬役)、『めだかボックス』(球磨川禊役)など。



石田 彰

(渚カヲル役)

実は今回の『Q』への前振りというか違和感は、すでに『序』と『破』に仕込まれていたものなんです。「同じに見えるでしょうか? でも違うんだよ」っていうことですね。

——カヲルは『序』『破』とも、「前のエヴァとは違う」ことを示すポジションにいました。石田さんとしてはどんな解釈で演じられてきたのでしょうか。

石田 実は『序』の収録をする時、新劇場版における渚カヲルはどういう人で、碇シンジってどういう人なのか、庵野監督(※キャストの発言中、「監督」は庵野監督の意)からレクチャーをしていただきました。その納得のもと、『序』と『破』の状況やセリフについて、僕なりの理解に基づいて演じてきてます。『Q』もその流れをふまえての演技でした。そうは言っても、『序』と『破』ではそれが具体的に現れるシーンは多くはなかったわけです。なので、『Q』は「結局こういうことなんだ」って、ものすごくはつきり分かる……。そういうお話でした。

——その核心にあたる「謎」については、みなさんの関心も高いと思います。

石田 腫れ物に触るような言い方をさせ

ていただいてますが、最初に庵野さんから聞いた「設定」については、お伝えしない方がいいと思っています。そもそも『序』『破』の段階で、僕自身が周りから「あれってエヴァのTVと劇場版をもう一度焼き直して映画にしたの?」みたいなことを何度も聞かれたので、僕としては「続きを観て判断してください」としか言いようがなく、やはり僕の口からはとても言えないことなんです。さすがに『Q』を観れば、「焼き直し」という感想をもつ人はいなくなるだろうと思うんですが……。

——カヲルだけが何かを知っているように動いてますが、その状況は役者陣の中でも同じに見えて面白いです。多くの方が『Q』の内容に驚かれたそうですね。石田 他の出演者の方が今回ビックリしてたってことは、最初に監督から明かされた話は僕だけにされて、役のポジションと役者が知るべき情報を、きっちりとか合わせてくださったということでしょう。逆に僕は今のお話を聞いて「おお! みんな知らなかったのか?」と思いました。

これまで説明を求めてきた人に対しては言葉を濁しつつも、「焼き直してみたいに思われるのは、非常にもったいないな」という想いと「やーい、引っかけた引っかけた」という想いの両方があって、それを半ば楽しんでいる部分もあり、ちよつと残念だなと感じているところもあつたんです。

——そんな複雑な想いをされてきた石田さんにとって、待望だったのでは。

石田 「待望の」というよりは、「さあ大変だ!」って感じです。『序』では皆さんご存知の通り出番が少ししかなかったのですが、収録後に庵野監督から「次はいっぱいしゃべるからね」って言われていたんです。ところがフタを開けてみたら、『破』もそんなに出演は多くなかったですよ(笑)。なので今回の『Q』の収録のときは、「いよいよなんだ」と身が引きしまった感じです。

案の定、カヲルがあれだけしゃべり始めると、今まで予想していなかったところに話が行ってしまうわけです。もちろんTVシリーズを含めた「エヴァ」の規定路線じゃないところに行くことは予想はしていました。たとえ違う話になったとしても、カヲルが碇シンジに抱いている気分的なもの……そこは変わらない。前回と違う世界だと自分が分かった上で、今回の碇シンジにどういう風にアプローチするのか、みんなが納得するかたちで表現しなければいけないわけです。これはけっこうハードルが高いぞと。なまじ最初から教えられていた分、どうしようっていう想いもありました。違うサイクルとはいえ過去の積み重ねの中で、渚カヲルはこうあるべきとか、「エヴァ」そのものがこうであってほしいという、カチッと決まったストライクゾーンがありますからね。それは外せないです。

as Kaworu Nagisa

Akira Ishida

イメージのすり合わせで テイクを重ねた収録

——実際の収録に臨まれたときは、いかがでしたか。

石田 実時間としてはもう十何年も経ってしまっただけで、最初に演ってからシリーズとは離れたゲームなども経てきて、自分の中で次第に消化され、よく言えば熟成してきてます。でも、もし最初のイメージからは変わってしまったとすれば、やはりそうではないけない。今回、『エヴァ』の現時点での集大成としたというスタッフの想いも感じましたし、そうしたさまざまな要求に応えるのが、すごく大変ではありました。

——庵野総監督とは、どんなやりとりをされたのでしょうか？

石田 シーンを実際に成立させるために、渚カヲルっていうキャラクターはそれで正解なのか、イメージとしてこれでいいのかって固める作業は、テイクを重ねて何度となくやりました。日を改めて丸ごとリテイクを録るという作業もありましたし。ですから、非常に気を遣って演じた作品になりましたね。石田彰が渚カヲルというキャラクターに対して自分の中でもっているイメージと、みなさんが最初にTVを通して受けたイメージと、そのすりあわせをもう一度やってみましょう……。そんな収録だったと思います。となると基本はTVの第貳拾四話ということになります、僕の中ではそれを再

現したわけでもないんです。改めてTVシリーズを見直してみると、当時かなりのベストでみなさんに観ていただいたものではあるんですが、それを正解としてコピーしようとしたわけでもない。

実際、『Q』の収録を終えた後での僕の結論としては、当時そのものでもなく、2012年の現段階で僕が感じている『渚カヲル像』そのままでいい。みんながキャラクターに対するイメージをずっと膨らませてきたものがあって、それぞれ「こうであって欲しい」という願いを、もう一度整理して狙ったものになっていると思います。

——なるほど。シンジとは『新劇場版』初になるカラミの芝居がありました。

石田 直接シンジと会話をできたことは、僕にとってもものすごく大きいことでした。これまでは、一方的に『新劇場版』の今を生きている碇シンジに対する想いを、ちよつとずつちよつとずつ吐露してきた。それが、ようやく本人と話をする事ができた……。これはカヲルにとってはとっても待ち望んでいたことだろうし……。うん……。

やはりその直接対面ってことですよね。周辺から人知れずサポートするよりも、実際に会って話していつしよに時を過ごす。そうしたコミュニケーションをとるということは、『エヴァンゲリオン』という作品にとって、ものすごく重要なことなんだなと改めて思いました。そう考えしてみると、周囲から疎外されてしまった

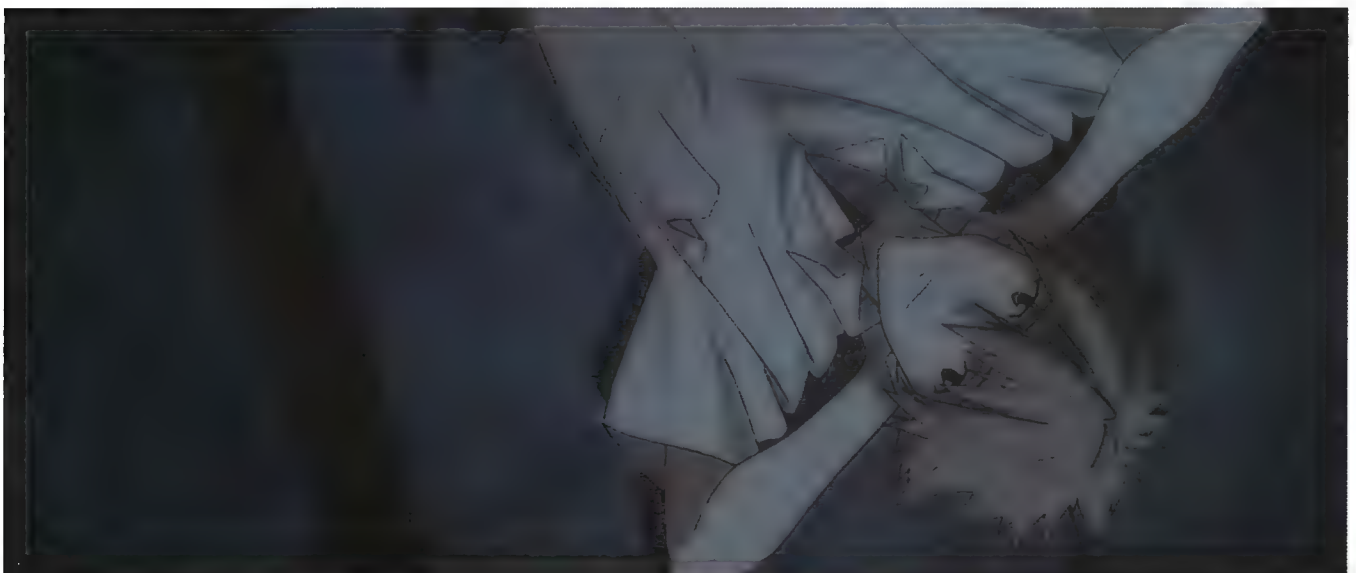
シンジが、誰も頼れる人がいなくなったところで渚カヲルと会えること。そこで話が出来たということは非常に大きな意味がある。これまでの2本の映画は、そういう状況をつくるための壮大な前振りだったとも感じます。

——そうは言いつつ、カヲルにはやはり悲劇が待っているわけですが。

石田 過去のTVシリーズを彷彿とさせるシーンやニュアンスの再登場は、そこそこの『新劇場版』の『序』と『破』を通して使われてきた手法ですよ。何度やっても同じになってしまふ。前のサイクルとは違うはずなのに、やはり同じ轍を踏んでしまふ。どうしようもない運命的なものがある。それでも線路のポイントを違うところに切り替えてみたい。大きなものの流れに対して、なんとかあがいてみたいという、そんな想いがあって、生き残るべきシンジの身代わりになつていくんでしょうね。

——いつも超然としたカヲルですが、今回は動揺する演技があつて新鮮でした。

石田 渚カヲルはかなりのことを把握していて、何でも知って何でも自由に動かせると。ややもするとそう見えますよね。自分の存在理由が分かった上で動いているけど、すべてを仕切っているわけではないってことでしょう。ゲンドウやゼーレたちが世界を把握して自分の思うとおり動かそうと丁々発止しているその上において、俯瞰でものを観ているように思われがちなカヲルなんです、その彼



でさえもコントロールする立場の存在ではなかったってことでしょうね。

納得すぐでやろうと

ピンポイントをねらう現場

——カヲルとして存分に演じられたんだなど、お話をうかがってそんな印象を受けました。

石田 庵野監督に限らずスタッフの方々みんなが、今回のシリーズを『エヴァ』というタイトルの中でも究極のものにしようという努力している。収録も、ものすごくピンポイントをねらって表現しようとしている。そのために「ああでもない、こうでもない」と、みんなをやっている雰囲気を感じてます。

実際にマイクの前に立つと、僕と緒方さんの二人しかブースにいないわけですが、セリフやシーンの解釈に、他の作品ではありえないくらい時間を割くんです。「納得すぐでやろう」って空気が常にあるので、作業自体はすごく大変ではあるんですが、「お前、やれよ」って投げられてるわけではなく、みんなでつくればいいんだって感じです。単なるブレッシャーだけではなく、作品をいっしょにつくりあげる、共同でやっている安心感がありましたね。

今回は同じシーンに登場する緒方さんといっしょに演れたことが、僕としてはすごく嬉しかったです。これまでは基本は僕一人で録ってましたから。

——そのシンジとEVAにタンデムで乗るというのは、カヲルにとっても初体験ですよね。ある種の「ラブシーン」的に解釈される方もいると思います。

石田 僕にはその解釈はできませんよ（笑）。監督の言葉を持っていたら、真剣に理解しようとずっと追いかけてきたディープなファンの方にお任せしたいと思います。ただ、少なくとも別々の機体で歩んでいるのとは違い、同じ目的に向かっていっしょに歩いていく。そんなつながりの濃さみたいなものは感じました。

——他に印象的だったことは？

石田 ビジュアルで一番ビックリしたのは、月があんなことになってるシーンですね。『Q』は頭からものすごく整った世界が描かれてますから、ショックがありました。きちんとした技術に支えられた環境の中でみんな生活していると見えてたのに、シンジの见たいものを見せようと外に出たら、霧で周囲がよく見えないうちから「どーん！」と。見知っていた世界のすべてだと思ってたものと、「君が観たいという現実」との落差が端的に描かれていて、かなりの衝撃でした。

——では、最後にファンの方へのメッセージをお願いします。

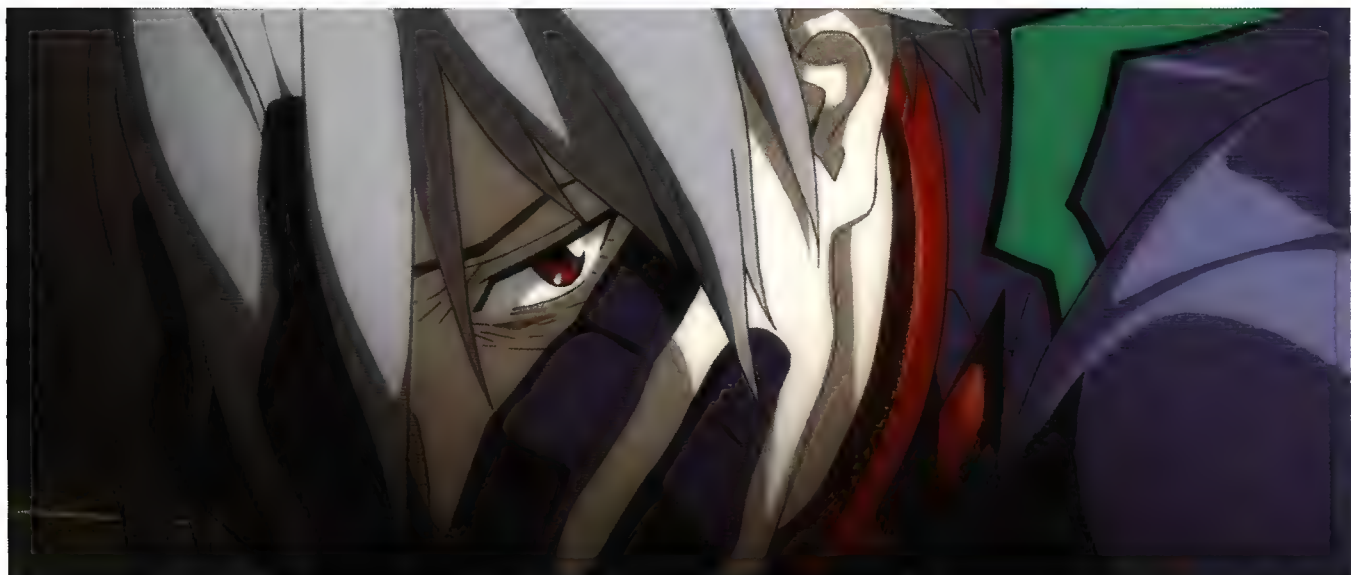
石田 『序』『破』と重ねてきた『新劇場版』のストーリー展開を完全には読みかねていた方にとって、今回の『Q』はまさしく「急展開」だったと思います。でも、実は今回の『Q』への前振りというか違和感は、すでに『序』と『破』に仕

込まれていたんです。「同じに見えるでしょう？ でも違うんだよ」っていうことです。

「『Q』をご覧になったお客さんは、「これってどういうことなんだ？」って確かめるために、きっと何度も劇場に足を運ぶことでしょう。でも「あらかじめ仕込まれていたもの」と聞けば、その前の『序』と『破』に戻ってもう一回観てみたくなるでしょ？ 注意深く観ていただけたら、「あつ、ここにネタ仕込んでる」「ここにも」というのが、必ず見つかりますから。最初から見直してみると、『Q』につながるストーリーって、ものすごく納得していただけたらと思いますし、今回まさに急展開になるお話の後は、「いったいどこに行くんだろう」って、さらに興味深くなるはずです。

これだけ既定路線から「どーん！」と外れたところに持っていたお話ですから、すでに前のTVシリーズの最後や前の劇場版のエンディングみたいな、ああいう収まり方であるはずはない。僕はそう思っています。そうなるって、「いったいどうするの？」「じゃあ、何なんだよ」という風に、次に対する興味がものすごくわいてきますし、皆さんもきっとそうでしょう。ぜひ完結編も楽しみにしていただきたいと思います。

いしだあきら 愛知県出身。ピアレスガーベラ所属。代表作はPSYCHOPASSサイコパス（藤秀星役）、機動戦士ガンダムSEED/SEED DESTINY（アスラン・ザラ役）、銀魂（桂小太郎役など）。



林原めぐみ (アヤナミレイ(仮称)役)

レイちゃんには、疑問が無駄……むしろ邪魔なんですね。いららないんです。だから私も、ただ事実だけを受け止めて、落とし込んで肉声にしています。

——まったく新たな物語となった『Q』は、いかがでしたか。

林原 「『破』で破れきったんだな」というのが第一印象ですね(笑)。知っているシーンや懐かしいシーンが一個もないやと。過去にオマージュされているシーンやリンクしているところって、いっさいないですよ。

——今回の新しい物語や設定については、どう対応していかれたのでしょうか。

林原 正直言って、自分が出てないパートは知らないんです。出てるところも、画は完成してはいないので、監督に「どういうことですか?」と聞きながらという、特殊な録り方をしています。劇場版の場合って、普通は最初から最後までストーリーを把握した上で、自分のポジションニングに落とし込んで、そこにだけ集中して演るものなんです。これはホントに分らない。やっぱり『エヴァ』だから許される録り方だとは思いますが、ただ、私としてはこれだけ長く演ってきているので、他でどんなことが起きて

いても、レイちゃんはレイちゃんではない。彼女のことだけ考えて演ったので、分からないことがつらいというわけではないんです。

——とは言え、長く出ておられる方にも驚きがあったのでは。

林原 確かにファーストシーンを見たときにはね、「これってシンジくんの夢オチになるんじゃないか」って思いましたよ(笑)。とある会で庵野さんが「今度は戦艦に乗るんだ」と言ってたんですが、てっきり冗談だと思ってたんで、「ああ、ホントだったんだ」って。その印象と「どうも本当に時が経っているらしいぞ」というのが分かって、「どこへ行くのかなー、このエヴァンゲリオンは?」という衝撃がありました。そこはおそらく初めてご覧になった観客の方々と同じだと思います。

——そんな状況をふまえて、どのように収録を進められていったのでしょうか。

林原 ホントに小さなセリフを何テイクも録るのはいつもどおりですね。庵野さんの脳の中には、気に入る音があるみたいなんです。単なる音じゃなく、感情の乗っかり方含めてです。「はい」という返事ひとつにしても、込めすぎたとか外側にすぎたとか、その辺のサジ加減がね。今回、レイと言ってもレイじゃないので、その辺で若干の調整はありました。が、淡々と録ってましたね。

それでレイが増殖するシーンが気になったので、「これって何でしょう?」

と聞いたら庵野さんから明確な回答がありません。ここでその内容は言えませんが、鶴巻監督たちスタッフが「様にオタオタし始めなんです。後から「ありがとうございます。アフレコ現場でいろんなことが明らかになるものですか」とお礼まで言われたので、「どういうものづくりかいな?」って思ったのが一番印象的でした(笑)。

——すべてを明らかにしないまま進めるのも、『エヴァ』の特徴のようですね。

林原 結局、すべては庵野さんの脳の中で起きていることなんです。それを伝え損ねているのか、あるいは急にひらめいちゃうのか。追っかけるのか、いつか噴射するのを待っているのか、すべて信頼のもとで進めようけど、もう、エヴァンゲリオンのスタジオであるというだけであって、この作り方はどこの誰も継承することも模倣することもできない。そんな空間になっています。

新キャラの人たちも、きつと大変だったでしょうね。私だってすごく何度も録り直しますし、「すぐいいから、もう一回」と言われて、「あつ、出た!」という感じで、別に「監督は私に何を要求しているのかしら」と頭かかえて膝かかえたりすることはないんですよ。ただ「あつ、違うんだな」と。どっちのニュアンスが欲しいのかな、右かな左かな、斜めかな、という感じです。

——庵野さんのストライクゾーンが狭い



as tentative name:
Rei Ayanami

Megumi Hayashibara

ということですか？

林原 いえ、きつと、ドはまりじゃないからなんですよ。ちよつとだけズレてる。監督はど真ん中ストリートか、逆に手を伸ばしても拾うこともできない想定外のボールじゃないと、オッケイにならない。少なくともレイについてはそうですね。特に彼女は精神性がどこまで声に乗っているか、ニュアンス重視の子ですから。嬉しさがあつても出過ぎちゃダメだし、でも嬉しいという気持ちはある。それは声には乗らなくて表情だけで見せる方がいいという場合もあるし。そんな感情の波みたいなものが、ホンの1ミリずれても彼女の性格を左右してしまうので、なおさらだと思えますね。

別レイを演じる上でもいつもと変わらない

——それほどシビアなものだとして、今回の別レイ（台本上での仮表記）はどう演じられましたか？

林原 とても申し訳ない言い方になるんですが、私は「別レイ」に相当する仕事をやりすぎてしまったんですね。関連商品では、本来のレイが絶対に言わないであろうセリフも言うわけで、それがすでに「別レイ」なんです。庵野監督の脳みその中からプリントアウトされたレイだけが唯一のレイだと私の中では思っているの、だから監督の指示にしたがつて動けばいいという感じです。ドラマチッ

ク的なものや衝撃があつたとしても、「私を見て衝撃を受けたことが何？」っていう感じなんです。私は私として存在しろと言われているから、ここに立っている。それがすべてなんです。

——いまちよつと感動しています。その発想自体が、綾波レイそのものなので。

林原 私はレイとしてしかスタジオに行つてませんから。前に『破』ではおみそ汁飲んで「おいしい」って言ったのが話題になりましたが、別に「おいしい」と思つたから、そう言つただけですけど……つて。たとえば強引ですけど、普通の人気分を変えたくて髪の毛を切つたとして、「何があつたの？」「失恋？」とかあれこれ騒がれても、本当に「別に。暑くなつてきたから切つただけ」つてことあるでしょ？ それくらい彼女の中で起きていることしか、私は追つていないんです。それに対してシンジくんがどう思つたとか、どう描かれているかとかは、自分が演じたことを一回すべて忘れて、劇場で映像を見て、初めて味わう感覚なんです。今はまだ完成していないので、そこに至っていませんね。

——今回、別レイのプラグスーツは黒なんです。それはどうでしょうか。

林原 あつ、そうなんだ。ぜんぜん知らないです。黒なの？ あら、すてきね。私、黒好きだから。白も好きだけど。でも「え？ 黒ですか」としか思わないんです。「着ろと言われれば、黒着ますよ」つてぐらいのことですね、私にとっては。

やっぱりその辺なんです。そうした情報、私にはいらななんです。他の作品だったら「なぜ黒なんですか？」という疑問や、それを私はどう受け止めて、どうリアクションすればいいんですか、つてことになるんですけど。彼女はプラグスーツが黒だつてことに何の疑問も抱いていないだろうし、もしも「前の人は白だつたのね」というセリフが仮にあつたとしても、事実だけ。「なんで私、白じゃないのかしら」つていう疑問はおそらくない。そこには別に何にもない。もしあれば監督から指示があると。

——それも綾波レイとゲンドウの関係性を連想させるので、すごいです。

林原 そうかな……。やっぱり私もレイちゃんと付き合ひ長いですからね。感覚を共有しないと、彼女にはなれないので、いちいちいろんな感情に振り回されてはね……。

すでにいろんなインタビューで言っているんですが、TVシリーズで自爆したところで、私の中のレイは一回終わつてしまつたんです。それ以外は全部「別レイ」なんです。ただ、今度の『序』だけは少し前のレイちゃんに再会できた気がしました。それまでは何度同じセリフをしゃべつても、すべて別レイで。

でも、久しぶりに会えたと思つたのに、『破』では使徒に取りこまれて、「ああ、今回のレイはこんな成長の仕方をするのか……」と思つたら、案の定、閉じ込められて救い出されず、「やっぱり次が出て



きたか……」と。そこは淡々としています。レイちゃんには、疑問が無駄……むしろ邪魔なんですね。いらないんです。だから私も、ただ事実だけを受け止めて、落とし込んで肉声にしています。

現実に行きかかっていることを取りこんでいく現場

——とはいえ次回作もまだありますし、今後に期待することはありますか？

林原 なんか……ちよつと面白くなっちゃったな(笑)。TV録ってたときも毎週録ってたわけじゃないんです。監督が「ライブみたいな感じでやりたい。そのときの瞬間瞬間の気持ちだけでやりたい」と言ってる、今回はそれに近い感覚がありますね。監督がいま描きたいエヴァンゲリオンに着地点って、一応は決めてあるにしても、それが変わっちゃうこともあるでしょうね。時代の中で。

——それはありますね。日々事件も起きるし、時間経過も積み重なりますし。

林原 劇中では14年経ってるんですよ。前のアフレコ中には役者が「声が歳とった」と、失礼なことも言われた！なんてエピソードも聞きましたけど(笑)。私は過去のエヴァを見返して臨んだってこともあるし、レイちゃんは基本歳をとらないだろうから、私の中の時代感をわーっと巻き戻して挑みましたけど。『序』『破』では、他の役者さんは、あえて、年齢をとったなりの「今」の芝居を

しようとしたら、前の芝居を要求されて戸惑った、なんて話も漏れ聞こえてきて……。それで14年経った設定になったのかなって、勝手に思っちゃったのね。まあ、本当は前から考えていたことかもしれないんだけど……。わかんないや。あえて、探りもしないし。この変化の感覚が、TVのときに非常に酷似していて、何か監督がインスパイアされたことによって、先が変わっていく感じ。あくまであたしの中で、ですけどね。

何でもいいんですよ。描きたいと思ったことを大人の事情の中でも、しっかりと描ききれていればね。エヴァンゲリオンスタッフの方たちが。この先、どういう展開にされても、驚かないですね。ぜひ、お客さんといっしょにビックリしたいと思っています。CGを含め現在の技術によって、エヴァンゲリオンの世界の独自性がより拡がりましたしね。使徒とか超セクシーだし(笑)、常に新しさがスタッフの中にあるってことが、すごいなって思います。

——林原さんは、長く続いてきた『エヴァ』という作品をどう見られていますか。林原 やっぱり作品として世に公開されたたん、過去のものになっていくものじゃないですか。前のときも「エヴァみたいな作品」とか「綾波レイみたいなキャラ」とか、「エヴァ風なもの」をいっぱい生み出したわけですよ。今回も結局、『エヴァ』が投じた『Q』としてのクエスチョンって、「エヴァはエヴァを超

えていかなければいけない」ってことじゃないでしょうか。何しろ「エヴァ風」「綾波風」なものの元ですからね。

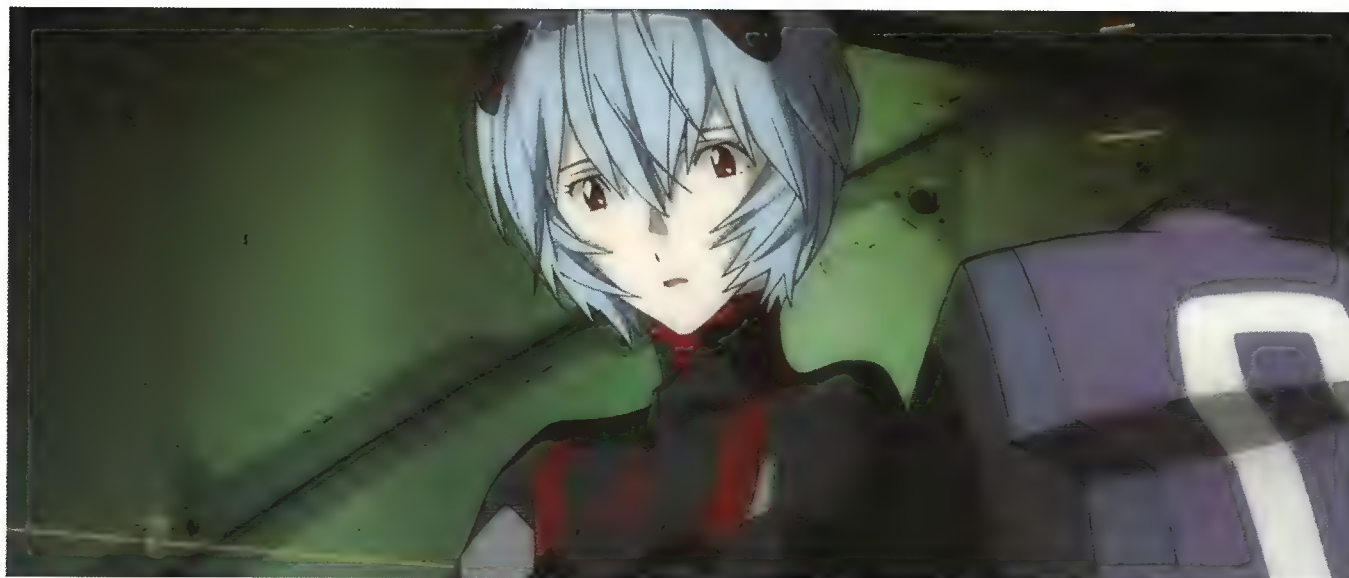
——「エヴァによってエヴァを超える」というのは、庵野総監督の大きな課題だと、『序』のときにうかがいました。

林原 あつ、そうなんです。じゃあ、いいこと言った私(笑)。かと言って、そんなに「新しいもの」「新しいもの」って言われても、わいて出てくるものでもないですからね。それをふまえて、きちんとエンターテインメントにする作業を続けているのは、すごいなって思います。ですから、プラグスーツが何色になるうとも、参加できて幸せです。

——綾波以外にも林原さんは碇ユイも初号機も演じられて、まさに物語の中心にいるわけです。でも、その中心にある種の空虚さが垣間見える感じに、今日はぐっときました。

林原 削って削って削ってレイちゃんにたどりついてますからね。いらぬものはいらぬんです。感情の起伏、興味や関心についても。伝えたいこと、いま感じていること、しなければいけないこと、確実に見えていること。それ以外は何もない。レイにも私にも……。そんな感じです。

はやしばら・めぐみ 東京都出身。ウッドバークオフィス所属。代表作は『らんま1/2(らんま役)』『スレイヤーズ(リナリインバース役)』『名探偵コナン(灰原哀役)』など。キングレコード所属の歌手としても活躍中。



宮村優子

(式波・アスカ・ラングレー役)

「歩き出したのね、とうとう」みたいな感じです。

——まず台本をご覧になって、率直な第一印象をお願いします。

宮村 最初の1回読んだだけでは、全然イメージが掴めなかったです。ただ新作っていうことは、しみじみと感じました。

なんていうか……。歩き出したのね、とうとう。

この日が来ちゃったのね。みたいな感じです。

役はすべての時間を過ごしてきて、『Q』のことをわかってるだろうけど、演じる側は、台本もらった時点では、『Q』を初めて映画館で見るお客さんと同じで、なにごさたのかどうしてこうなってるのか、まったくわからないままですよ。何度読んでもイメージがはっきりつかめないままで。

わからないけど、とにかくアフレコ現場に行ってみたら、なんかわかるだろうと。

エヴァっていままでもずーっと、そうだったから、とくに気持ちのなかはあわてず、さわがずって感じでした。

エヴァのおかげで、何があっても動じ

ない精神力を身につけたというか、慣らされた、みたいですね(笑)。

でもなんか、肌ではざわざわとしたもの感じてました。

んー、虫の知らせっていうか……。異物を飲み込む前のような嫌な感じ？ っていうか。

でもどんな未来でも受け入れなきゃいけないっていうのはもう覚悟してまし。

腹は決まってきました。

——アスカについては、どんなことを感じられましたか？

宮村 生死不明だったから、そこを心配してくれる『破』を見たお客さんが多かったんですけども。

とにかくにもまあまずは生きてて、で、戦つてると。

だけでも生きてるには生きてるけど、完全に『破』のアスカとも今までのどのアスカとも、まったく違う新しいアスカですね。

ま、つまりやつぱり、歩き出したんだな、っていう思いですね。

「あんたバカア？」はもう、卒業じゃないですかね？

寂しいけど、アスカの幸せを信じて、ちゃんとこの1歩を歩きだすからねって。そういうふうにかやに語りかけてあげてはいないけど、まあそういう気持ちです。

——アスカの演技については、どんなことを留意されましたか？

宮村 演技については、監督やスタッフ

の皆さんと話しあって、進めていきました。

話しあうといっても、私の方は「なぜ？ こうなってるんですか？」という質問ばかり……。

で、「どうだよあーだよ」と、答えてもらうってことなんですけど。

たとえば、ここで言っているのかわかんないけど。

精神的には14年経過、肉体的には14歳のままとギャップという「エヴァの呪縛」のことだって、ほんとに突き詰めたら、「なんで？ なんで？」ばっかりになっちゃう。

だから説明してもらったら、もうそれはそうなんだ、と。

そうしていくうちに監督が、「アスカはもうプロの傭兵なんだ」って、おっしゃって。武将とも言ってたかな？

アフレコはだいぶ前にやったんで、そのあたり詳しいやりとりは忘れちゃったけど、プロの傭兵で武将で眼帯ですよ。

やっと今回のアスカのイメージが、自分でできはじめた瞬間でした。

——アフレコの実作業について、現場の雰囲気など感じられたことがあれば、お願いします。もし、印象に残ったことなどあれば。

宮村 一人のアフレコだったから寂しかったけど、今回は一人のアフレコの方が、役作りというかシチュエーションには合ってたかも。

思い出深い出来事は……。



猫です……。

猫に悩まされました。

あのアフレコ日から、猫が頭から離れません……。

——オーストラリアからのご参加ということも含め、宮村さんご自身の変化とエヴァという作品の変化の関連で、何か感じられることがあればお願いします

宮村 オーストラリアに住んでもうそろそろ4年です。その間に下の子が生まれて、その子も1歳半になるうかというところで、自分の人生の変化にあえて合わせて考えるなら、新しく歩き出した『新劇場版エヴァ』、私の1歳で歩き出した息子君への思いにちょっとだけ似てるかな？
最初にも書いたように、ついについてアスカが、新しいステージに歩き出していくのね、って寂しいような、楽しみなような、頼もしさとか、嬉しさとか混ざったような。

息子も転んでも転んでも、自分で立ち上がってカッコ良かったですよ！。

母は息子の幸せを信じて、後ろから見守ってあげるしかなく。

なんて。

かわいくってついつい手を差し伸べちゃうことも、いっぱいありますけどね！

親ばか話ですみません。

——宮村さんにとって、次で完結予定の『新劇場版』という作品は、どういう存在になっていきそうでしょうか？ アスカの行く末や物語への期待などありました

ら、お願いします。

宮村 何回も言うように、「アスカの行末は幸せ」って信じてるから！

エヴァ始まって以来、ずっとそれだけが願いだっただけから。

アスカが幸せならどんな結末でも

にゃー！

でも

わん！

でも

ま、とつくの昔に腹くくってるから

何が来ても、かーちゃんがんばる

よ！

……ってな感じで、大丈夫っす！

(メール取材を再構成)

みやむら・ゆうこ 兵庫県出身。東京俳優生活協同組合所属。代表作は『V.S 騎士ラムネ&40炎』(パフェ役)、『南海奇皇』(島原海潮役)、『NieA 7』(ニアシメイ役)など。2009年よりオーストラリア在住。



坂本真綾

(真希波・マリ・イラストリアス役)

自信に満ちていて、しかもEVAに乗れてホントに楽しいんだなっていう気持ちがいかに伝わって。

——まず『破』で新キャラクターとして参加された時は、いかがでしたか。

坂本 正直申し上げて『エヴァンゲリオン』には本当にうとくて、そういう意味では先入観なしでフラットに参加させていただきました。『エヴァ』と青春を過ごした熱いファンとは違う立場だからこそお引き受けできたというくらい、実は事の重大さを分かっていなかったところから始まっています。「新キャラが出るってどういうこと？」みたいな気持ちで嬉しい一方、何をもって私にしてくださいさったんだろうとドキドキしました。

キャストを伏せた状態が長く続いていたんですが、発表されたたん、どこに行っても、ものすごい反響をいただいたんです。スタッフ、キャストをはじめ、親戚や学生時代の友だちまで、ありとあらゆる人から「今度新キャラやるんだって？」と話題にしてくださいさったんですね。そのとき、これだけ大勢のお客さんに注目されている作品の、すごい重要な役をやらせていただくと、後からジワジワと気づいていった感じなんです。むしろ

それくらいだからこそ、できたんだと思います。もともとエヴァ好きだったら、きっとプレッシャーに耐えられなかったかもしれないですね。

——『破』ではマリをどう描くかスタッフも悩ましかった中、坂本さんのテストテイクが素晴らしくて、録音に立ち会っていて空気が一変したのを覚えてます。

坂本 オーディションもなくて誰も声を聞いたことがないわけですから、マリとしての正解がない状態だったと思うんです。あの日は本当に見に来られた方が多くて、その視線を感じながら緊張しつつ演技したんですが、一方では楽しくもあったんです。割と自由に演じたら、それがあまりにもすんなりOKが出たんで、本当にいいのかなって不安に思ってたくらいです。

——すごく良かったです。新キャラクターがまさに生命を獲得した瞬間でした。坂本 演じる前には林原さんや緒方さんがロビーにいらして、「ようこそ、このエヴァの世界へ」って言われたんです。「20テイク、30テイクは当たり前前だけど、みんなそうだから安心してね」とか言われて、「ええっ?」みたいな(笑)。かなりビクビクしながらブースに入っていたので、あの長いシーンが「今の感じで」とほぼ一発OKだったので「ホントに?」って。あまりにすんなり行ったので、ホッとしたり逆に懐疑的になったりで……。他の方とは絡んでないシーンなので、まずは自分のことだけ考えて集中できたの

も良かったですね。マリ自身が初陣でドキドキワクワクしてる感じと、自分自身の心境がうまくシンクロしていたので、緊張感すら良いスパイスになって活かされたという感じだったと思います。

——やはりこの作品は、シンクロ感とライブ感が重要なんですね。

坂本 庵野さんからは「鶴巻に具体的なイメージを任せてあるから」と言われて、現場では鶴巻監督が「こうして欲しい」とおっしゃることが多く、お二人で音響監督みたいな感じでした。『破』の時点ではこの先どうなるか、私自身はもちろん知らなかったですが、皆さんにどう受け止められるかで、以後の役割も変わるんだろうなと思ってました。

ムリせず演じた結果

2作目でなじんだ感じに

——スタッフ間でもマリは模索しながらでしたが、坂本さんとしてはどういうアプローチでしたか?

坂本 庵野さんからいただいた「昭和のオヤジ」というキーワードは、はっきりして分かります。やりやすかったです。他のキャラとは全然違って、すし、「なるほど」と腑に落ちた感じがします。私も昭和生まれですし、落ちつけるというかムリしなくていいというか。台本上だと「ニヤ」という口癖があったり、強気が変わっていて、ぶっとんだセリフもあったり、アニメっぽい可愛らしさも



あるんで、自分があまり演ってこなかったキャラクターだと思ったんです。どれくらいじっくり込むべきか、ちょっと分からなかったんですけど、フタを開けてみたら、自分から離れることはなかったんです。地声でしたし、かなりムリせずに演じることができましたね。「ニャ」って語尾にしても、「昭和のオヤジ」というキーワードの振れ幅の中で言えはいんだなど、すごくスッキリしたんです。結局、自分らしいトーンでできて、すごくやりやすいところに落ち着きました。

——それをふまえて、今回の『Q』はどんな感じでしょうか？

坂本 どうやら前回、「ニャ」という口癖と「歌っていた」というところにインパクトがあつたようですね。今回は、そんな特徴をかなり踏襲していると感じました。とにかくずっと歌ってますし、「ニャ」って何度も言ってます。ただ今回は新キャラもたくさん登場しているし、目新しいものが多いという登場するので、みなさんの注目ポイントも分散されて、マリに関してはあまりサプライズはないかもしれませんが。

——その分、2作目にして非常になじんだ感じもしています。

坂本 ありがたいことに、なじんだ感私は私すごくあります。これだけのチームにボツと入ってくるわけですから、最初は「受け入れてもらえるのかな？」と思ってました。最近の商品でも、以前のキャラと同等に置かれているのを見

て、「ずっといたみたいだな」って。新キャラだったことも、自分でもうっかり忘れてしまいうるくらい溶け込ませていただいているし、ありがたいなって思いつつ、すごくやりがいを感じています。今回の『Q』でも私と同様にドキドキしながら入ってきた新キャラがいっぱいいますが、私も1作分だけ先輩として落ちついてきたかなって。

楽しそうに鼻歌をずっと歌っているマリ

——前作との間に14年経過してたり、アスカと呼吸を合わせて戦っていることなどは、どんな説明がありましたか？

坂本 実は物語そのものの流れは、よく理解してなかったかもしれないですね。私の出番は戦闘シーンが多かったのですが、こういう敵と戦っているのかとか、誰とどれくらいの距離にいるのかとか、そんなことを中心に考えてました。物語や設定は、正直よく分からないです。新キャラさんとも絡まないし、戦闘要員という感じでしたから。ただ、相変わらずひょうひょうと、あまり悩んだりせずに、我が道を行くみたいな感じで演じてました。

——また「昭和の歌」を歌ってますね。

坂本 アバンではOFF(画面内にキャラが写っていない状態)でずっとマリの歌が聞こえているので、「アカペラで、お願いします」と懐メロを3〜4曲、フルコーラスで歌った中から選ばれています。

すっかり鼻歌キャラになったなと(笑)。何か作業しながらだとは思いますが、「あいかわらずマリは楽しそうだなあ、いなあ」って思いつつ、とにかく楽しさが伝わるようにと思いました。

——役の解釈としては、他にどんなことを感じられましたか？

坂本 最初に庵野さんがおっしゃったことで印象に残っているのが、「言動と行動に差がない人」という言葉なんです。裏表をそれほど考えなくていい。一貫して自分のやりたいことと言動が一致している。深みはもちろんあるにしても、裏の裏をかくとか考えなくてよくて、どちらかと言えばシンプルな人だって。

実は最初に台本やキャラ表を見たときには、可愛かったり強気だったりいろんな顔を持っているけど、ホントはどんな魂胆があるんだろうって、まだ見えてないちよつと不思議な部分を感じてたんです。でも、彼女の行動に関してはあまり裏がなく、グチグチ悩んだりもしないし、誰かを陥れたりするタイプでもない。どちらかと言えば、他の人たちよりも分かりやすいんです、この人とはいうことを言われました。それで「あまり悩まなくていいな」と思ったんです。台本に見えてる部分に素直に演じていけばいいんだなと。

ですから、今回も考えすぎないようにしています。周囲の状況に引っ張られず、常にマイペース。自分の持ち味を分かっている行動している人。どんな状況であ



れ、割とポジティブだったり、自分に対する自信がすごくある人。そんな感じですね。特に戦闘シーンばかりだったので、自信に満ちていて、しかもEVAに乗れてホントに楽しんだなっていう気持ちで伝わればいいかなって。

マリのことをもっと深く知りたい

——裏がないとは言いつつ、マリは独特の余裕がある表情も見えますよね。

坂本 どこか達観したような落ち着いた感じがあるのかなと。何か俯瞰で見ているような視点もあり、客観的でもありますよね。だから余計にシンジとは同じところで会話していない感じになるんです。実はいろんなことを経験している人で、そういう余裕かもしれませんね。設定としては、私は分かってないんですが。

——今後への期待はありますか。

坂本 せっかく出てきた新キャラですから、可能な限り活躍してもらいたいです。今回もうちょっと出自が分かるかと思ったり、保留みたいになったので、次回ではいろんな謎が解明されるのか、マリのことをもっとよく知りたいと思ってます。「Q」は収録も順調で、さくつと戦闘して「お疲れさまでした！」みたいな感じ。知りたいと思ってたことが先延ばしになったので、早く知りたいなと。いつも台本いただくまで何も知らない状態なので、私自身も楽しませていただいています。

——「Q」という作品に対しては、どんなことを感じられましたか。

坂本 『破』の時は、TVシリーズの場面もある中にマリがいるという感じだったので、勉強してきました。でも今回は、まるで知らないキャラがいる時点で驚いたし、設定にしても「完成品を観るまでいいや」とあきらめた部分もありました。

——ピンポイントで美味しいところを持って印象もありますね。昭和歌謡曲だけでなく、アニソンもありましたし。坂本 『グランプリの鷹』(77)なんて生まれる前の作品で知らなかったし、「歌いながらセリフに移行してほしい」って言われて(笑)。シリアスな場面はあまりなく、かと言って不真面目でもなくて、いつもニヤニヤしながら生き生きと活躍してますよね。サバサバしててからつとしていて、他のみんなとあまりにも違い過ぎるから、それがいいなと思っています。

——最後に、みなさんへのメッセージをいただけますか。

坂本 まずは、マリをたくさんの方に受け止めていただいて、とても感謝しています。私としても、普段あまりできないような経験をさせていただける現場なので、刺激的ですし勉強になりますし、参加させていただいて良かったなと思います。たぶんこの先も、マリが私に残してくれるものって、ものすごく大きいと思います。何によらず新しいものって、普通に違和感があると思うんです。「破」ではその異物感こそが私の役割でしたが、

想像以上にみなさんに受け入れられ、盛り上がり上がっていただけて、ホントに嬉しかったです。もうずっといたんじゃないかって、私自身が思えるくらいになじませていただいたのも、みなさんのおかげです。「破」が公開になるまで不安もあったんですが、新作が楽しみにするくらいになりましたし、みなさんに育てていただいたキャラクターという感じがします。ですから、最後までマリが何のために入ってきたのか、私といっしょに見届けたいだけだと思います。

さかもと・まあや 東京都出身。フォーチュネリスト所属。代表作は『天空のエスカフローネ』(神崎ひとみ役)、『トップをねらえ2』(ラルク・メルク・マーレ)、『荒川アンダーザブリッジ』(二ノ役)など。歌手としても大人気で、アルバム多数。



三石琴乃 (葛城ミサト役)

命令する時もいっさい躊躇はなく、「これは行くしかないでしょう!」「倒れるなら前に向かって!」みたいな、そんな気持ちをこめてました。

——今回の「Q」は14年も時間がジャンプして驚きがあったと思いますが、キャストとしてはいかがでしたか。

三石 役者にも「エヴァの世界が分かってる派」と「分からないなりにがんばってます派」があるんです。私は後者で、まったく分かっていない方です(笑)。

——特にシンジへのミサトの態度を見てみると、いろいろあったようです。

三石 私が思うに、この14年間に沢山傷つき涙も枯れ果て、そして乗り越えて心の中では消化したつもりになっていたのに、シンジくんの姿を見た瞬間、ぐっとこみあげてきたんでしょうね。「冷たく冷たく演ってください」って言われて、その通りにしてみたら「ドスが効き過ぎて怖い」って言われちゃって、「えっ、違うの?」って(笑)。

私なりに、そんな昔年の想いをぶつけてみたんですが、却下になってしまい、「普通でいいです。あまりつくらないでいいです」と。それで私なりの「普通の感覚」で演ってみたら、それもまた「違

う」って言われて。私なりにいろいろ出した手札がどれも違うので、「じゃあ、どれかなあ……」なんて混乱しながら入っていききました。

——庵野総監督からは、状況や設定の説明はあったのでしょうか?

三石 年齢的には、今の私の実年齢に近くなつたので、「そのまま演ってほしい」と言われてました。「序」のときは「もうちょっと若く」って何度も指示されて一所懸命だったんですが、「今回は役者さんが無理なくいい年齢設定にしました」と。

ネルフに敵対するヴィレという組織だとか、こんな立派なヴァンダーという船まで建造してシンジくんを奪い返してとか……。そんな台本にあること以外、「間にあったこと」は、すべて自分の憶測です。ただ、この新しいコスチュームはとってもし気に入ってます。新しいミサトの第一印象は「ああ、すごく好き。格好良くなったなあ」ってことで、とにかくコスチューム推しです。

この高いエリ、応援団かヤマトの沖田艦長かって感じで、この艦長服ならコスプレしてもいいくらいですよ(笑)。最高に格好いいです。

——とても凛々しいですよ。女性のファンが増えそうですね。

三石 とは言え、戦艦で指揮する艦長になつたので、叫びセリフがほとんどになりましたね。その分、お芝居としての楽しみは正直、物足りなくなりました。

前は愉快的な生活も描かれていたし、自分の想いと立場とどっちをとるか葛藤もあって、「行きなさい、シンジくん!」と思いきり言えたり。内面の振れ幅がいつばいあって、とっても楽しかったんです。

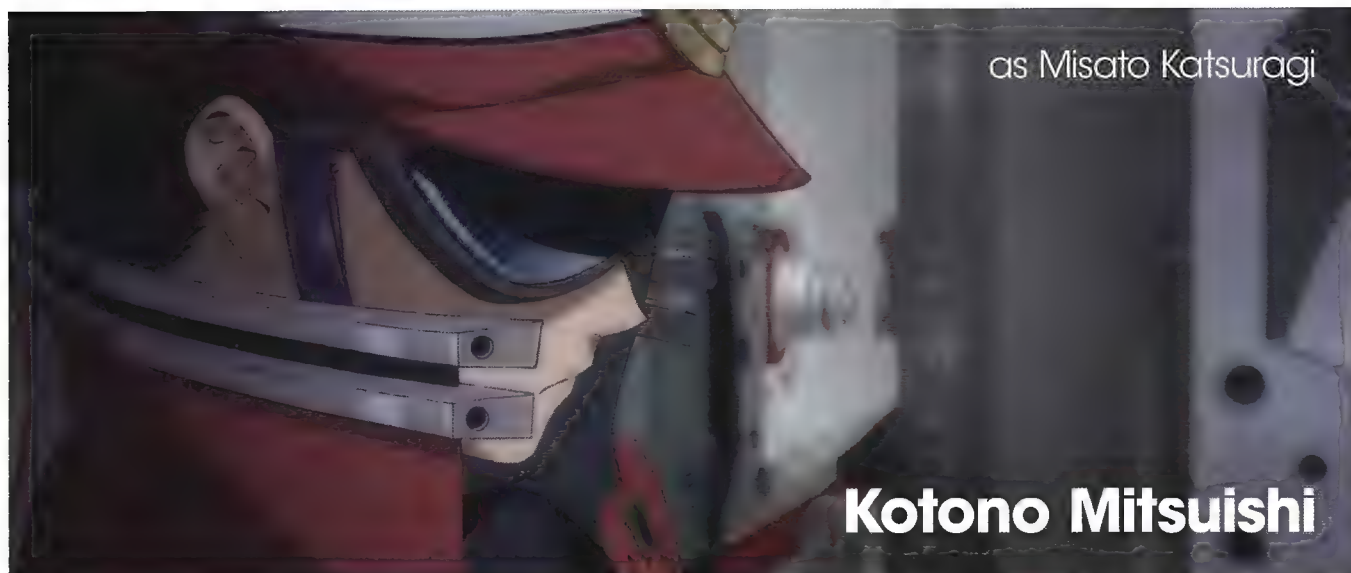
でもね……。いきなりシンジくんにあんな冷たいことを言ったら、シンジくん心を閉ざすに決まってるじゃない。「ミサト、どうしたの?」って思いながら、それもできないくらい大変なことが14年間にあったんだな……と、想像しつつ演りまして。「きつとミサトなりの正義を貫いてきて、その結果、こうなってるんでしょ」と、今は受け止めています。

——たくましい感じがしました。前とは違う強さがあるなど。

三石 その強さにしても、ミサトの意志ではなく「獲得しちゃった……」って感じなんです。ただ、リツコとともに生き残っていたので、「良かったなあ」とも思いました。今回のリツコ、ロシアのスパイみたいですね。一步一步引いてミサトを支えてくれるって雰囲気良かったです。あの若かった女同士の闘いも、ひとヤマ越えたのになって感じもしましたね。

——リツコとミサトとの関係は、ネルフから独立したこともあって、冬月とゲンドウっぱくも見えたんですよ。

三石 ああ……うんうん、そうですね。じゃあ今度、こういう風に両手でクチパク隠さないとね(笑)。



as Misato Katsuragi

Kotono Mitsuishi

14年間の苦勞を乗り越えて 獲得したリーダーシップ

——たくましい印象のミサトが頂点にいて、旧クルーがベテランに成長して若手がいる。みんなを引っ張るリーダーとしての感想はいかがですか。

三石 前は動くにしても上の指示をあおいでいましたが、今回は確実に懐の深いリーダーになってますね。きつと何かはつきりした目的ができたからでしょう。命令する時もうっさい躊躇はなく、「これは行くしかないでしょう!」「倒れるなら前に向かって!」みたいな、そんな気持ちをこめてました。マヤちゃんもたくましくなったし、青葉くんも日向くんも、みんな生き残っていて良かった……。苦勞した感じは、否めませんがね。

若手では唇の厚いミドリが大好きです。「ムリ」みたいなことを言うけど、「やれ!」と言うとやれる。これはみどころがあるぞと。男子の多摩は個性を出さず、驚きながらも、やっぱり自分の仕事はスムーズにこなしてました。ちゃんと信頼をおいている人が集まっているんだろうなって印象です。新キャラでも高橋は加持の同期なんですよ? じゃあ、ミサトとも同年? 衝撃ですね(笑)。

きつとお客さんは何を観ても「えっ? えっ?」って感じでしょう。私たちだってそうだから。そもそもミサトだって認識してもらえるのか、ものすごく心配してるんですよ(笑)。

——他に収録現場で印象的だったことはありますか?

三石 風呂上がりみたいな緒方ちゃんが印象的でした。私の前に、石田ちゃんと緒方ちゃんのシーンの収録が長いってしました。ようやく「お待たせしました!」と言われたのでスタジオに入っていたら、ぼ——つと上気してほっこりしている緒方ちゃん、まるでお風呂上がり(笑)。(かすれ声で)「終わりましたよ……。琴乃さん……」ってささやくから、思わず「お、お疲れさまでした!」って(笑)。そして「待っていたよ!」って声をかけたら、(満足そうに微笑んで)「……はい……」なんて。それで石田くんの方を見たら、立ち上がって「すいません、お待たせしちゃって」と恐縮してる。もうその対照的なことと言ったら、「役とまったく逆じゃん!」って(笑)。

——目に浮かぶようです(笑)。カヲルとシンジのクライマックスは、特に大変だったと緒方さんからも聞いてますので、まさにそこでしょうね。

三石 ミサトの方はホントに叫ぶのが大変で、しかも一回録ったんだけど、ドイツ語っぽい難しい言葉が追加になって別の日に録り直ししました。

——やはり苦勞されてますね。長くエヴァに参加されてきた三石さんからご覧になって、今回の映画はどうですか。

三石 どんどん時代が経過しましたので、ああ山が動いたなって思います。この空白の期間を想像するのが楽しく、盛り上

がってしまったのでしょね。私にとっては「行け行け!」という感じです。やっぱり艦長ですから。苦しい中でもミサトは自分にまっすぐ生きているんだなってのが見えたので、それは良かったと思います。

あとは子どもたちは幸せになってほしいなど。歳をとらないって、ずるいよね(笑)。でも、それもまた背負っちゃってるのかな。ラストはアスカがバリバリモリモリと、威勢良くシンジくんを叱咤していたので、「そう言えばミサトも昔そんなことをやったなあ」って感じ。そして「シンジ、また同じことやってるよ!」って気づきました(笑)。あの時のアスカの蹴りが気持ち良くて、今回『Q』での私のツボはミサトのコスチュームとアスカの蹴りなんです(笑)。

——では、この先も期待でしょうか?

三石 もちろん期待は、みなさんと同じように私も大いんです。きつとスタッフのみなさんは期待を裏切らずやってくれると信じて、ずっと待ちましよう。ミサトは「サービス! サービス!」というノリとは別のステージに行ってしまったので、そのギャップをどう埋めてくれるのかなーって、ちよつと心配です(笑)。

みついし・ことの フリー。代表作は『美少女戦士セーラームーン』(月野うさぎ役)、『機動戦士ガンダムSEED』(マリュー・ラミアス役)、『ドラえもん』(野比玉子役)、『ワンピース』(ポア・ハンコック役)など。



山口由里子 (赤木リツコ役)

オンナを捨てられない人。だからそれだけにね……。変な話、「死んじやうかも」って思っんですよ。

——前作から14年が経過したという設定ですが、まずその大きな変化をどう感じられましたか？

山口 実は収録現場の映像で初めて全体を確認したようなものなんです。アフレコ用ビデオはいただきましたが、収録直前でしたから、自分の出番だけチェックして出かけた感じで。

これ(キャラ表)を見るのも今が初めてです(笑)。

——新しい役者さんは、あらかじめキャラ表を渡されていたようですが、以前からの方は違ったみたいですね。

山口 リツコのスタイルが変わってなくて良かったです。かっこよくなりましたし、本当に……きれいな人。

——実際の収録に入られて、いかがでしたか。

山口 『エヴァ』の場合、自分だけで画を見るのと庵野さんと会話しながら見るのでは、ぜんぜん違う。想像をはるかに超えています。自宅では瞬時に「エヴァの世界」には行けない。全体のストーリーも分からないし、どこに気持ちを

もっていけばいいか曖昧なままアフレコに臨みました。前回は、完成したフィルムを観て、「ちよつと違ったな」と思った部分がありました。庵野さんには申告しましたが(笑)。

——今回、時間が飛んだ間の出来事について、どう考えられていますか。

山口 その間にリツコが何をしてたのか、まったく知らされていません。セリフの中に多少の情報が入っていますが、勝手に想像するしかありません。もう少し教えてほしいけど、必要のないことなのかな……。

——外見的には髪も切ったし、相当なことがあった感じを受けます。

山口 まず「リツコが生きて良かった」というのが第一印象。だってもう……ねえ、また死ぬんじゃないかって。『破』と『Q』の間でいなくなって「あの人はね」なんて語られたりしないかと心配でした(笑)。

リツコって、いつ殺されてもいいところにいるんじゃないかと。前の劇場版で一回殺されますから。あのとき一度、リツコは終わってるんです。

——その終わった感じがするところから始められて、今はまた新しいところに来ています。

山口 私自身はTVシリーズの『エヴァ』が声優の初仕事です。アニメの世界をまったく知らないで、マイクの前でしゃべったこと自体が初めてでした。TVシリーズ1話から最終回まで、ずっと緊張

しっぱなし。赤木リツコを演じることはとっても好きでしたが、プレッシャーと緊張で、体もこわしました。だから、TVシリーズは一度も観たことがなくて。自分としては「やり直したい」という想いをずっと抱えてきたんです。なので、『新劇場版』のお話があったときは、すごく嬉しかったです。

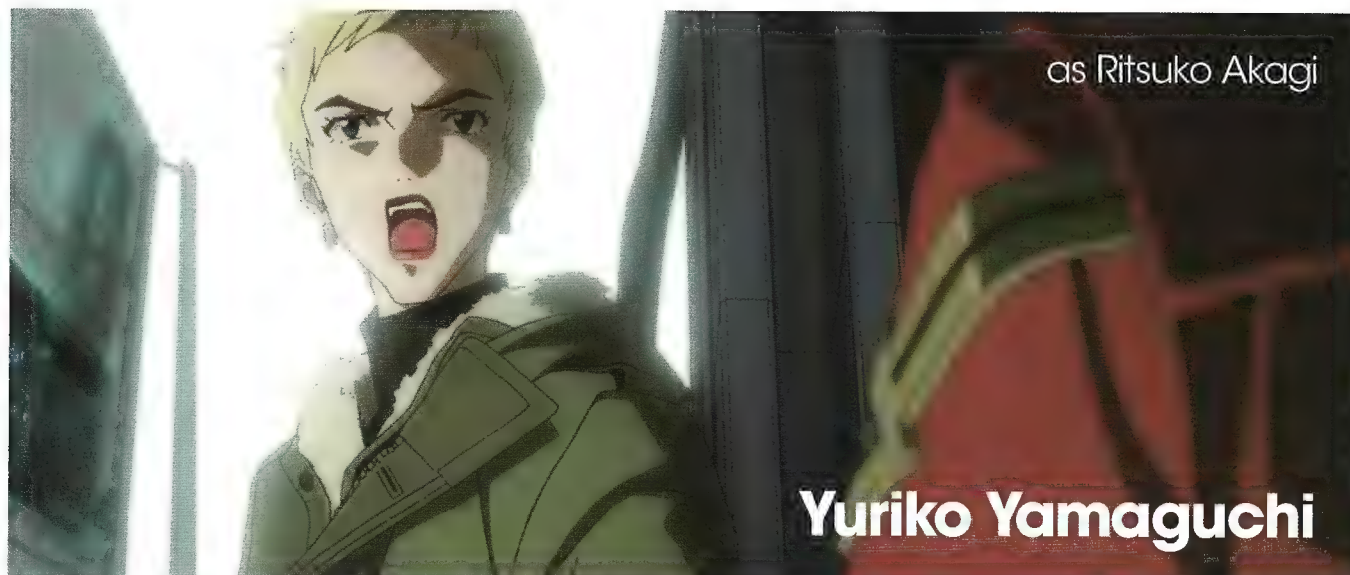
オンナであることを意識しながらの演技

——リツコはクールな科学者ですし、セリフ自体も難しいですよ。

山口 ええ。TVシリーズのころ、私は新人なのに、リツコは周囲を引っ張っていかなければいけない役柄でしょ。感情も出さず、とにかく冷静に強く、甘えも出してはいけなくて。私には、一生ご縁のないような言葉がいっぱい出てくるし(笑)。それをさらっと言わなければいけなくて。ホントに大変でした。

ただ庵野さんの作り方がね……。指示が細かいところとか絶対に妥協しない姿勢とか、舞台つくっていくのとまったく同じで。録り直しにしても、私の方こそ何回でもお願いしたいし、演出家の要求に応えられない役者でいたくないって、プライドだけはなまいきにもすごくありましたから(笑)。

私には庵野さんの壮大な世界観が分からないですから。自分の主張よりも、庵野さんが考えているところに近づきたい。



その一心でした。

——そんな庵野監督がリツコに求めてるものって何だと思われませんか？

山口 「オンナである」ってところですよ。

これだけは守らなければいけない、そう思ってます。リツコは、オンナを捨てられない人。だからそれだけに……。変な話、「死んじゃうかも」って思うんですよ。いざというときに、ミサトは飛び越えられる。自分はリツコとは全然違います、そこは好きな部分で。

庵野さんが「ちよつと違う」って言うときは、リツコを越えて自分の強さが出ちゃってる気がします。「あつ、今は私だった」って思うわけです(笑)。

——今回の映画では、また「つづく」になっちゃいましたか？

山口 心配してるんです。リツコは行き場がない気がする。もし一人きりになつたら、きつと生きて行けない。自分一人では何もできない気がします。

——面白いですね。設定的には全部知っているようなところがあるリツコの内面がそうだというのは。だいたいみんなの知らないことを、突然話し始めるのに。

山口 知識はね……。頭はいいけれど……。でも、それってコンピュータみたいなものでしょ。人としてはね……。一所懸命、忠実に、真面目に生きてきただけなんですけどね。内面が弱いから……。だからこそ、知識で補っているのかもしれない。

——そんなリツコが髪を切った理由があると思いますが、

山口 「神殺し」、すごい船でしょ。「どうやって作ったの？」って。台本を読んだときは、「破」からどこへ向うのか、理解できず、悩みました。あと1作で、光が見えるところに行つてほしいですけど……。

——面白いですね。設定的には全部知っているようなところがあるリツコの内面がそうだというのは。だいたいみんなの知らないことを、突然話し始めるのに。

山口 知識はね……。頭はいいけれど……。でも、それってコンピュータみたいなものでしょ。人としてはね……。一所懸命、忠実に、真面目に生きてきただけなんですけどね。内面が弱いから……。だからこそ、知識で補っているのかもしれない。

——そんなリツコが髪を切った理由があると思いますが、

山口 「神殺し」、すごい船でしょ。「どうやって作ったの？」って。台本を読んだときは、「破」からどこへ向うのか、理解できず、悩みました。あと1作で、光が見えるところに行つてほしいですけど……。

——面白いですね。設定的には全部知っているようなところがあるリツコの内面がそうだというのは。だいたいみんなの知らないことを、突然話し始めるのに。

山口 知識はね……。頭はいいけれど……。でも、それってコンピュータみたいなものでしょ。人としてはね……。一所懸命、忠実に、真面目に生きてきただけなんですけどね。内面が弱いから……。だからこそ、知識で補っているのかもしれない。

——そんなリツコが髪を切った理由があると思いますが、

——と思いますが、山口さん個人としてはどう解釈されてますか？

山口 やっぱり決別でしょうね。別れの決意もあるでしょうし、きつと……終ったんではないかな。もう何にも残ってないんだと思うんです。

——戦艦のブリッジに立っているミサトとリツコの関係が、ゲンドウと冬月に近いなとも感じたんですが。

山口 私もそう思いました。リツコとしては、「いいところに収まってる」って。楽なんじゃないかな。もっと途中も描いてほしいですけど。

——ヴァンダーの開発は、リツコが鍵を握ってたはずですよ。EVA初号機が動力です。

山口 「神殺し」、すごい船でしょ。「どうやって作ったの？」って。台本を読んだときは、「破」からどこへ向うのか、理解できず、悩みました。あと1作で、光が見えるところに行つてほしいですけど……。

——面白いですね。設定的には全部知っているようなところがあるリツコの内面がそうだというのは。だいたいみんなの知らないことを、突然話し始めるのに。

山口 知識はね……。頭はいいけれど……。でも、それってコンピュータみたいなものでしょ。人としてはね……。一所懸命、忠実に、真面目に生きてきただけなんですけどね。内面が弱いから……。だからこそ、知識で補っているのかもしれない。

——そんなリツコが髪を切った理由があると思いますが、

山口 「神殺し」、すごい船でしょ。「どうやって作ったの？」って。台本を読んだときは、「破」からどこへ向うのか、理解できず、悩みました。あと1作で、光が見えるところに行つてほしいですけど……。

——面白いですね。設定的には全部知っているようなところがあるリツコの内面がそうだというのは。だいたいみんなの知らないことを、突然話し始めるのに。

山口 知識はね……。頭はいいけれど……。でも、それってコンピュータみたいなものでしょ。人としてはね……。一所懸命、忠実に、真面目に生きてきただけなんですけどね。内面が弱いから……。だからこそ、知識で補っているのかもしれない。

——そんなリツコが髪を切った理由があると思いますが、

山口 「神殺し」、すごい船でしょ。「どうやって作ったの？」って。台本を読んだときは、「破」からどこへ向うのか、理解できず、悩みました。あと1作で、光が見えるところに行つてほしいですけど……。

——面白いですね。設定的には全部知っているようなところがあるリツコの内面がそうだというのは。だいたいみんなの知らないことを、突然話し始めるのに。

山口 知識はね……。頭はいいけれど……。でも、それってコンピュータみたいなものでしょ。人としてはね……。一所懸命、忠実に、真面目に生きてきただけなんですけどね。内面が弱いから……。だからこそ、知識で補っているのかもしれない。

——そんなリツコが髪を切った理由があると思いますが、

しょうか。

山口 最初の収録では、庵野さんが「リツコの声じゃなくなってきた」っておっしゃるたびに気になっちゃって、声のトーンを気にしながら芝居するのが難しかったんです。たまたま「録り直したい」というオファーが来たとき、ちょうど私も気になってたセリフだったので、リメイクさせていただいて、良かったです。

ただ、録り直しはいいんですけど、エヴァの世界に入り込むまでが大変で……。「ここだけちよつと録り直し」「はーい」なんて、気軽にできませんね。

——気持ちが高めたりする必要があるわけですね。

山口 大変です。今回、一人だけ先に出版が終わってしまったので、「お疲れさまでした！」ってみなさんの顔を見ても、現実に戻れなくなっちゃって……。感情のもつて行き場がなく、仕方がないから、スタジオのトイレの中でしばらく泣いてから帰りました(笑)。

——終える方にも、そんな苦労が……。

山口 だって、そのまま電車になんて乗れません。すぐには現実に戻れなかったです。ミサトと演ってたこともあって、スタジオの中がひとつの世界になってましたから。

——やはり「エヴァの世界」は強烈ですね。もしメッセージ的なことがあれば、映画の驚きさめやらぬ読者へ。

山口 エヴァンゲリオンを愛してくださるみなさまへ。ご覧いただき、ありがとうございます。『エヴァ』は私のデビュー作です。生涯、自分の中から赤木リツコがいなくなることはないくらい、思い入れのある役です。リツコが、そしてエヴァンゲリオンがこれからどこへ向かうのか、みなさんといっしょに次回を待ちたいと思います。終演後、気持ちの行き場がなくなった方は、トイレで泣いてから帰ってください(笑)。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

るみなさまへ。ご覧いただき、ありがとうございます。『エヴァ』は私のデビュー作です。生涯、自分の中から赤木リツコがいなくなることはないくらい、思い入れのある役です。リツコが、そしてエヴァンゲリオンがこれからどこへ向かうのか、みなさんといっしょに次回を待ちたいと思います。終演後、気持ちの行き場がなくなった方は、トイレで泣いてから帰ってください(笑)。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

——(笑)。いやでも、それぐらいすごい作品だったことですよ。

山口 「破」はもっと優しい映画だと思いますが、『Q』はね……。でもその分、やりがいがありました。エヴァンゲリオンとの出会いがなかったら私は声優をやってないと思うので、この出会いに、本当に感謝しております。

立木文彦

(碓ゲンドウ役)

空気のように流れていく……。しゃべり方なり演技方なり、気持ちのもつていき方なり……ですね。感情の起伏みたいなものには無縁です。

——立木さんは碓ゲンドウを長年演じてこられて、どういう人物だと思われていますか。

立木 ゲンドウという役は僕もつかみどころがなくて、いまだに分からないことが多いんです。それは内容的な「謎」の部分ではなく、ゲンドウのやろうとしていることですね。もちろんボンヤリとは分かるんですけど、そういうところまで行って何を、そのとき彼が一番満足だと思ふことは何なのか……。演じるにあたっては、それを探す旅をずっとしている感じです。特にこの人は寡黙でセリフも割とシンプルですから、むしろ他の方のセリフからヒントが得られたり、納得したりすることも多いんです。

——今回、台本を読まれたときには、どんな感想を抱かれましたか。

立木 僕の中で「破」までは、過去にやってきたことを、なぞっていくというステージだったんです。だけど「Q」に関しては、まさに「Q? (ハテナ)」って印象で(笑)、お客さんに近いと思うんです。

ただ、台本を読んだときの印象は「はあ、こうなったか」というもので、違和感はないですね。自分自身がエヴァの世界にとって重要なキャラクターとして、どっぷりつかっていることもあって、妙な納得の仕方をしてしまうんですよ。

まず今回に関しては、カヲルくんのセリフを読んで、「この少年いいなあ、いい大人になるんじゃないかなあ」って思いました。シンジはシンジで、自分自身が碓ゲンドウになって接しているから、ホントに子どもという気分であこがれるとかいうことはないんですが。シンジに対しては、「がんばれ!」っていう親の気持ちで、「破」のころからちよつとずつ芽生えましてね。

それでいて自分自身がゲンドウ役を演じる時に葛藤があるとかいうことはなくて、むしろ実は非常に心地よいんですよ。変な言い方ですが、役を演じていてここまで心地よいのはなかなかないなと思っています。今まで演じたキャラクターの中でもベスト3には入るし、無理がないという点ではナンバーワンかもしれませんね。

大きな山をずっと登り続けている気分

——その心地よさについて、もう少しうかがえますか?

立木 物語の主幹、「幹」になる部分を携えているからです。いろんな謎を隠し

持っていて、含みをもったセリフを言うのって、人にとってこんなに気持ちいいものなのかなと(笑)。

——今回も核心に一番近い感じがしています。でも、肝心なことは言わない。

立木 そうなんです。ただゲンドウについて自分自身の中では「演じる」という感覚は比較的少ないかもしれません。空気のように流れていく……。しゃべり方なり演技方なり、気持ちのもつていき方なり……ですね。感情の起伏みたいなものには無縁です。語り部的な部分も、ちよつとあつたりしますね。正直、最初のTVのころは初めて出逢った作品で、しかも難解だったので、キャラクター作りに悩んだりしました。決して気持ちのいいものではなかったんですね。それがここまで大逆転するのって、何なんだろうなって、それはいまだに分からないですね。

——TVの時期は緊張感があつたという話は聞いています。

立木 それはスタジオの雰囲気的なことでもありますし、当時の庵野さんとキャスト陣との駆け引きみたいなものですね。中には質問する方もいましたが、僕はそんなに多くは語らない方なので、「どうやってキャラクターをつかめばいいんだ?」とか「このセリフはどう言ったらいいんだ?」とか考えるにあたり、常に「フーリン」っていう気持ちを持って、スカッとしないうままでした。

——物語がどこへ向かうかも分かりづら



かったでしょうし。

立木 ですね。あれはあの時代でしかできなかつたことだと思います。自分自身もだいぶ若かつたし、もう一度TVでやったとしても、当時の良さは出せないですね。ですから今度の『新劇場版』のような大きなスケールでやるのが、自分の中でもマツチしているんです。自然と自分の経験を重ねていつてる部分はあると思いますし、そういう部分が『エヴァ』をやる上において、非常にリンクしてきているんです。

——今回、『Q』物語内でも実時間に近い14年が経過していますし、今のお話のように熟成が出ているのでしょうか。

立木 それはありますね。しかも『Q』に関しては、これで終わらないわけです。常にいつも大きな山を登っている気分なんです（笑）。答えはきつとその偉大な山を登りきって、山頂に到達したときに見えてくるんじゃないかと。まだ通過点にすぎないって思います。自分自身が歳を重ねたことはあるとはいえ、まだまだ未完成って想いもありますね。

実年齢に近づいてやりやすいというのは、『序』をやるときに一番感じましたし、『破』のときには一種……親としての喜びすら感じましたから。それは今までエヴァで一度も感じたことがなかった気持ちですよ（笑）。

——お客さんも意外だったようです。立木 きつとそうでしょうね。僕はアニメで画を制作したり音をつくったりする

人間ではなく、一人のキャラクターを演じてますが、ゲンドウの場合は声優の仕事とかという感覚がなく、本当に俳優として演じている感じです。やっぱり人物に魂をそのまま吹きこんでいるというかね。それだけに「ゲンドウの終焉っていつなのかなあ……」とか、むしろ今はそんなことをよく考えますね。

ゲンドウは音階を外さないことが重要なキャラクター

——完全新作となりましたが、どんなことを感じられましたか。

立木 とにかく、『Q』は、真剣に観ていただきたいなと思ってます。台本と言うとAパート、あれを観た時点でお客さんは「これって何？ 何？」って感じになるでしょうし、あつという間に映画館で時間が過ぎると思うんですね。

——今回取材を進めさせていただいて、キャストの受け止められていることと、作中人物の考えていることが密接にシンクロしている印象があります。

立木 エヴァに関しては、他のキャストの方々と一堂に会することって、そんなにないんです。それだけに、それぞれの作品に対する想いや考えていることは、おそらくは違つてるんですね。逆にそれが面白いんだと思ってますね。

——今回、14年の間に何があつたのかとか、庵野さんとは話されましたか？ 少なくともメガネは変わりましたが。

立木 いや、特に何にも話してないです（笑）。スタジオで台本を見てセリフを言おうとすると、「これは余計なことは考えない方がいいな」っていう風になるんです。肅々とまるで何かの儀式のように、自分の中では淡々とやつてるんです。そういう進め方です。なので、メガネのようないや、ここが変わつた」とか気にしてません。もし人間性が変わっていたりすれば、それは庵野さんの方からちゃんとおっしゃつてくれると思うので。

——やはり庵野さんとキャストのそうした呼吸が素晴らしいですね。

立木 とにかくゲンドウの場合、微妙な……音楽で言えば音階のズレみたいなものが大事なんです。自分でもセリフをしゃべつてズレを感じると、「もう一回やり直したいな」って思うし、そうしたときに庵野さんの方から「もう一回お願いします」みたいなおっしゃるリズムは、お互いピッタリ合つていて思ってます。だから、ものすごくやりやすいですね。厳しい方だとは思いますが、ゲンドウをやる上での庵野さんとのコンビネーションは個人的には非常に良好だと思います。ゲンドウはちょっとでも音を外すとダメなキャラクター。そこを一番注意していますね。

そういう意味では、やっぱりシンジが大変だなあ……。ホントに心の葛藤とかいろんな悩みを、ゴチャゴチャとこつた煮にした気持ちとか、胸をしめつけられ



る思いとか、いろんな感情を出さなければならぬじゃないですか。シンジの場合はそのがね……。

——シンジを思いやる発言が、親子っぽくて良い感じです。

立木 やっぱりまずそれと思うんですよ。理由のひとつは、シンジといっしょにいる現場が少ない、なかなか絡まないからなんです。今回もスタジオで一回しか会ってませんし、おそらくシンジはスタジオの中、たった一人で「すみません、もう一回お願いします」ってなることが多いと思うんでね。うん……。かなりいい意味で苦しみながらやってるんだらうと思うんですよ。

核心にいるゲンドウに感じる人としての部分

——他にゲンドウで留意されていることはありますか？

立木 『エヴァ』をやるときはアフレコのスケジュールが前もって分かっているの、そこに自分の声の調整も、ある程度しているんです。前に仕事が入っていたとしたら、その仕事はあまりムダに叫ばないようとか、そういうことは心がけてますね。常にベストコンディションをめざす。『新劇場版』が始まってからのコンディションはいいです。うまいこと風邪などにもあたっていないですし。

——今回のアフレコ中、何か印象的なできごとがあればお願いします。

立木 たとえラフだとしても、画が非常にいいのに、きれいに描かれていますよね。色がついてなくても、映像的にデザインでハツとするんです。まったくの線画じゃなく、できあがりが見定されているものだからね。それは、まさにエヴァンゲリオンならではの感じだと思います。非常に特別なものだと思う、いつも感心しています。

それと『Q』に関しては、ひとつのファン目線として、ホントにいろんな新キャラたちがいっぱい出てくるので、あの辺の人たちが楽しみなんです。最初にスクリーンで観たとき、どう仕上がりしているのかなって思いますね。

——『Q』のラストは「つづく」となっていました。何か今後に期待することなどはあれば。

立木 さまざまな変化のある『Q』ですが、特にゲンドウ自身は『破』と『Q』でそれほど変わらなかったんですよ。もしかしたら次に、本当の驚きが来るのかもしれないですね。それは自分自身も、大きな期待をもってるんですよ。もしかしたら、何もかもしれませんが（笑）、何かあつてほしいなって思うんです。

ゲンドウでいつも不思議なのは、最重要人物のほずんだけれど、ほとんど動かないことですね。周りがね、実働部隊と言つと違うかもしれませんが、こう一所懸命動いている。ワサワサしているの、いつも他の方たちじゃないですか。子どもたちも含めてね。その対比が、

この作品においてはとっても魅力的だなんて思うんですね。

——その動きはゲンドウの思惑で、表面的には悲惨なことも起きますが、ゲンドウって割とヒューマンな動機があるんじゃないかって、句をせすね。

立木 まさにおっしゃるとおりですよ。ただ単にクールとか非人道的だとか、そういうんじゃないんです。なんかホントに人としての力の部分をね、ものすごく感じます。それは『新劇場版』を始めてから、特に強く感じるようになった一番のことですね。

だからこそ、余計にね……。もしゲンドウに終焉があるとしたら、どんな風になつていくんだろうな……。きつとその時点でゲンドウに対しての自分の本当の情が、入りこんでいくのかもしれない。今はまだひとつ大きなプロジェクトにすぎない。それを完遂するために動いているし、自分もそのためにセリフを語っている。そんな感じですね。

——最後に今回の『Q』を終えて、全体に対するご感想をいただきたいです。

立木 『Q』に関しては、これまでとはまったく違うエヴァンゲリオンで、一歩どころではなく、何歩も進んでしまったなという印象をもちました。かなり先に行ってしまった。僕の印象的なシーンで言うと、シンジとカヲルのやりとりの仕上がり、やはり楽しみで仕方ないです。音楽なども含め、こういう風に見せてくれるのかなと。そこでもいい感じで



シンジが癒やされて、そして怒濤の展開へ、『Q』の物語のクライマックスへ向かうと思うんですね。そのくだりを、ぜひ楽しんでほしいって思いますね。

——どこか父親としての目線が、やっぱり入ってる気がします。

立木 『破』のときは食事のくだりとかでシンジとコンタクトがありました。今回はコンタクトはあっても、違う立場から指示しただけです。そのときのゲンドウのシンジに対する想いというのは出ていないですけど、裏読みするということか、感じ取ってもらえたらいいかなって思いますね。そう考えると、やっぱり『Q』はすべてが新しいですね、うん。

それでこれは僕が言うことじゃないかもしれませんが、エヴァに関しては、たとえお客さんに悪い方に受け止められたとしても、それはそれでいいと思うんです。むしろ原点に還るならば、「そこそがエヴァだ」って思いますよ。新しいシリーズです。僕自身は作品がどう受け止められても、いいかなって思っていますね。

——世の中が波風たてることを避けよう避けようとしてるから、その逆を行ってやる気もします。

立木 ええ。ファンをいい意味で裏切ってこそ、エンターテインメントだと思います。一筋縄ではないところも、エヴァンゲリオンの魅力ですから。キャラクターとか人物それぞれは、基本的には

変わらないですけど、胸の動き方が変わるし、舞台も変わっていくし……。

『エヴァンゲリオン』って、非常に大人っぽい部分と、アニメーションならではの子ども、ティーンの感情を揺さぶり、くすぐるところを常に持ち合わせているような気がしています。もちろん主役が少年だからってこともあるんですが、それだけじゃないですね。非常に大人っぽいスタイリッシュな部分を見せつつ、なんだかい意味で幼稚なところもあったりして。それがおそらくは、多くの人に共感をもってもらえる魅力になっているんじゃないかと思っていますね。

やっぱりアニメという感じでは、くれないんですよ。「エヴァンゲリオンはエヴァンゲリオンなんだ」っていう、それがひとつのジャンルなんじゃないかって、ものすごく思いますね。

そんなすごい作品に、物語の根幹となる役で関わらせてもらったことは、ある種の運命だとも思っています。10何年かゲンドウといっしょにやってきて、今後この役をふまえて、自分自身がどうするかってことを真剣に考えなければいけないのになって、今は思いますね。

たちき・ふみこ 長崎県出身。大沢事務所所属。代表作は『ティルズ オブ シンフォニア』(EVA ANIMATION) (クラリス・アウリオン役)、『銀魂』(長谷川塞二役など)。ナレーション等、多方面で活躍中。

清川 元夢 (冬月コウゾウ役)

——『Q』の台本をご覧になったの率直な第一印象をお願いします。

清川 TVシリーズとは違った展開に、また新たな気持ちで楽しめました。

——14年が経過した冬月に関しては、どんなことを感じられながら演じましたか？
清川 前作より14年後ですが、冬月に関しては経過を感じさせない雰囲気がありましたので、以前の心持ちのまま演技させていただきました。

ただシナリオは違うので、冬月の新たな一面を見られて、私自身嬉しく思いました。

——演技される上で、もし留意されたことがあればお願いします。

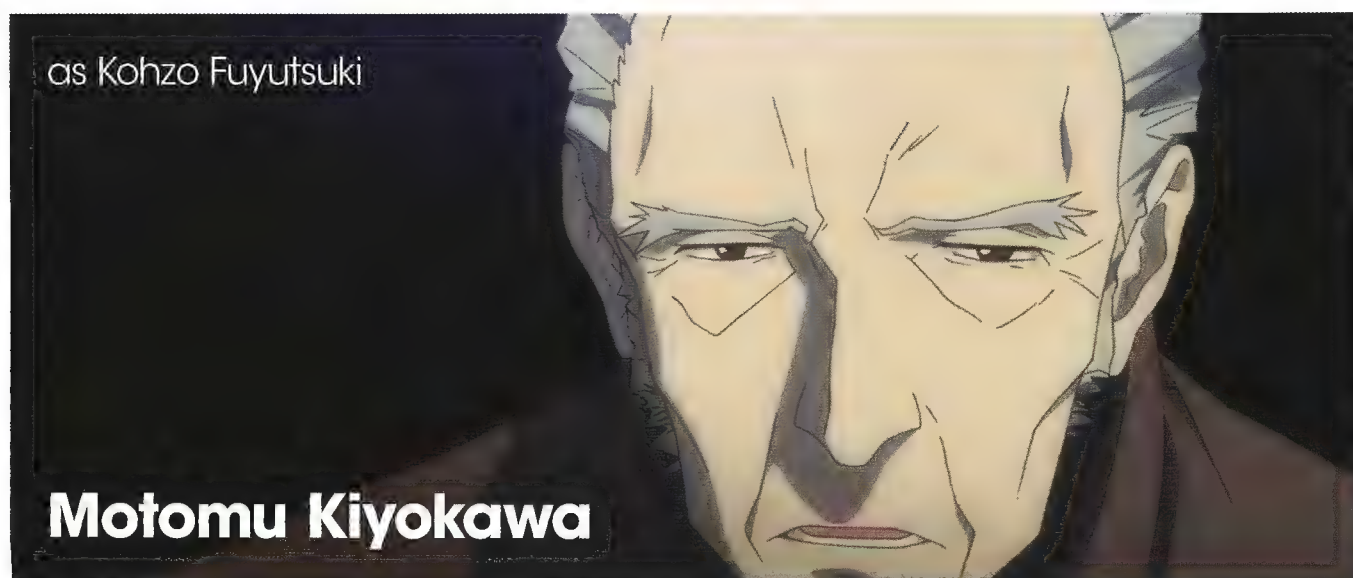
清川 長く任せて頂いているキャラクターなので、「変わらない」よう、私自身納得できるまで収録させて頂きました。

——『Q』という作品について、何か感じられたことがありますか？

清川 次回作がどうなるのか、私も楽しみにしておりますが、今はこの渾身の『Q』を何度も楽しんだけいただければ幸いです。

(メール取材を再構成)

きよかわ・もとむ 神奈川県出身。東京俳優生活協同組合所属。代表作は『機動戦士ガンダム』(テム・レイ役)、『ふしぎの海のナディア』(ガール役)、『イヴの時間』(シメイ役)など。



沢城みゆき

(鈴原サクラ役)

「今度、仲間入りしましたサクラです、末永くよろしく願います」みたいな気分なんです。

——『Q』の新キャラの中でも、サクラは話題になると思います。まず、ご参加のきっかけあたりから願います。

沢城 鶴巻監督とは数年前の『トップをねらえ2!』で初めてごいっしょさせていただきました。平松(禎史)さんも演出されていた作品ですけど、そのときの印象で私の名前があがったらしい、と聞いています。

——新キャラとはいえ、サクラはすでに『破』にも出てますよね。画だけですが、沢城 そうなんです。DVDで観ました。

——以前から「鈴原トウジには妹がいる」という設定だけで姿は出なかったんですが、「ついに登場!」というファンの熱い反応がありました。さらに沢城さんの声が入って、また盛り上がると思います。沢城 これまで私にとって『エヴァンゲリオン』は、作品より「社会現象」としての印象が強かったです。学校の卒業アルバムの「今年の社会現象」という欄にオリンピックといっしょに『エヴァ』のポスターが掲載されていて、「学校で配るものに、アニメの絵が入っていいんだ」

という驚きがありました。今回参加するにあたり、恐縮なのですが『新劇場版』の『序』と『破』で初めてちゃんと拝見しまして、今までは綾波レイと碇シンジ、子どもたちの話だと思っていたのですが、ミサトさんという女性が芯になって回っている話なんだということを今さらながらに知り、「なんて素敵な女のなんだらう」って思っただけです。

それと林原さんの歌う「翼をください」が衝撃的で、ちょっとテレビから離れてしまいました。これは近くで聴いたら危険だ、劇場で観なくてよかった……と。

——それはオーラみたいなものを感じられたということですか？

沢城 本能的にコワイ、アブナイって感じるみたい……好きとか嫌いとか、いいとか悪いとかではなく、「わっ!」と反射的に退くような、そういう衝撃がありました。

——ミサトにあこがれを感じたということですが、実際の収録はどうでしたか。

沢城 『エヴァ』だから、大作だからというのを気負わずにいた方がいいんだなと思いました。なぜかと言えば、サクラという子は、若さとかニュージエネレーションというところが彼女のアイデンティティだから、気張っては逆効果だなども聞いているんですけど、あえてそれのまれないように、全力でのんびりしていようとしていました。

ミサトさんは、とても尊敬する、憧れ

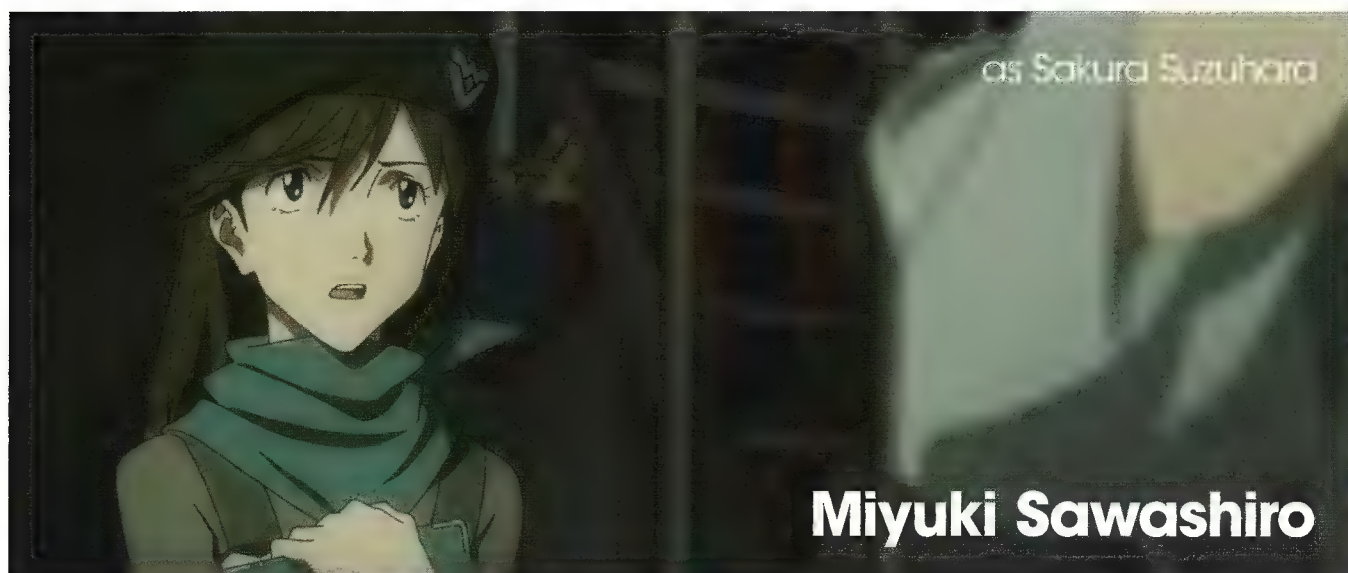
の上司になりました。庵野さんからもミサトにはリスペクトがあつていいというお話があつたように思います。なだけに、シンジのことはとても嫌いになりました(笑)。こんなにがんばっている人がいるのに、なんでこの人は自分のことばかり言うのって、収録が進むうちに、そんな気持ちがどんどんつのつていきました(笑)。

——サクラの役として気持ちが入っていい感じですね。

沢城 私の感じた『エヴァ』って、決してものごくアーティスティックなものではなく、ごく普通の職場にあるような日常的感情の交流が多かったな、という印象なんです。サクラを通してだからそうだったんでしょうけど、収録前に想像していた、やりきった! 感みたいものはなかったんです。

——目覚めたシンジと主に会話する相手ですが、設定や役づくりについて、庵野総監督とはどんな話をされたのでしょうか。

沢城 実は最初、庵野さんに「このキャラはどんな感じでしょうか?」って聞きに行っただけです。すると「うーん。可愛く」と、ひとことだけ言われまして(笑)。仕事に関してすごくプライドを持っている子なのか、シンジに対してどこか憎しみを抱いているのか、もう少し聞こうとしたら、「僕の中にはこれ以上の情報がないから、意味ないと思いますよ」なんて言われて、「なるほど……。やつて



みます」みたいに始まって(笑)。

とは言いつつ、テイクは重なっていくんです。最初のシーンが一番手間取りました。可愛くやってみたら、「もう少し仕事はできる感じで」となり、きちっと働いてみたら「年齢が上がり過ぎた」となり、優しくしてみると「あくまでも淡々と働いて」……と全然的に当てられなくて。結局、仕事中は割とブレーンに、みたいなところに私の解釈では落ち着いたんですが、シンジくんが「首につけたこれ、外してくださいよ」みたいなことを言ったときに、「絶対に外しませんよ、それ」って返すシーンだけは別でした。あそこはいろいろなパターンで何度か録って、中には可愛いとかブレーンじゃない、憎しみいっぱいと言ったテイクもあったんです。私としては恨んだり恨まなかったり、投げられるだけ投げたので、どういう組み合わせでサクラになっているのか、まだ完成していない現段階では分かっているんです。

——かなり手探りだった感じですか。

沢城 あー、どちらかと言えば、何度もプールに「バーン！」と飛び込んだ感じですよ(笑)。足から丁寧に入ったりはなし。私は観念して現場に入ったので、手探りみたいな繊細な作業はしませんでした。「このフォームって私やったことないんですが、これでいいでしょうか？ バーン！」みたいな(笑)。ここまで観念して飛び込んだのって初めてかもしれません。

白いキャンバスに共同で 絵を描いていくような収録

——そんな収録を終えて、どんな感想を抱かれましたか？

沢城 いろんな録り方をされる監督がいらっしゃる中で、私の中の庵野監督の印象は……監督の前に大きな白いキャンバスがあって、役者はその中に絵の具を投げ入れていく作業をしている感じでした。ただそのキャンバスは庵野さんにしか見えないキャンバスで(笑) 大きさも、あるのかさえも私にはわからない。どんな絵にするのかも教えてもらえない。だから、どう投げているかは分からないんだけど、なんとなく庵野さんの示すイメージの中に飛び込んでみるという感じ。枠の中に入っていればOKが出るけど、ど真ん中に入ったかどうかまでは分からないんです。端っこに入っても、「それはそれで面白いね、OK！」なんていうことがある。すごく新鮮な作業でした。

たとえば憎むにしても「もっとこういう感じで憎んでくれ」と、精神的なもので演出される方や、あるいは音に注文があって、「もっと可愛く語尾をあげて」と言われれば、単純にそうする。それはそれでまたある種のもののづくりの方法なんです。でも、今回のように合ってるかどうかは分からないまま、「じゃあ、もう一回」っていう方法は、抽象的な絵を共同でつくっていくような感じがしました。——なるほど。それでキャンバスという

たとえ話なんですね。

沢城 ですから、庵野監督は決してこっちを向いてくれないんです。ずっと正面にあるキャンバスだけ見えていて、そこに投げ入れられるものだけ気にしている。あくまでも作品の方を向いていて、私を見ている演出ではないんですね。でもだからと言って、それが辛いとか悲しいとかじゃなく、すごく集中できて……。感覚的で申し訳ないんですが……。

——他の役者さんからうかがった話とも符合するので、非常によく分かるし、興味深いお話です。

沢城 ただ、庵野さんは緒方さんに対しては、彼女本人に向いている感じがしました。本当に対等に作品づくりに参加されている姿が、印象に残っています。

——とはいえ、収録を見学させていたただいたときには、沢城さんからテイクごともものすごくいろんな演技パターンが出てくるので、ブース側が「おっ！」となった感じもしました。これはすごいぞと。

沢城 そうなんですか(笑)。「テイクは重なるぞ」って話は、あらかじめ聞いていたんです。だとすると、抽象的なオーダーに対して、私の中では、はっきりと明確なものにして返さないと混乱するなと思ったんです。なので、最初から分からなくても「はっきりしたものを出すぞ」って決めてテイクを重ねてました。そうでなければ変えようもなくなり、「どう変えたらいいんだ？」って、自分自身で分からなくなるのがすごく怖くて。



——なるほど。「A、Aダッシュ、Aプラス」みたいなことではなく、「A、B、C、D」みたいな変え方ですね。

沢城 そうです。それぐらいはつきり変えていく。ただ、向こうから伝わってくるニュアンスとしては、「そんなに変えなくとも良かったかな」っていうことも多くて(笑)。つまり「ダッシュつけるぐらいの変化で良かったのにな。Cにしちゃったのか。じゃあ、もう一回」ということですよね。作戦は失敗に終わったわけです(笑)。

——いえいえ。「選びたい放題」みたいな反応もありましたから、素晴らしいかったです。あとお聞きしたかったのは、トウジの妹ですから、大阪弁をどう考えられて役をつくられたかなんです。

沢城 一応、大阪弁も普通のもに対応できるように用意していました。役が決まった直後に、お兄ちゃん(鈴原トウジ役)の関智一さんに電話して、「どうやってました?」って聞いてみたんです。そして「あれはね、大阪弁じゃなくてオレ弁」みたいな返事でした。つまり「これは大阪の人に読んでもらってやってるわけじゃなくて、オレの大阪弁をしゃべっている」って意味ですね。こっちは「ですよー」って(笑)。とはいえ、「もうちょっと大阪弁がいいな」って言われるかもしれないので、太刀打ちできるよう一応準備していったんです。

案の定「全然要らない」って言われたものの、ちょっとだけ子音が有声音になっ

て、ちょっとだけ関西の人かな? というのが匂ったらしいのになって自分では思ってたんです。そんな気持ちが残っていたことと、練習しすぎたせいで、なかなか訛りが抜けなくて録り直しになったり。

——台本を読んだときは大阪弁イメージだったわけですね。基本は標準語で?

沢城 ええ。でも、「トウジの妹?」って聞かれて「そうですねー、妹のサクラですうー」みたいなところとか、何力所かピンポイントで大阪弁っぽいニュアンスが乗ってれば、あとは普通でいいです。——部分的に大阪弁ってだけでも、兄妹というつながりが出ましたね。

沢城 トウジくんって見ると、ものすごく「いいヤツ」だと思えたんです。こういう人がお兄さんとしていいしょに育った家庭だったら、根深く恨みつらみっていうのはないんじゃないかって。そうではなく、ダメなものはダメだったし、しっかり言える子にしたいなど。カゲとかはなし。シャープかフラットかで言えばシャープだし、月か太陽で言えば太陽だし。トウジくんの快活な感じ、いいヤツな感じが、どこかに匂ったらいなくて。それは音として以上に、人柄として匂うといいなって思ってたんです。

——面白いですね。そのトウジの「いいヤツ」という印象も、妹の事故が発端ですから。サクラのケガを通じてシンジを殴って、次に謝るということで印象づけられているわけですから、ぐるっと回

てる感じがします。

沢城 シンジくんがEVAに乗って行ってしまっシーンで「ええ加減にしてくださいよ!」みたいに言うところも、恨みつらみではなく、しっかり怒るという感じ。それは混じりけなく演りたいと思ってました。

——それがサクラの性格づけでしょうか。

沢城 いえ、むしろ私の中の簡単なルールという感じですね(笑)。

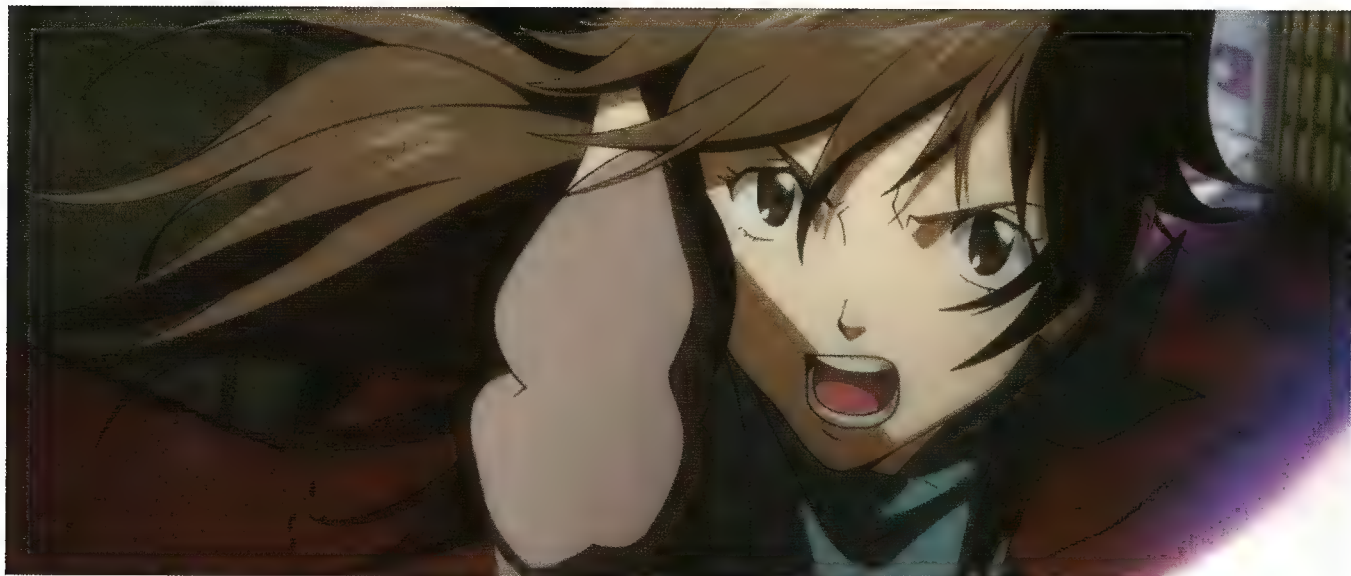
一般人とエヴァの世界をつなぐ役割

——新キャラの中でもセリフが多いですし、感情が伝わりやすい感じですね。

沢城 そうですね。とにかく難しいことはあまりしやないんだなど。私個人としては、難しいこと、混みいったことをする場合に呼ばれることが昨今多かったものですから、サクラはものすごく不得手だなという印象が、自分の中にまずありました。そこを戦うので、いっぱいいっぱいで。

「難しい」と言ったのは、実は……みたいな仕掛けのあったりする役や、すごい使命を抱えた役。その方が気質として呼ばれることが多かったものだから、こういう……ここまで何にもウラがない役は、初めてかもしれません。

——サクラの外見的印象はどうでしょう? 人気キャラになると思いますが。沢城 そうなるといいですね。いまキャ



ラデザを比較してたんですが、こうして見てるとシナリオ的なことも含め、やっぱり若さ担当なんだと、あらためて思いますね。ホントに私だけ一般人に見えますね(笑)。やっぱり普通の人なんだなあって。ある意味、浮いてますね(笑)。

——現場の雰囲気は、どんな感じでしたか？ 何か印象的なことがあれば。

沢城 思っていたより、先輩たちの中にも情報が少ないままアフレコに臨んでいるんだということが現場に行って初めて分かりました。私は三石さん、山口さん、緒方さんといっしょでできました。

印象的と言えば、やはり緒方さんでしょうか。これだけ長いにも関わらず、精神的なスタミナが変わらない気がするんです。「破」でこうだったからには、このシーンではこうなるのではないか」

みたいに、はるかな時を超えて役に対する一貫性をもたせようとしている姿をみました。今回一回かぎりの演者の生理としての違和感みたいなことではなく、ものすごく理詰めで、冷静に全体を見ていった上でそういう提案ができるのって、ものすごいことだと思います。

……あとは庵野さんが山口さんを「りっちゃん、そこさ」って呼ぶときの響きが、すごくいいなって(笑)。それぞれ役者さんとの距離感やコミュニケーションのとおり方がまったく違って、ずっ「ああ、一人ひとり違うスタイルで、ずっと作品をやってこれたんだな」と感じました。

——さて、まだ『Q』の続きがあるわけですが、期待はどうでしょうか。

沢城 私はまずは、『Q』の完成品に期待ですね(笑)。どう仕上がっているのか、自分の出たパート以外、台本もいたいたいなくて、全体のことをよく知らないんです。……きつと実写の役者さんってこんな気分なのかなとも思います。私たちって、普段はフィルムができていくところにアテていくので、全体像は把握できてるんです。だいたいどんな話になるか理解して、そこから差し引きして録り始める。けれど今回は、終わりがどうなるかも分からないし、とりあえずそのシーンに向かって球を投げていくという、普段やらない作業。私は顔出しをやった経験はないんですけど、きつとこんな気持ちなのかなと。

——庵野さんはライブ感にこだわってますから、生々しさが欲しいのかも。

沢城 役が100%あればライブ感になりますけど、80%が沢城さんで残りが役だとすれば、そのライブって……という想いはありましたね。特に今回、私が役に合うから呼ばれたというよりは、本来の私のかたちを変えて演じる役だったのでも、緊張は特に強かったです。でも、始まって観念してからは、ちよつとポーズとするようにしました。だからリッコさんに名前を呼ばれて返事するシーンも、マイク前で思いきってポーズとしてみようと、ギリギリまで「今日は何を食べようかな」って考えてたので、「う

わわ、はい！」って答えたのが、ものすごく楽しくて。あ、これは楽しいぞって(笑)。

『エヴァ』で言うライブ感をもっとハイレベルなものなんだと思うんですが、サクラとしてのライブ感を突き詰めていくと、「ポーズとすること」なんだなって(笑)。それも含めてどう仕上がっているのか、本当に楽しみです。

——やはり、一般人とエヴァの世界観をつなぐキャラなんだって思えてきました。沢城 今回、新しく出てこられた方たちって、難しいオペレーションのセリフが多かったけど、私だけはどちらかと言えば、個人の中から出てくるセリフばかりでしたから。今後毎日常会話のシーンなんかで、また出られたらいいなって思ってますね。きつと私服もかわいいでしょうし。

——すでに一目惚的にファンになった方もいらつしやると思うので、最後になにかメッセージがあれば、お願いします。

沢城 本当に気に入っていただけたら何よりです。今はそうとしか言えませんが、逆に私からすると、「今度、新しく仲間入りしましたサクラです、末永くよろしくお願いします」みたいな気分なんです。最初から見てきたり、すつごく好きだったりするファンの方たちが、『エヴァ』を大事に大事にしてきて、ファンもクリエイターもみんな『エヴァ』を楽しんできたところに、ホントにここ1年ぐらいで触れた私が、浅はかなことは言えない

です。いっしょに楽しめる仲間になれたこと、嬉しく思います！

でもこの機会がなければ、こんなにきちんと作品に触れるということもなかったと思うので、仲間入りできたことは、ホントに良かったなと思っています。これから先、みなさんといっしょにエヴァを楽しめる一人になったことを、何より嬉しく思っていて、ファンの一人として「続きが楽しみだね！」みたいな気分なんです。

さわしろ・みゆき 東京都出身。マウスプロモーション所属。代表作は『ローゼンメイデン』『真紅役』『化物語(神原駿河)』『UPIN the Third(峰不二子)』という女(峰不二子役など)。

大塚明夫

(高雄コウジ役)

庵野さんがね、「久しぶりに会いたくなつたから大塚を呼ぼう」って思ってくれた。それが嬉しいんですよ。「なんだってやるよ！」ってそんなノリで。

——『ふしぎの海のナディア』でネモ船長を演じられてますから、庵野監督とのおつきあいは長いですね。

大塚 確かに長いけど、作品をやるのは20年ぶりぐらいですね。『ナディア』のときは庵野さんもTVシリーズ初監督だったし、若くてはつらつとして元気のカタマリみたいで。ところが10年くらい前かな、NHKのTV番組で会ったときは疲れていたのか人が変わったようで、その間に何があったのか興味深かったね。

——久しぶりの庵野さんとごいっしょされて、いかがでしたか？

大塚 作品をつくる現場ってこともあると思うけど、すごく元気そうだね。もちろん若いときの感じとは、また違うんですけど。

——高雄は加持と知り合いという設定です。大塚明夫さんは加持役の山寺宏一さんと、バトーとトグサ(『攻殻機動隊』など共演の多い印象があります。現実と不思議な符号があるなど……。

大塚 山ちゃんとは昔はよくいっしょに

なりましたね。最近は少ないけど、『ヤマト』はいっしょだし(宇宙戦艦ヤマト219)ドメル役が大塚氏、デスラー役が山寺氏。ともにやってきた同時代人って想いはあるかもしれませんね。ただ、高雄にそれだけのディテールがあるかどうか、あまり聞いてないし、詳しいことは知らないですよ。見た目からすれば現場のたたき上げかな、ぐらいで。これ学校を出た優秀な士官候補生ってなら、また面白いんですが(笑)。

——収録はどんな感じでしたか。

大塚 庵野さんと前にやったのはTVシリーズだけど、今回は映画だし、シーンごとに録っていくから、ものすごく細かく録り直して。ただ、「昔、1年間いっしょにやってたんだぜ！」って意識があるから、細かいことよりもね、僕としては「やろうぜ！」っていう想いが強くて。庵野さんの側にも、もしそういうところがあれば、共振してると思うんですけど。

——今回、『エヴァ』で初めて戦艦が出てくるんで、それで『ナディア』でネモ船長役だった大塚さんを……。

大塚 思い出したんですね。僕から庵野さんには、最初に「この戦艦って動力は対消滅エンジンですかね？」って聞いてみたんです。そしたら、「そんな古いテクノロジーではありません」って即答でしたね(笑)。

——やっぱり響きあってますね(笑)。

自己主張よりも
要求どおりにやるのが重要な役

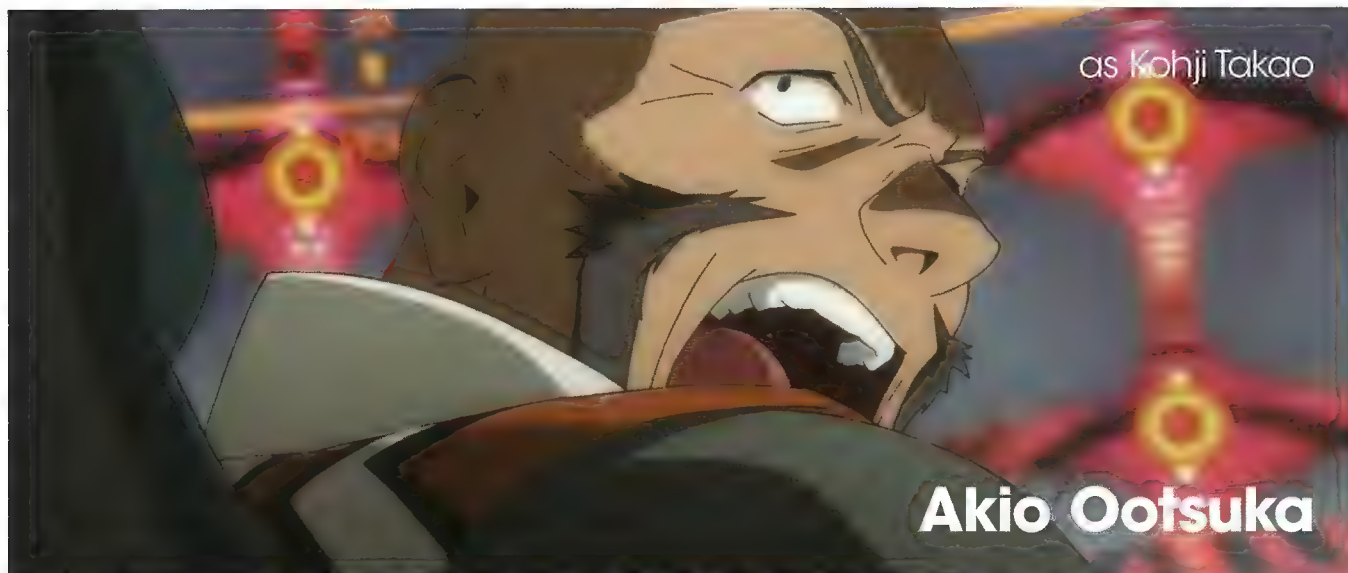
——新キャラの中でも大塚さんが重りとしてドッシリ押さえている感じでした。

大塚 でも、三石や林原もみんなベテランですから、別に僕が重りにならなくても大丈夫かなと(笑)。バンドで言えばベース奏者ってことでしょう。チームもこの場合、自分の役割が何なのか考えざるを得ませんから。ボーカルがいてリードギターがいて、ドラムスがいてと。

——ヤマトの徳川機関長が刷り込まれるせいか、アフレコ現場で「ヒゲも黒いし意外と若い」と言われたのが衝撃で。大塚 色がついてないから、僕も最初お爺さんだと思って演じたんですよ(笑)。こうした役の場合、自己主張をするよりは庵野さんが思ってたとおりに演っていくのがベストだと思ってますね。僕の考えることは限界がありますし、出しっぱっではいけない役ですしね。

——加持からミサトのことを聞いていたというセリフもあります。

大塚 「知り合いの加持」という相手が山ちゃんだと、「あいつが言ってたなあ……」って、心の中で結ぶ像の位置関係が取りやすいってことはありましたね。ホントにその辺だけで、仕事に関する号令のところは、いちいち人間味を出すところじゃないんで、むしろビジネスライクにテキパキとこなしていく。それでホッとしたときに「加持が言ってたなあ……」



みたいなところを「ボン」と出すと。

確かに、役者は台本に書いてない部分もつくっていくことが勝負だったりします。でも、こういう役の場合は台本にあることをきちんと伝える。まずそれが第一。そういう意味ではそんなに大変な役じゃなかったから、楽しく演らせていただきました。

——声質は、どうとらえましたか。

大塚 僕の場合、まずキャラ表を見てイメージをパツとつかんで、感じたままに演ってみるんです。あの雰囲気ですから野太い感じにしましたが、キャラをみれば音が勝手に出てくる。それに素直に従うんです。その方が違和感がないことが多い。だから、目の前に絵がないところで「誰々の声をやってください」と言われると困るんですよ。長いシリーズをやつてれば頭の中に像が浮かびますけどね。

10年、20年先を見据える 視線への期待

——ちなみに戦艦ヴァンダーが発進するシーンでは20年前の『ナディア』と同じN-1ノーチラス号のテーマがアレンジされて流れます。

大塚 そうなんですか。あのときは船長だったから、だいぶ格が下がりましたね（笑）。

——ちょうど『ナディア』はNHKでデジタルリマスター版を放送してますし。

大塚 恥ずかしくて観られないんですよ。当時は30歳そこそこなのに、無理して大きな娘のいる大人の役をやっているから、今聞くと背伸びしてるのが分かるんです。声自体はそれなりにできたとしても、心理的なものが甘い。だから、昔の作品を再放送するのはカンベンして欲しいんだよね（笑）。

——ファンは世界がつながった感じで嬉しいと思います。今回の収録で、印象深いことがあればお願いします。

大塚 ずいぶん気を遣ってくださったんですよ。「役があんまり格好よくないの」なんて話をしていただいて。そんなのは関係ないですよ。庵野さんがね、「久しぶりに会いたくなったから大塚を呼ぼう」と思ってくれた。それが嬉しいんですよ。「なんだってやるよ！」ってそんなノリで。元氣そうな庵野さんに会えたことが、今回一番印象深いですね。

——戦友みたいなお気持ちですか？

大塚 大きな意味ではそうなんですけど、ちょっと違いますね。TVシリーズ当時の庵野さんって、「こうしたい、あーしたい」というこだわりがすごく強かったはずなんです。でも音響作業のプロセス上はたして自分の思ったとおりになるか、葛藤がたくさんあったはずですよ。今回、その辺に関しても全部自分でやりたいって感じがよく伝わってきて、「いいですよ、何でも言うってください」と感じて引き受けました。

——そんな以心伝的な部分が、『Q』と

いう映画をシメていると思います。20年を経た庵野さんには、今後どんなことを期待されますか？

大塚 こういう時代ですから、アニメーションの世界でも二極化が激しくなってますよね。DVDが最低何枚売れるかという作り方をするミクロな世界と、お金をかけるだけかけて、もっと広い場所に発信しようというマクロな作品と。そういう大きな作品をやれる人が元気でいてくれないと、日本のアニメーションも弱くなるし、僕の出る幕もどんどんなくなりますからね。萌えアニメには、あまり呼びでないから（笑）。

僕ら役者って目先の仕事に振り回されがちですけど、庵野さんは10年、20年先を見てますね。そうした力のある、世の中を動かせる……「あんたがつくるなら、お金出すよ」と言われるような人たちが、どれだけがんばってくれるか。それはこれから日本のアニメーションの中で大切になる部分じゃないかな。身体に気をつけて、ぜひがんばり続けていただきたいなと思っています。

おおつかあきお 東京都出身、マウスプロモーション所属。代表作は『Fate/Zero』（ライダー役）、『攻殻機動隊シリーズ』（ハート役）、『ふしぎの海のナディア』（ネモ役）、など。



大原さやか (長良スミレ役)

ささいなことでは動揺せず、思ったことは表情に出ても口には出さず、冷静に考えて言葉を選ぶ。そんなイメージでしょうか。

——まず、『Q』への参加のきっかけからお願いします。

大原 実は私は『序』と『破』ですでに参加しているんです。膨大な量のアナウンスを、長時間かけて収録していたんですね。オーディションを受けて今回、名前がついたキャラになったときは、気持ち的に「やったあ、出世した！」って感じがありましたね(笑)。逆にセリフはグツと減りましたが、とにかく嬉しかったです！

——その待望の長良スミレというキャラクターの役づくりは？

大原 印象はキャラシートを手がかりにしています。他の新キャラもいっしょに見せていただき、その中で「スミレらしさ」が際だつようにと。年齢設定は20代半ばから30代、姉御肌でミサトさんに次いで船を引っ張っていくぐらいの貴族で演じてみようとのぞみました。ただセリフ的にはオペレーション関係しかないの、素の彼女がどういうテンションでどんな言葉づかいをしているのか、つか

めないまま終わった感じもあります。

——前作から14年間が経過していますが、その点はどう解釈されてますか。

大原 彼女なりにいろんなことを乗り越えてきたんだろうと。大事な人も亡くしただろうし……。シンジくんにも初めて見る表情も、あえてセリフはなかったんですが、それが彼女らしいなど。ミサトさんが将来的には後継者となる器に育ってほしいと期待している。そんな自分なりの解釈で演じたので、テンションはミサトさんに近いと思います。ささいなことでは動揺せず、思ったことは表情に出ても口には出さず、冷静に考えて言葉を選ぶ。そんなイメージでしょうか。

——録音現場の雰囲気はどうでしょう？

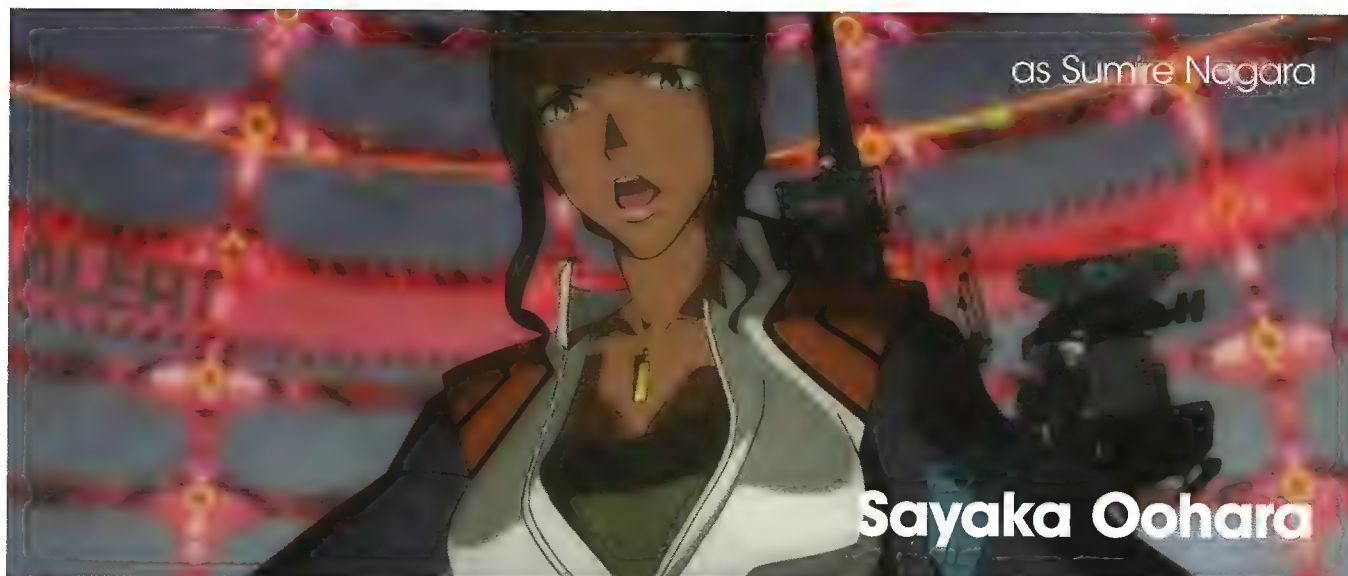
大原 セリフを繰り返して録り直すんですが、理由は説明されないんです。最初はどうしても不安になりました。でも、ちよつとしたバターン違い、力のこめ方の違いを録って選ぶためなんです。私も毎回100%同じものを出せるわけではないですし、その中から、微妙なニュアンスを選ぼうとしている気持ち伝わってきて、深く考えすぎないよう全力投球で演じることにしました。おかげで録音が終わったら声帯がカスカスになりました。その疲労感に「さすが劇場版……」だなと。

——レギュラー陣といっしょの収録を終えてみて、どうでしたか？

大原 私は普段「お姉さんキャラ」をやらせていただく機会が多いのですが、ま

だ新人の頃に「ミサトさんみたいなイメージで」なんてオーダーされること何度々あって(笑)。三石さんみたいにカッコイイ女性を演じられるようになったいと目標のひとつでもあったので、まさか自分がエヴァの世界でミサトさんの下で働けるなんて、夢みたいな出来事で、今はまさに感無量って感じですね……。『エヴァ』自体、学生のころにハマってましたし、『序』『破』でクレジットされたときも、もう何年も連絡をとっていない学生時代の友人たちからメールが来たり、反響がすごく大きかったので、自分的には大出世なんですね。出演者ながら、公開されるのが楽しみです。戦艦が出てくるとは思わなかったし、どんどん予想とは違う方向に行つて視覚的に派手になった感覚があります。全体像は今でも雲をつかむような感覚ですが、そのクリアでない感じがエヴァらしいな、とも思います。スミレ的には「これで終わってほしくない」という気持ちが強いです。もっと存在感や感情を出していきたいなど。今回、描かれなかった新オペレーターたちの14年分の過去も、番外編が何かでぜひ描いてほしいと思いますね。そんなところに行けるよう、みなさんにもスミレを愛していただければと思っています。

おおはら・さやか 神奈川県出身。東京俳優生活協同組合所属。代表作は『AION』(アリス役)、『XXXTOLIC』(寄原侑子役)、『FAIRY TAIL』(エルザ・スカレット役)など。



勝 杏里
(多摩ヒデキ役)

何回も何回も録ってるうちに緊張も萎縮も通り越し、自分が解放されて「なんだか今までと違う感じが自分の中から出てきたな」というところまで行きました。

——まず、参加のきっかけからお願いします。

勝 声質で何人かの中から選ばれたと聞いています。庵野監督からは「今風の危機感のない、ゆとり世代的に」と、役の方向づけをいただきました。確かに台本でも、プロフェッショナルのクルーのくせにマニュアル片手に「これでいいんだよな？」みたいな感じなんです。大学からボンと来たみたいなギャップは僕も面白く感じて、長年エヴァを演じられてきた諸先輩の中に入っていく僕の緊張感ともリンクしてるなど。

——多摩のキャラとしての第一印象は何かでしたか？

勝 絵を最初に見たとき、割とイケメンで、やや不真面目かなと思ったんです。でもセリフを読むうちに、マイペースな点や闘いに挑む気持ちがあったくできていないとか、ひ弱だったりする面が見えてきて、性格に興味が出てきました。僕の想像ですが、多摩は決して熱い人間で

はないと思うんです。どちらかと言えば真面目で気弱。伝達もカーンと張るようなセリフではなく、きちんと伝える。ヤバイときは気弱さを見せつつ、ちゃんとやる。最低限の訓練はされていても、まだまだプロになれていない人ですね。

——『エヴァ』に参加されることについては、いかがでしたしょう。

勝 最初にお話をいただいたときには、やはり身震いしました。僕が好きなアニメの中でも上位ですから、嬉しさが一番でありつつ、怖さや不安も感じましたし、他の現場でいっしょした方が大半とはいえ、エヴァのキャラクターと共演できる緊張感がありました。「エヴァの収録ってキビシイらしい」とか無責任な噂話もよく聞くわけです。でも、現実とは違って、いろんなパターンを録る妥協のない作業なんです。僕の場合、何回も何回も録ってるうちに緊張も萎縮も通り越し、自分が解放されて「なんだか今までと違う感じが自分の中から出てきたな」というところまで行きました。最初に台本を読んで持ってきたもの以上のものが、スタジオで出せた印象があります。

——特に新キャラは、性格づけに声も手がかりになつてるようです

勝 「いっしょにつくっている」って気持ちはずごく感じましたし、制約がある中、時間をかけて、試して試してという現場もなかなかないから新鮮でした。実写か舞台に近い感覚もあって、役者として強烈な体験になりましたね。

——庵野総監督とは、他にどんなやりとりがありましたか？

勝 「むしゃくしゃした気持ちのアドリブ(息)をひとつ入れてからセリフに入って」と振られて、やってみたらよりナマっぽい演技にできたとき、まさにライブ感だなと思いましたね。全員にそんな演出をした上で組み合わせも見られていますから、こうした積み重ねが「エヴァンゲリオンらしさ」になるんだなと。

収録中、庵野さんと会話したときに、「ただのオペレーターではなく、弱さとか人間味を出してほしい」という感じのお話をいただいたのも印象的でした。それで立体感が出るんだなと。んでもない非現実的なことが起きて危機感はあるんだけど、一人ずつの日常が描かれている。戦艦が出たとしても、エヴァっぱさの基

——最後に収録を終えてのご感想をお願いします。

勝 ともかく完成が楽しみです。「新クルーが乗っている」という空気感にこだわりましたので、あんなクルーこんなクルーがいて、それでこの船があるという、ピースのひとつになれたかなと。参加させていだいて光栄に思っていますし、今回の新鮮な経験は、僕の役者の今後に大きく役立つと思います。

かつ・あんり 東京都出身。賢プロダクション所属。代表作は「とある魔術の禁書目録」「土御門元春」「ダンボール戦機(仙道ダイキ役)」「美男ですな(ジェルミ)」など。



as Hideki Tama

Anri Katsu

伊瀬茉莉也 (北上ミドリ役)

唇が特徴的で前につきだしている感じの絵柄なので、それを意識してしゃべると「ゆとり」「ぽく聞こえるかなど。

——注目の新キャラですが、役柄はどうとらえましたか。

伊瀬 新メンバーの中でもミドリの立ち位置ははっきりしてて、いい意味で「今風」ですよね。庵野監督には「ゆとり全開で」と指示されたんですが、「その世代で良かった」と思いつつ、ナチュラルに演じました。世間一般が思う「ゆとり世代」をお芝居で具現化しようと。めんどくさがりで、ちょっと難しいことは嫌がる。目上の人に対してもタメグチで……といったような(笑)。

——キャラの外見はどうでしょう？

伊瀬 かわいいですね。髪型もメイクも「今風」で个性的です。唇が特徴的で前につきだしている感じの絵柄なので、それを意識してしゃべると「ゆとり」「ぽく聞こえるかなど。緊迫してる状況下で声が張りがちになると、庵野さんからダメが出るんです。「もっとダルそうに、早く帰りたい気持ち全開で」なんて(笑)。それでぶっさらばうに読むと、「いいねいいね！」と喜んでくださって。

——見た目も伊瀬さんに似てますよね。

伊瀬 嬉しいですよ。今は切ってしまったんですが、あのときは髪型も似てて、表情も近かったかもしれませんね。収録では「出た!! コアブロックです」のセリフに「やったぜ!」という達成感がありました。「破」までコアを目指して戦ってきた経緯を観客として感じてきたので、「EVAの世界」の中に入りこんでセリフを言えた瞬間が嬉しかったです。

——やはり「EVA」に出演することについての感慨は大きいですか。

伊瀬 実は今回の出演には、運命を感じています。高校生のとき『シユガシユガルーン』というアニメに出演して、原作の安野モヨコさんとキャストのみなさんでお食事したときに「旦那の庵野秀明です」と紹介されたんです。まだ怖いもの知らずだった私は、窓辺でワイングラス片手に飲んでいた庵野さんに「どんな作品をやられてるんですか?」って話しかけたんですよ。きつと周りは固まったと思います(笑)。庵野さんはものすごく優しく、「検索してごらんよ。僕、実写も撮ってるからこれあげるね」と、『ラブ&ポップ』のDVDをくださったんですね。それがものすごく嬉しくて、いつか庵野さんといっしょに仕事したいと、ずっと思っていました。

——収録現場の雰囲気はどうでしたか？

伊瀬 気張って臨んだのですが、やりやすく楽しく進んでいきました。逆に、いかに短いセリフでキャラクターを膨らませられるかという点には、難しさを感じ

ました。私にとっては緒方さんたち共演者の魂を削っていくお芝居を間近に観られたのが、ものすごく大きな刺激になっています。

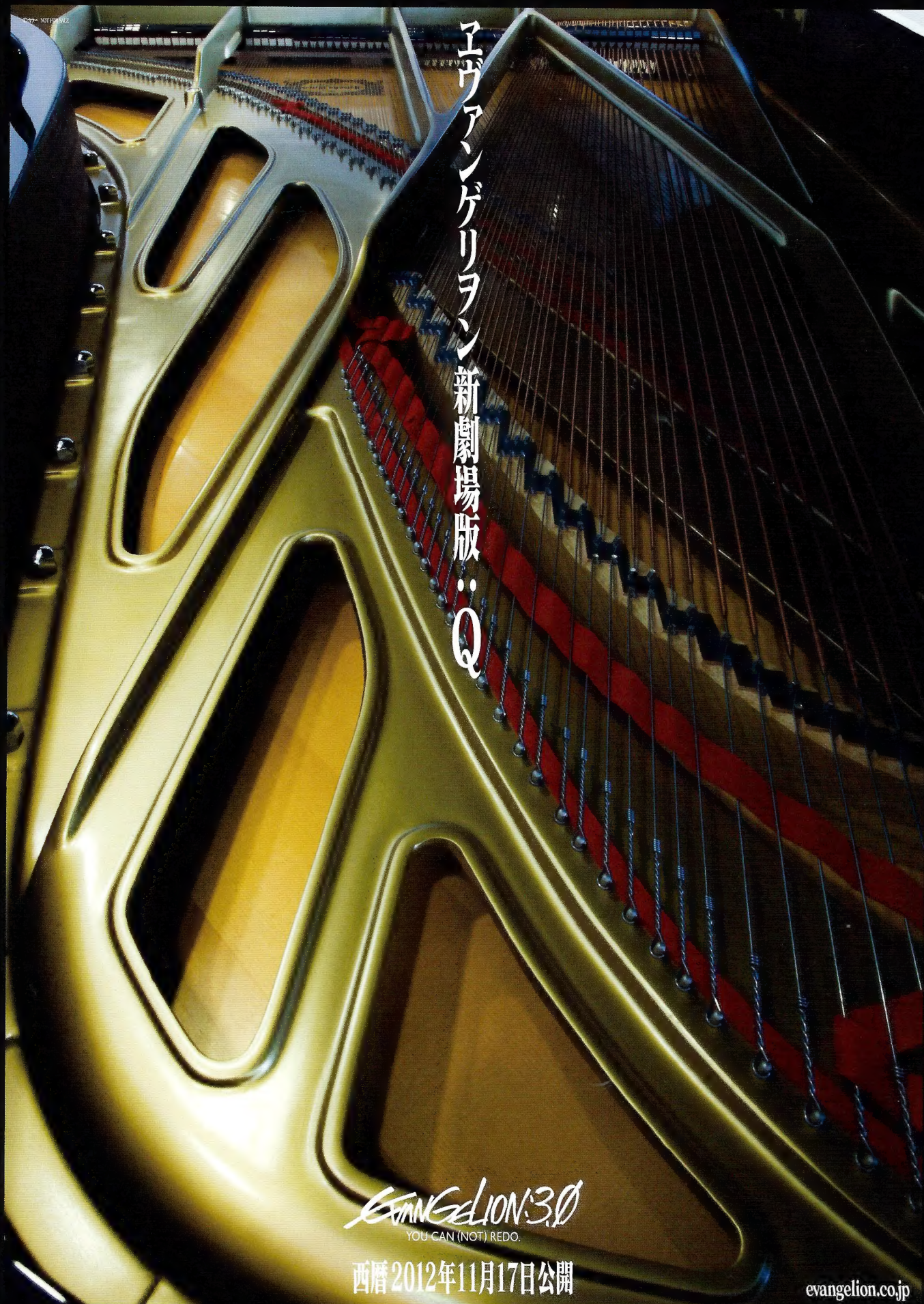
——物語の感想や、今後への期待があればお願いします。

伊瀬 誰もが抱えている闇の部分、逆に光に憧れる部分、思春期特有の葛藤や周囲への反発心といった内面が、シンジを通してよく描かれていると思います。きつと自分のことのように感じてしまうと思います。それは命がけの体当たりで演じられている役者のパワーがあつてこそだと実感しました。それプラス空気を、世界観を含めた庵野ワールドみたいなものに、多くの方たちが魅了されているわけですよね。私もそんなすごい作品には、なかなか出会えないと思っているので、エヴァンゲリオンの世界に関われることを本当に嬉しく思っています。自分にできる精一杯の生命をかけて、北川ミドリという一人の女性を丁寧に演じていきたいと思つてますので、ぜひみなさん応援よろしくお願いします。

いせ・まりや 神奈川県出身。アクロス エンタテインメント所属。代表作は『おプリキュア5』(春日野うらら・キュアレモネード役)、『HUNTER×HUNTER』(キルア・ゾルディック役)、『機動戦士ガンダムUC』(ロニ・カーベイ役)など。



Poster A



劇場用ポスターA (B全判・B2判) 2012.07.14

© 2012 GAINAX CO., LTD. ALL RIGHTS RESERVED.

エヴァンゲリオン新劇場版 .. Q



EVANGELION 3.0
YOU CAN (NOT) REDO.

西暦2012年11月17日公開

evangelion.co.jp

evangelion.co.jp